F33-B89bウ
1200500764415
33
B89
2
×複写

天路歷程

第二部

竹友藻風譯

始

「天路歴程」第二部初版正誤表

頁	行	誤	正
五五	一	娘は生　回復した。	娘は生氣を回復した。
一五三	六	アポルオン	アポルオン
一六五	五	彼方が	彼等が
一九一	一一	樂しみ合はふ	樂しみ合はう
一九六	八	マウシ	マシウ
二〇一	九	案内させやう	案内させよう
二二三	一四	私ども市で	私どもの市で
二六七	九	地圖を	地圖を
二七三	一三	身體（からだ）	身體（からだ）
二九一	二	開いまま	開いたまま

F33
B896
(2)

竹友藻風譯

天路歷程（バニヤン）

第二部

西村書店刊

目次

作者の道……三
天路歴程第二部……二三
附録　ジョン・バニヤンと「天路歴程」……二九七

國立圖書館
昭和 23. 5. 28
購入

「巡禮」第二部を世に送る

作者の道

いでや行け、小さき書よ、わが第一の
「巡禮」の顔をだに見せしところを
おとなへよ。どなたですか、と問ふ者あらば、
いらへせよ、クリスティアナでございます。
お入り、と言はば、その時、子どもすべてを
ともなひて入るべし、さて、適當に
その名、またその出でしところを告げよ。
おもざしや名には、かれらも覺あるべし。
若し、無しと言はば、再び尋ぬるがよし、
そのむかし、クリスチアンなる巡禮を

もてなしはせざりしか、さることあり、と、
その道を喜びたり、と、言はば、その時、
知らしめよ、これはその血のかかるもの、
さやう、その妻と子どもでございます。
告げよ、こは家と郷國をあとにして、
巡禮となりて、來世を求むるなり、と、
道すがら艱難になやみたりき、と、
晝も夜も困難にくるしむなり、と、
蛇を踏み、惡靈と戰ひ、さらに、
ここだくの禍にうち勝ちたり、と。
なほ、次に、巡禮の旅を愛して、
かの道の強く雄雄しき守護者なりしは
誰なるか、「父」の御旨を行すために
その、いつも、世にそむきたる次第を告げよ。

行け、さらに巡禮に旅のもたらす
かずかずのうましきものをかれらに告げよ、
知らしめよ、またその御手にゆだねられ、
かれら、はた、いかに「王」より愛でらるるかを。
いかによき邸を彼のそなへたるかを、
あらき風、高まる潮に逢ふとはいへど、
その「主」またその道を守れる者の
終に入るしづけさのめでたきことを。
わが初兒抱きしごとく、心と手にて
汝を抱き、かれらは汝と、汝が友に、
巡禮を愛するものと知らるべき
饗應と糧をもていたはるならむ。

異　議　一

されど、若しわが汝のものなることを
信ぜずば、いかにすべきや、その故は
「巡禮」とその名に倣ふものありて、
身を扮し、そのものらしく見せむとす、
またかかる手段に依りて、誰彼の
わかちなく、人の手と家に入り込む。

答

その通り、近ごろはわが「巡禮」に
似せかけて表題をぬすむものあり、
いや、われの名の半分と表題を
その書に附けてあざむき通すあり。
されど、そは誰にせよ、その顏かたち、
かれどちのわれにあらぬを宣言す。

若しかかる者に逢ひなば、かれらすべてを
前にして、なすべきは、今、使ふ者なき、
たやすくは眞似がたき、汝が生國の
言葉にて言ふべきことを言ふにあり。
かくてなほ汝を疑ひ、ジプシーのごと、
よこしまに國を汚して行き廻るもの、
埒もなきことをもて善き人人を
たぶらかす者と思はば、われを呼べ、
われは汝が「巡禮」なるを證せむ、
それのみか、わが「巡禮」は汝のみなるを
證せむ。それだけで事は濟むなり。

異議　二

しかも、その命も四肢も滅び果てよと

願へるに、彼を尋ぬることもやあらむ。
「巡禮」をかかる門邊にさがし求めて、
いやさらに怒をまさば、いかにすべきや。

答

恐れざれ、わが書よ、かかる杞憂は、
他なし、ただ根なき恐怖の根なるのみ。
「巡禮」の書は海越え、陸を經て、
旅せしも、富める、貧しき、國のいづれに
さげすまれ、戸の外に突き出だされし
はなしなど、われは聞きたることもなし。
フランスとフランダアスに殺し合ひあり、
「巡禮」は友、はらからと慕はるるなり。
人づてに聞けば、またオランダにても、

「巡禮」は金にまさると思ふ者あり。
ハイランド、アイルランドの荒夷らも
「巡禮」の親しきことをうべなひ得べし。
かのいとも進みたるニウ・イングランドに
いと深き愛を受け、手を加へられ、
新しき衣を纏ひ、玉をかざりて、
いやさらに顏と手足を示しつつ
歩み行く、わが「巡禮」の品よきを
歌ひ、また、語るもの、日に幾千人。
本國に近よりて見よ、わが「巡禮」は
恥やまた恐怖のいはれなきに似たり。
「巡禮」よ、よくこそ、と、都も鄙も
おしなべてもてなすのみか、わが「巡禮」の
側にあるか、集會に頭を出さば、

人人は笑を禁めがたきなり。
雅び男もわが巡禮を抱き、めぐしみ、
貴べり、げに大いなるものよりも。
さなり、また、よろこびて、雲雀の脚は
嵩よりもうまいよ、と、彼は言ふなり。
うらわかき貴女や、たをやめたちの
「巡禮」に寄する好意も並並ならず、
その簞笥、その懐と、そのこころ、
「巡禮」のものなる故は、いと無害なる
歌に依り、うつくしき謎を敎へて、
讀む勞に倍する益をあたふればなり。
氣强くも、なほ言ひ得べし、その或者は
黄金に遠くまさりて貴ぶなりと。
街を行く子供たちすら、わが「巡禮」に

逢ふことのありさへすれば、會釋して、
機嫌よくあれ、と言ひ、また言ふならむ、
彼こそは當時唯一のわかものなれ、と。
かつて見しことなき者も、人に聞きては
嘆賞し、その交を切に願ひて、
さまでよく彼の知りたる巡禮の
物語りするを聞かむと思ふなり。
それのみか、はじめのうちは彼を好まず、
痴れものよ、阿呆よと稱びし者には、
彼に會ひ、話を聞きし今は薦めて
親近の者に送る、と言ふもあるなり。
されば、わが第二部よ、頭出すを
恐るべき要はなし、先なる彼の
幸をのみ願へる、誰も汝を害せず、

そは、汝も、善く、豊にて、益あるものの
次の荷をもちて、後より、老に、若きに、
よろめける、たしかなる、者に行くなり。

異議　三

されど、その笑高きに過ぐ、と、言ふもの、
その頭雲に入れり、と、言ふ者もあり、
その言と話は昏く、ねらひどころを
それらにて捉へがたし、と、言ふもあるなり。

答

人は、その笑ふも、泣くも、水をたたへし
眼にて測り得べしと、言ひ得るならむ。
その心痛めるに、その空想は

おかしさに堪えぬやうなることもあるなり。
ヤコブ、そのラケルの羊つれたるを
見し時は、かつは接吻け、かつは泣きけり。
その頭雲に入れり、と、言ふ者あれど、
そは、知慧がそれみづからのマントルに
おほはるること、また見出でむとするものを
求むべく、心をそそることを示せり。
ほのぐらき言にかくされたりとおぼゆる
ことこそは、かくおぼめきて言ふ言草に
こめられしものごとを究むるやうに、
いやさらに、聖き心をさそふのみなれ。
われはまた知れり、意味昏きたとへの
譬喩より借らざりしものよりふかく
空想の中にその身を押し入れて、

心、また、頭をつよく捉ふるを。
それ故に、わが書よ、汝が旅路を
落膽にて妨げなせそ。見よ、行先は
敵ならで友なり。汝に座をゆづり、
汝が言葉、汝が巡禮を抱く友なり。
さらに、わが一の巡禮かくしおきしを
けなげなる二の巡禮の汝は示せり、
クリスチアン、鎖し行きしを、鍵をもて
柔和なるクリスティアナこそ開くなれ。

異議　四

されど、汝が書きぶりを嫌ふものあり、
ロマンスとかれらは思ひ、塵と棄つ。
若しかかる者に逢ひなば何とか言はむ。

そのわれを蔑むごとくさげすむべきか。

答

わがクリスティアナよ、かかる者に逢ひなば、
ねんごろに、汝はかならず挨拶すべし、
悪口に悪口をもて報ゆるなかれ、
その眉を顰めなば、乞ふ、笑みかへせ、
さまでにも輕蔑し、口鋭く言ふは、
性分か、悪しき噂に依ることならむ。
或者はチーズを嫌ふ、或者は魚を好まず、
或者は友を愛せず、家も、郷里も。
或者は豚におどろき、雛をさげすみ、
郭公や梟よりも雛を愛せず。
これらには、クリスティアナよ、勝手にさせよ、

汝を見ることをよろこぶ者を求めよ、
いやしくも爭はず、身を低くして、
巡禮のすがたにて對面すべし。
さらば、行け、小さき書よ、汝をもてなし
よくこそと言ふ者のすべてに示せ、
餘の者にとざして、汝の祕めたることを、
また願へ、汝の示せしものの祝福まれ、
かれどちの益となり、汝とわれより
いやまさる巡禮たるを望ましめよ、と。
さらば、行け、いざ、もろびとに汝が上を
告げて言へ、クリスティアナと申します、
巡禮になるといふのはどういふことか、
それを、今、四人の子らと、申し上げます。
行きて、また、汝と今、旅立ちするは

誰か、また、如何なる者か、かれらに告げよ、
言へ、これは隣人マーシーでして、
わたくしと、長い間の巡禮でした。
さあ、清いその顏に、無精なものと
巡禮の違ふところをごらん下さい。
嬢さんも、この人に依り、來るべき世の
大切なことを學つて貰ひませう。
ちよこちよこと、走る小むすめ、神に從ひ、
老いぼれの爺さん、神の鞭に遭ふ時、
若いもの、ホザナと叫び、老人は
あざけつたあの日のさまに似てゐます。
さて次に、白髮にて巡禮の地を
踏むを汝が見出だせし翁オネスト、
この人の清廉をこそ言ふべけれ、

十字架を善き主にならひ、負ひたることを。
髪白き或者をしてキリストを戀ひ、
その罪に泣かしむることもやあらむ。
またマスタア、フィアリング、巡禮に出で、
恐れ、かつ、泣きながら、孤獨のうちに
その時を過したりしを、かれらに告げよ。
彼は善き人なりき、氣は沈みしも、
彼は善き人にして、命を紹げり。
また告げよ、前へは行かず、後にのみ
歩きたる、マスタア、フィーブル・マインドを、
あはやその殺されなむとしたる時、
命とりかへしたるグレイト・ハートを、
この人に美はなけれども、まごころありて
その顏に眞の聖き色の見えしを。

さて告げよ、マスタア、レディ・トゥ・ホールト、
柑杖はつきたれ、過誤はいともすくなき。
告げよ、そのマスタア、フィーブル・マインドと
仲よくて、言ふところよく合ひたるを、
羸弱は運命なりしも、ひとりが歌ひ、
他はこれに躍る時さへありき、と、告げよ。
忘れされ、マスタア、ヴァリアント・フォ・ザ・トルース、
年こそはいと若けれど、剛勇の人、
何人に後を見せしこともなく、
たへかねて、グレイト・ハートと「疑惑の城」を
とりこぼし、ディスペーアを斃せしことを。
見遁すな、マスタア、ディスポンデンシーと
その女、マッチ・アフレイド、たとひふたりは
隱匿のマントルのもと（或人の目に）

神に棄てられしごとくに横たはりしも。
しづやかに、されどたしかに、行きて、終には
巡禮の主の友なるをふたりは知りぬ。
すべてこのことを世に告げ、さて、立ちかへれ、
わが書よ、かくて、ただ指を觸れなば、
足萎は躍り、巨人は恐ぢすくむ
妙音を奏づる絃に觸れよかし。
汝が胸にふかくをさめしかの謎を
惜しみなく出して解けよ、その他の
神祕なる條はそこにとどめおき、
想像の敏き人にぞ得さすべき。
いでや、この小さき書とわれは、小さき
この書とわれを愛する者の惠澤を
祈るかな、買ふ者のただその金を

失ひつ、棄てつ、と言はむことなきやうに、
この第二巡禮の出す果實の
おのおのの善き巡禮の好みにかなひ、
道を踏み迷へる者を說きすすめ、
正道に足と心をかへらしめよ、と、
心より祈るは、

作者、

ジョン・バニヤン

天路歴程

—夢の喩に依る—

第二部

懇切な同行諸賢、

しばらく前のことであるが、巡禮クリスチアンと、その「天上の國」へ向ふ危險な旅路について、私の見た夢を申し上げるのは、私には愉快なことであり、諸賢にはおためになることであつた。當時、また、私がその妻と子どもについて見たこと、かれらが彼と共に巡禮の旅に出かけるのを嫌ひ、その結果、彼は彼等を伴れないで出かけなければならなかつたことを申し上げた。もろ共に「滅亡の市」にとどまることに依つて出會はすと思はれた破滅の危險を冒す氣にはなれなかつたからである。それ故に、當時御説明申し上げたやうに、彼は彼等をあとにし

て出發したのである。

さて、たまたま、仕事の繁雜に依り、私は、彼が出かけたあの地方へ行くいつもの旅行を大分妨げられたり、さしとめられたりしたので、今までのところ、彼があとに殘した者についてお話しをすることが出來るやうに、更に進んで問合はせをする機會を得ることが出來なかつた。ところが、近頃になつてあの方に用事があつたので、再びあちらへ出かけて行つた。さて、あの場處から一マイルほど離れた森の中に宿をとつた上、眠つてゐる間に再び夢を見た。

それで、夢を見てゐると、ふと、一人の老人が私の横たはつてゐるところへさしかかつた。また、その人は私の旅をしてゐる道の或一部を行くことになつてゐたので、私は起き上つて、その人と一緒に行つたやうに思はれた。そこで、私どもが歩いて行つた時、旅人のよくするやうに、いつのまにか話に實が入つたやうであり、たまたま、その話はクリスチアンとその旅のことになつた、といふのは、この老人に向つてかういふ風にそれを始めたからで、——

もし、と、私は言つた、私どもの道の左手にある、あの下の方の市は何といふ市でせう。

すると、ミスタア、サガシティ(賢明氏)(それがその名であつたので、)は言つた、「滅亡の市」です、人口の多いところですが、極めて氣立のよくない、怠慢な類の人人が住み込んでゐます。

あの市だと思ひましたよ、と、私は言つた、私は先にあの市を通つたことがありますので、お話の噂が本當であることを存じてゐます。

サガシティ　遺憾ながら、本當なのです。私にしてもあすこに住んでゐる者のことをもつとよく言つて本當のことを語ることが出來ればいいと思ひます。

おや、それでは、と、私は言つた、あなたは善意の方ですね、善いことを聞いたり、話したりすることがお好きな人と見えますね。伺ひますが、しばらく前に、もつと高い地方へ向つて巡禮の旅に上つた、名をクリスチアンといふ、あの市の人の身の上に起つたことをお聞きになりませんでしたか。

サガシティ　聞いたかと仰有るので！　そりや聞きましたよ、それに、あの人が旅で出逢つたり、心に抱いたりした迫害や、困難や、戰や、俘囚や、叫びや、呻きや、恐怖や、心配のことを聞きました。それから、これを申し上げなければなりませんが、私どもの國では國中があの人のことで鳴り響いてゐるのです。あの人とその行爲のことを聞き、その巡禮の記錄を求めて手に入れなかつた家は殆んどありません。のみならず、その危險な旅はあの人の道へ多くの好意を寄せる人を贏ち得たと言つてもよいと思ひます。何故なら、この世にゐられた時には、

どんな人の口にかかつても莫迦でしたが、しかし、亡くなられた今では、すべての者にえらく持ちあげられるのです。それといふのは、聞くところに依ると、今ゐられるところでは立派なくらしをしてゐられるといふことなので。それでね、多くの者はあの危いことをやるのは御免だが、あの儲けには口に水がたまるといふのですよ。

そりやもう、と、私は言つた、かりそめにも眞のことを考へるなら、あの人は今ゐるところでいい生活をしてゐると思ふでせうよ。今は「命の泉」のほとり、また、その中で暮してゐるのですから。また、その有つてゐるものは勞苦や悲しみをしないで有つてゐるのです。嘆きといふものがそれにまじつてゐませんので。ですが、伺はせて下さい、人人はあの人についてどんな話をしてゐますか。

サガシティ　話ですか。あの人については妙なことを話してゐますよ。或人人はあの人が今白い衣服を着て歩いてゐるとか（ヨハネ默示錄三・四、六・一一）、黃金の鎖を頸にかけてゐるとか、頭には眞珠を鏤めた黃金の冠を被つてゐるとか言つてゐます。他の人人はあの人の道中に時時姿を示した「輝やけるもの」が僚友になり、あの人のゐられるところでそれと親しくしてゐられるのはここで隣り同志が親しくするやうなものだと言つてゐます。また、あの人のゐられる

ところの「王」は既に大さう立派なまた氣もちのよい住家を與へられた（ゼカリヤ書三・七）とか、毎日、その方とともに食べたり（ルカ傳一四・一五）、飲んだり、歩いたり、話したりしてゐるとか、又そこにゐるすべての者の「審判人」であられる方の微笑と寵愛にあづかつてゐられるとか、さういふことがあの人について、確信をもつて斷言せられてゐます。その上、その國の「主」でゐられる、あの人の「王」が近いうちにこの地方へおいでになり、何故彼の隣人たちはあのやうに彼を見下げたのか、また彼が巡禮にならうとしてゐることを見てとつた時に、あれほど冷嘲を浴せかけたのか、理由を言ふことが出來るならばその理由を知らうとしてゐられるといふことが或人人に依つて豫期せられてゐます。（ユダ書一四、一五）。それといふのは、と、その人人は言ふのですが、あの人は今大さうその「王」のいつくしみを受ける者となつてゐられますので、主君はクリスチアンが巡禮になつた時、その上に投ぜられた侮辱をすべて御自身に加へられたことのやうにふかく心にかけてゐられるのです。それも不思議なことではありません、あの人があれだけのことを敢へてしたのはその「王」に對して抱いてゐた愛のためなのですから。（ルカ傳一〇・一六）。

それは喜ばしいことだと思ひますよ、と、私は言つた、あの氣の毒な人のために喜ばしいこと

です、といふのは、あの人が今その勞役を息めて休息してゐられるといふこと（ヨハネ默示錄一四・一三）、また、あの人が今その涙の恩惠を喜悅を以て穫つてゐられること（詩篇一二六・五、六）、また、あの人がその敵の銃丸の屆かないところに達してゐられ、あの人を憎む者の力の及ばないところにゐられることを喜ばしく思ふのです。私はまた、かういふことの噂がこの國にひろく傳へられてゐることを喜ばしく思ひます、あとに殘された者にどんなよい結果を惹き起すか知れませんから。しかし、このことがまだ心の中に新しいうちに伺ひたいのですが、あの人の妻と子どものことを何かお聞き及びになりましたか。可哀さうに！　どうしてゐるかと思ひましてな。

サガシティ　誰のことですか。クリスティアナとその息子たちのことですか。あの人たちは多分クリスチアン自身とおなじやうに結構な身の上になつてゐると思ひます、といふのは、あの人たちは皆はじめのうちこそ愚かな眞似をして、クリスチアンの涙にも歎願にも頑として動かされなかつたのですが、あとから思ひ返したことが驚くべきはたらきをいたしました。その結果、荷物をとりまとめて、これもまた、あの人のあとに從ひました。

ますます結構なことですな、と私は言つた、何ですか、妻も子どもも、皆ですか。

サガシティ　ほんたうですよ、當時そこに居合はせて、顚末をよく知つてゐますから、そのことならお話をすることが出來ます。

すると、私は言つた、では、ほんたうのこととして人に言つてもいいわけですな。

サガシティ　斷言せられてもさしつかへはありません。あの人たち、御婦人と四人の男の子が巡禮の旅に上つたといふことは。それに、（お見うけするところ、私どもは）よほどの道程を御同行するのですから、その一部始終をお話しすることにいたしませう。

あのクリスティアナは（これが子どもたちと巡禮の生涯を始めた日から、あの人の名でしたので、）夫が川を越えて行き、その後杳として音沙汰がなくなつてから後、心の中でやうやく思に沈み始めました。第一、その夫を失つたといふこと、またその關係に依る愛の絆が二人の中にふつつりと絶えてしまつたといふことを。それはね、と彼は私に言つた、御存知のやうに、人の本性で、生き殘つた者が愛の深い關係にあつた者のなくなつたことを思ひ出す時にはどうしてもかすかすの悲しい思案に耽るのですよ。それで、この夫の思ひ出はとかく涙の種になりました。が、こればかりではなかつたので。といふのは、クリスティアナはまたその夫に對する見苦しい擧動が二度と夫を見なくなつた一つの理由ではなかつたか、また、さういふ意味で、

夫は自分から奪り去られたのではなかつたか、と考へ始めたのです。かう考へると、親しいつれあひに對するそのすべての不親切な、道にはづれた、けがらはしい仕うちが、群をなして、心の中にこみあげ、それがまた良心をくるしめ、罪の意識を以て重荷を負はせるのでした。その上に、夫の立つてもゐてもゐられぬやうな呻き、目も爛れるやうな涙、われとわが身を哀しむ聲、また一緒に行くやうにと、あの人と子供たちに言葉をつくして歎願し、愛をこめて說き落さうとしたのに對して、いかに冷酷であつたかといふことを想ひ起して、心は千千に碎かれるのでした。そればかりか、重荷が背中の上にかかつてゐた間を通じてクリスチアンがあの人に言つたことや、その前で行つたことの一つとして、電光のやうにその上に立ち返り、その心臟の薄膜を眞二つに引裂かないものはありませんでした。殊にあの『どうしたら救はれるだらう』といふ苦しい絶叫がいかにもうらがなしくその耳に鳴り響くのでした。

そこで、あの人はその子供たちに言ひました、息子たちよ、私どもはもう駄目です。私はお前たちのお父さんに對して罪を犯しました。それでお父さんは行つておしまひになつたのです。私どもを連れて行きたいと思はれたのですが、私は行かうとしなかつた。ああ、とクリスティアナは言ひました、御一緒に行くのが私どもの運命であつたならばどんなによかつたか。さう

なれば、今私どもの身の上に起ると思はれることに立ちまさつて、私どもの境遇は結構なものとなつてゐたでせう。何故なら、お父さんのなやみについて、お父さんの抱いてゐられる愚かな空想から出たものだとか、憂鬱の病に侵されてゐられたのだとか、さきにはあさはかにも想つたのですが、今はそれが他の原因に由來するものであること、といふのは、光の「光」がお父さんに與へられ（ヤコブ書一・二三—二五）、その助けに依つて、罪の陷穽をお免れになつたのであるといふことが分り、それが心から離れないのです。すると、一同の者は再び泣いて、『ああ、情ないことになつたものだ』と叫びました。

次の夜、クリスティアナは夢を見ました。すると、どうでせう、一枚の廣い羊皮紙がその前に開かれ、その中にはあの人の行の總數が記されてあるのを見たやうに思はれました。また、その時期は極めて暗澹としてあの人の上に臨んでゐるやうに思はれました。そこで、その眠の中で『主よ、罪人なるわれを憫れみたまへ』と叫び、小さい子供たちはその聲を聞きました。（ルカ傳一八・一三）。

この後、二人の極めて醜い顏の男がその寢床の側に立つて、かう言つてゐるのを見たやうに思ひました、この女をどうしてくれやう。こいつは覺めてゐても、眠つてゐても、憐憫を求め

て叫んでゐる。これをこのままにさせておけば、われわれはこの女の夫を失つたやうに、こいつをも失つてしまふ。だから、何とか手を施してこの女をこれから後にあるべきことを想ふことからはらひ退けなければならぬ、でないと、全世界をあげてもこの女が巡禮になることをどうともすることが出來ない。

さて、あの人は大汗をかいて目をさまし、また戰慄に襲はれました。が、しばらくして再び眠りに落ちました。すると、その夫のクリスチアンが祝福の場處にあり、多くの不滅なるものの間に、手には竪琴をもち、頭のぐるりには虹をいただき、とある玉座の上に坐つてゐるものの前に立つて、それを奏でてゐるのを見たやうに思ひました。また、彼がその頭を下げ、顏を王の脚下にある鋪石の方に向けて、この場處へお導き下さいましたことをわが主、わが王に心より御禮申し上げます、と言つてゐるのを見ました。すると、周圍に立つてゐる者の一つの群は歡呼の聲をあげ、その竪琴をかき鳴らしました。が、クリスチアンとその仲間のほか、生きてゐる者には誰にも、何を言つてゐるのか分りませんでした。

あくる朝、あの人が床から起き上つて、神に祈つた上、しばらく子供たちと話をしてゐますと、或人が強く戸を叩きましたので、それに對してあの人は申しました、神の御名に依つて來

られたのでしたら、お入り下さい、と言ひながら。そこで、その人はアーメンと言ひました、それから戸を開き、『平安この家にあれ』と言つて、挨拶をいたしました。それを終ると、その人は言ひました、クリスティアナよ、あなたは何故私が來たかといふことを御存じですか。すると、あの人は顏を赤らめて慄へ、またその心は、この人が何處から來たのか、どんな用向で來たのかといふことを知りたいと思ふ心もちで一杯になりました。そこで、その人は言ひました、私の名はシークレット〔內證氏〕です、私は貴いものと共に住んでゐます。私の住んでゐるところで、あなたがあすこへ行く願をもつてゐられるやうだといふ話がありました。またあなたが夫の道に逆らつて心を冷酷にしたことや、このあなたの幼兒を無知のままにしておいたといふことなど、あなたの夫に對して前に行つた惡事に氣がついてゐられるといふ報告がありました。クリスティアナよ、「慈悲深い方」が私をお遣はしになり、自分はいつでも宥すところの神であり、罪過を赦すことを幾度も繰返へすのを喜悅とするものであるといふことをお告げになります。その方はまた、あなたを大御前に、その食卓に、招待せられること、またその館の肥えたるものと、あなたの父ヤコブの產業を以てあなたを養ふつもりであることを知つて貰ひたい、と言つてゐられます。

そこにはあなたの夫（であつた）クリスチァンが、更に大勢の者、その友だちと、仰ぎ見る者に命をさづけ給ふあの御顔をつねに眺めてゐられます。彼等は皆あなたの足音が「父」の閾を踏み越えるのを聞く時には喜ぶことでせう。

クリスティアナはこれに對して大いに恥ぢ入つてしまひました、それで地に首を垂れてゐますと、この「訪問者」は言葉をすすめて、言ひました、クリスティアナよ、ここにまたあなたへ宛てた手紙があります、それは私があなたの夫の「王」からもつて來たものです。そこで、あの人はそれを受けとり、それを開きました、が、それは世にもすぐれた香膏のやうに匂ひました。（雅歌一・三）。またそれは黄金の文字で書かれてありました。手紙の内容は、「王」はあの人が夫クリスチァンの行つたやうに行ふことを望んでゐられる、それがその都に行く道であり、また、とこしへの喜悦をもつてその御前に住む道であるから、といふことでした。これを見て、あの善良な婦人はすつかり感激してしまひました。そこで、その訪問者に對つて叫び出しました、もし、あなた、あなたは、私どももまたこの「王さま」を拜みに行くことが出來ますやうに、私と私の子供たちを伴れて行つて下さいませんでせうか。

すると、「訪問者」は言ひました、クリスティアナよ、甘いものよりさきに苦いものがありま

すよ。あなたは、あなたの前に行つた者がせられたやうに、困難を經て、「天の都」に入らなければならないのです。大野を越えて、むかふに見える潜り門へ行きなさい、あれがあなたの上つて行かなければならぬ道の始に立つてゐるのです、それで、私は道中のすべての幸福を祈ります。又、この手紙を胸に收めておかれ、空で誦むことが出來るまで、御自身のため、またお子たちのためにそれをお讀みになることをお勸めいたします、といふのは、あの巡禮の家にゐられる間にお歌ひにならなければならぬあなたの歌のひとつなのですから。（詩篇一一九・五四）。それにまたこれをもつと先の門でお渡しにならなければなりません。

さて、私は夢の中で、この老紳士は、私にこの話をした時、自らその話で大分動かされてゐるのを見た。彼は、その上、話をすすめて言つた、そこで、クリスティアナはその子供たちを呼びあつめ、彼等にむかつてかういふ風に話しかけました、息子たちよ、お前たちも氣がついてゐたことと思ひますが、私は近ごろ、お前たちのお父さんの死について、靈魂の中でずゐぶんなやみを受けて來ました。といふのは、かりそめにもお父さんの幸福を疑ふからではありません。機嫌よくしてゐられることを今では十分に承知してゐますから。私は私自身の身の上とお前たちの身の上を思ふことで心を痛めてゐたので、それは本來なさけないものであることを本

當に信じてゐます。それからまた、お父さんが苦しんでゐられた時の私の仕うちが私の良心には大きな重荷でした。私はお父さんに逆つて私自身の心もお前たちの心も冷酷にしました、さうして御一緒に巡禮に出かけることをおことはりしたのです。

かういふことを想つて今が今にも死ぬるところでした、昨日見た夢がなかつたならば、今朝このお目にかかつたこともない方が私に與へて下すつた激勵がなかつたならば。さあ、子供たちよ、荷物をとりまとめて「天の都」へ導く門へ行きませう、お前たちのお父さんに會ふことが出來るやうに、また、あの國の律法に從つて、お父さんやお友だちの方と一緒に平和のうちに暮すために。

すると、子供たちは母の心がさういふ風に傾いてゐることを喜ぶあまり、わつと涙を流して泣き出しました。そこで、訪問者は彼等にわかれを告げました。さうして彼等はその旅に出かけるための支度をしました。

しかし、かうして、出かけやうとしてゐるところへ、クリスティアナの隣人であつた婦人の中の二人がその家に來て、戸を叩きました。それに對してクリスティアナは前のやうに言ひました、神の御名に依つておいでになつたのでしたら、お入り下さい。これを聞いて婦人たちは

あつけにとられました。ついぞかういふ種類の言葉を聞いたこともなければ、クリスティアナの唇から洩れるのを認めたこともなかつたのですから。でも、二人は入つて來ました。が、どうでせう、二人はこの善良な婦人がその家を立ち去らうとして用意してゐるのを發見したのでした。

そこで、二人は口を切つて言ひました、お隣さん、これは一體どうしたことでございますの。

クリスティアナはそれに答へてその名をミセス、ティモラス〔臆病夫人〕といふ、二人の中の年上の者に言ひました、旅の用意をしてゐるところでございます。（このティモラスはクリスチアンが「困難の山」で逢ひ、獅子が恐しいからと言つて後戻りをさせやうとした者の女でした。）

ティモラス　何の旅ですか、伺はせて下さいな。

クリスティアナ　主人のあとを追うてまゐりますのよ。かう言つて、あの人は泣き出しました。

ティモラス　まさかさうではございますまい、ねえ、お隣さん。可哀さうなお子たちのために、でも、そんな、女らしくもない、わが身を棄てるやうなことをなさいますなよ。

クリスティアナ　いえ、子供たちは私と一緒にまゐります。一人もあとに殘つてゐるといふ者はありません。

ティモラス　どんなことで、それとも誰に依つて、このやうな氣もちにおなりでしたか。心から不思議でなりませんわ。

クリスティアナ　ああ、お隣さん、若し私が存じてゐることを御存じでしたら、きつとあなたでも私と一緒にお出かけになると思ひますよ。

ティモラス　一體どんな知識をおもちになられたのですか、かうしてお友だちからあなたの心を引き離したり、何處とも知れないやうなところへ行くやうに誘つたりするのは。

クリスティアナ　すると、クリスティアナは答へました。私は主人が私のもとを立ち去つて以來、が、特にあの人が川を越えて以來といふものはひどく心を苦しめてゐました。しかし、何よりも私をなやましたものはあの人がなやんでゐた時のあの人に對する私の意地のわるい仕うちでした。それに、私は今あの頃のあの人と同じやうになつてゐます、巡禮に出かけることのほかはどんなことをしても駄目なのです。昨夜も夢の中であの人を見ました。ああ、私の靈魂があの人と一緒だつたらどんなにかよかつたでせう。あの人はあの國の「王」の御前に住んでゐます。その食卓で飲食を共にしてゐます。不滅なるものの友となつてゐます。また、住むための家を賜はつてゐますが、それに較べると地上の最も立派な宮殿でも、私には廢屋としか思はれません。（コリント後書五・一―四）。その場處の「王さま」は又、御許へまゐつた時のおもてなしの約束を添へて、お使を下さいました。御使の方は今しがたここへお見えになりました、さうして、來るやうに、とのお招きのお手紙をもつて來て下さいました。さう言つて、あの人はその手紙をとり出し、それを讀んで、さて、二人に言ひました、さあ、これをどう思はれますか。

ティモラス　まあ、そのやうな困難を冒すやうに、あなたと御主人の心をとらへた狂氣の沙汰といふものは何といふことでせう。あなたはきつと御主人が、それも道に進まれた第一歩ともいふべきところで、出會はされたことをお聞き及びになつてゐると思ひます、それは、御一緒にお出かけになつたのですから、私どもの隣人のオブスティニットさんが今でも證人になつて下さることです。さう言へば、ブライアブルさんも御一緒でしたが、お二人とも悧巧な方でしたから、それ以上は行くことを恐れて行かれませんでした。私どもはまた、なほその上に、あの方が獅子だの、アポルオンだの、死の影だの、その他いろいろなものにお出合ひになつた

ことを聞いてゐます。「虚榮の市」で遭はれた危險にしたところでお忘れになつてはならないことです。何故なら、あの方が、男でゐてさへあんなひどい目にお遭ひになつたとすれば、たかがかよわい女の身のあなたに何をすることが出來ませう。それからまた、この可愛い小さい方方があなたの子どもであること、あなたの肉であり、骨であることを考へてごらんなさい。ね、ですから、あなたはわが身を棄てるほど向ふ見ずなことをなさるにしても、身を分けた者のためを思つて、お家にとどまつて下さい。

しかしながら、クリスティアナはこの人に言ひました、お隣さん、私を誘惑して下さいますな。私は今、利益を得るための價をいただいてゐます、それで若し機會に乘じて手を打つだけの勇氣をもたないなら、とんでもない大莫迦者になるでせう。また、途中で遭ふだらうと仰有るあのすべての困難は、勇氣を挫くどころか、却つて私の考が正しいことを示してゐます。『苦いものは甘いものより先に來なければなりません。』またそれは甘いものを一層甘くするのです。それで、あなたは、私が申しましたやうに、神の御名に依つて私の家へ來られたのではないのですから、どうか出て行つて下さい、この上、私の心をかき亂して下さいますな。

すると、ティモラスもあの人を罵つてその連に言ひました、いらつしやい、マーシー〔仁〕

私どものお勸めやお附合をお見下げになるのですから、勝手にさせておきませう。しかしマーシーはじつと立つてゐて、容易にその隣人の言葉に從ふことが出來ませんでした、が、これには二重の理由がありました。第一、その憐憫の情は沁沁とクリスティアナのことを思ひました。そこで、この人は心の中で思ひました、若し私の隣人がどうしても出て行くといふのであれば、道をすこし一緒に行つて助けになつてあげませう、と。第二に、その憐憫の情は沁沁と自分の靈魂のことを思ひました。それで、また、その心の中で思ひました、私はもう少しこのクリスティアナと話をしてみることにしませう、若しその言ふことに眞と命があるといふことが分つたならば、私もまた喜んで一緒に行くことにしませう、と。それ故にマーシーはその隣人ティモラスに答へて、かういふ風に口を切りました。

マーシー　お隣さん、今朝はあなたと御一緒にクリスティアナを訪ねて來たのですけれど、御覽の通り、この方は御自身の國に最後のお別れをしようとしてゐられるのですから、私は、このうららかな朝、道をすこし御一緒に歩いて行つて途中のお助けをしたいと思ひます、と。しかし、第二の理由のことは言はないで、心の中に收めておきました。

ティモラス　おや、あなたも莫迦な眞似をしに出かけるおつもりと見えますね、でも、間に

合ふうちに注意して、悧巧におなりなさいよ。危險の外にある間は外にゐるのですが、一旦中に入つた時には中にゐるのですからね。かう言つて、ミセス、ティモラスはその家に歸り、クリスティアナは旅路に上りました。しかしティモラスがその家に歸つた時、この人はその隣人の中の或もの、すなはちミセス、パッツ・アイス、ミセス、インコンシデレイト、ミセス、ライト・マインド、ミセス・ノウ・ナッシング〔蝙蝠眼夫人、無分別夫人、浮氣夫人、物不知夫人〕を呼びに遣りました。そこで、この人たちがその家に來た時、早速クリスティアナとその思ひ立つた旅の話をしました。さうして、かういふ風にその話を始めました。

ティモラス　皆さん、今朝はこれと言つてすることがなかつたので、クリスティアナを訪ねてあげるために出かけました。で、戸のところへ行きました時、御存じのやうに、私どもの習慣ですから、戸を叩きました。すると、あの人は神の御名に依つておいでになつたのでしたらお入り下さい、と答へました。で、何事もないものだと思つて入つて行きましたの。ところが入つて行つて見ると、あの人は市から出發する用意をしてゐますのよ、あの人も、子供たちも。で、それは何のことですか、と尋ねましたの。すると、仰有るには、かいつまんで申しますと、御主人がなすつたやうに、今、巡禮に出かけるおつもりなんですつて。それからまた、あの方

が見た夢のことや、御主人のおいでになる國の王さまがそこへ來るやうにといつて招待狀を送られた、といふことをお話しになりました。

すると、ミセス、ノウ・ナッシングは言つた、で、どうなんです、あの方はいらつしやるとお思ひになつて？

ティモラス　さうなんですよ、どんなことがあつても行くのですよ。それはこのことに依つても分るやうに思ひますわ。といふのは、あの人が家にとどまつてゐられるやうに說きすすめるための私の大きな論據（すなはち、あの人が途中でお遭ひになると思はれる困難）があの方を旅路にすすめる一大論據なのですから。『苦いものは甘いものよりも先だ』つてね、ちやんと言葉數をそろへて仰有るのよ。そればかりか、だからこそ甘いものは一層甘くなるのですつて。

ミセス、パッツ・アイス　まあ、目先の見えない、愚かな女つたらありやしない、とこの人〔註。ミセス、パッツ・アイス〕は言ひました、御主人のくるしみを誡にしないのでせうか。私は、あの御主人にせよ、もう一度ここに來られるなら、怪我のない身に滿足してゆつくりと休み、無駄骨を折つてあんなに澤山の危險を冒すやうなことは決してなさらないだらうと思ひますわ。

ミセス、インコンシデレイトもまた、答へて、言つた、そんな變に氣違じみた莫迦者は市からさつさと出て行くがいいのだわ。私やあの人が行つてくれたので厄除けをしたと思ひますよ。今住んでゐるところにとどまつてゐて、そんな考をもつてゐるとしたら、その側で誰が靜かに暮らすことが出來ますか。始終きなきなして人附合がわるいか、でなければ、悧巧な者が聞いちやゐられないやうなことを話すでせうから。ですから、私はあの人が出發せられたことをすこしも殘念だとは思ひません。出て行つて貰ひませうよ、その代り、もつといい人に來て貰ひませうよ。妙なことを考へる莫迦者が住むやうになつてからといふものは、おもしろい世の中がなくなつてしまひました。

すると、ミセス、ライト・マインドも次のやうに言葉を添へました——さあ、こんな話は片付けてしまひませう。昨日私はマダム、ウォントン〔多情夫人〕のお宅へまゐりました、そこでは小娘のやうにはしやぎましたのよ。だつてさ、誰がゐたと思し召す、私でせう、それに、ミセス、ラヴ・ザ・フレッシュ〔愛慾夫人〕そのほか二三人、それからミスタ、レチャリ〔好色氏〕、ミセス、フィルス〔猥褻夫人〕まだ他にもありました。それで、音樂をやつたり、舞踏をしたり、その他快樂を滿たすことは何でもしました。何と申しても、御主人の夫人は立派な嗜

のおありになる貴婦人でいられますし、ミスタ、レチャリはこれに劣らぬ粋な方ですからね。

この頃にはクリスティアナも大分旅路に進み、マーシーはあの人と共に行きました。かうして二人は行き、子供たちもそこにゐましたので、クリスティアナは談話を始めました。それでね、マーシー、とクリスティアナは言ひました、すこしの道でもつきあつてやらうと、私と一緒にお家から外へ足を踏み出して下すつた、このことは思ひも寄らなかつた御親切だと思ひますよ。

マーシー　すると、若いマーシーは言ひました、（この人はまだほんの若い娘でしたので、）あなたと行くのが本當だと思つたら、決して市へは近寄りませんよ。

クリスティアナ　ちやあ、マーシー、とクリスティアナは言ひました、私と運を共にすることになさいな。私は私どもの巡禮の旅路の果がどういふものかといふことをよく承知してゐます。私の夫はスペインの鑛山にある黃金のすべてに代へても行けないやうなところにゐるのです。あなたただつて斥けられはしませんよ、あなたは唯私の招待に依つて行くのですけれど。私と私の子供たちにお使を下すつた王さまは憐憫を喜んで下さる方です。それに、あなたさへその氣におなりなら、私はあなたを雇つてあげます、召使として連れて行つてあげます、でも、

あなたと私の間ではすべてのものを共通にもつのですよ。ね、とにかく、私と一緒にいらつしやいよ。

マーシー　でも、どうして私までも迎へていただけるといふことを確かめることが出來ませう。それが分つてゐる人からさういふ望をもつことにさへなれば、何もとやかういふことはありません。どんなにいやな道でも助けることのお出來になるものに助けられて、私はまゐりますよ。

クリスティアナ　それではね、親切なマーシー、あなたのなさることを教へてあげませう。私と一緒に潜り門までいらつしやい、あすこで、あなたのためにこれから先のことを尋いてあげませう。で、若し、あすこで、あなたの氣もちを引き立てるやうなものにお會ひにならないなら、そりや私だつておうちへお歸りになるのも仕方がないと思ひますよ。それから、かうして、私どもの道につきあつて私や子供たちにつくして下すつた御好意には御禮をいたしますよ。

マーシー　では、そこまでまゐりませう。そしてそれからのことを天に任せませう。天の王さまの私のことを思し召す通りにそこで私の運命が定まるやうに、「主」がおゆるし下さることを祈ります。

クリスティアナはそこで心ひそかに喜びました、といふのは、ただ道連が出來たといふばかりではなく、この哀れな娘の心を動かしてその救を慕ふやうにさせたからです。そこで、二人は連れだつて行きました、すると、マーシーはさめざめと泣きました。すると、クリスティアナは言ひました、何故、私の同人さんはそのやうに泣くのですか。

マーシー　ああ、とこの人は言ひました。正しく物を思ふ人でさへあれば、私どもの罪深い市にまだ殘つてゐる私の不憫な身うちの者の身の上や境遇を誰が嘆かずにゐられませう。それに私の嘆きを一層悲しくさせるのはあの人たちが教師をもつてゐないこと、また來るべきことを教へる者のゐないことです。

クリスティアナ　憐憫の情は巡禮に適はしいものです。あなたは私の夫クリスチアンが私をあとにした時に私のためにしたのと同じ思をあなたの親しい人人のためにしてゐられるのですよ。あの人は私があの人を構ひもせず、敬ひもしないのを哀しみました。しかしあの人の主、また私どもの主はその涙をあつめてそれを御自身の壜の中に收めておかれました。それで、私もあなたも、またこの可愛い子供たちも、その涙の果實と利益を穫りとつてゐるのです。マーシー、私はあなたのその涙は滅びないと思ひます。何故なら、「眞」はその歌の中で、『涙と

ともに播くものは歡喜とともに穫りとらん』と申しました。(詩篇一二六・五)。それで、貴い種子をたづさへ、『出で行きて涙を流すものは、かならずその禾束をたづさへ、よろこびてかへり來らむ』。(詩篇一二六・六)。

すると、マーシーは言ひました。

いともたふときみかみよ、きみの
　みこころならば、みちびきたまへ。
かみのみかどへ、ひつじのをりへ、
　きよきみやまをのぼりて、われを。
わがみのうへはいかになるとも、
　このみにあまるめぐみと、きよき
みちよりまよひ、まさみちそれて、
　ふみゆくことをゆるしたまふな。
わがあとにせしうからやからを
　つどはせたまへ、こころをつくし、

主よ、かれどちにいのらせたまへ、
　その主のものとなるをねがひて。

さて、私の老友は話をすすめて言つた。しかしながら、クリスティアナが「絶望の泥沼」まで來た時、あの人はやをら立ちつくしました。何故なら、とあの人は言ひました、これは私のなつかしい夫が危く泥で窒息しさうになつたところです。あの人はまた、この場處を巡禮のためによくするやうにとの「王」の御命令にも拘らず、以前よりは大分わるくなつてゐるのに氣がつきました。そこで、私はそれは本當であるかと尋ねた。さうなのですよ、と、その老紳士は言つた、殘念ながら本當なのです。といふのは、「王」の勞役者であるやうな風をしたり、「王」の大通りを修繕してゐるのだと言ふ者の中には石の代りに泥や汚物をもつて來て、修繕するどころか、却つて害ふものがずゐぶんありますから。で、ここでクリスティアナはその子供たちと共に立ちつくしました。しかしマーシーは言ひました、さあ、思ひ切つて行きませうよ。唯、氣をつけませうね。そこで、一同はよく踏石を見ました、それからよろめきながらも、どうにかしてとにかく越えて行きました。

それでもクリスティアナはすつてのことで落ち込むところでした、それがまた一度や二度で

はなかつたのです。さて、越えてしまふとその時を移さず、彼等に向つて言ふ言葉を聞くやうに思ひました。『信ぜし者は幸福なるかな、主の語りたまふことは必ず成就すべければなり。』（ルカ傳一・四五）。

そこで、彼等はまた先を急ぎました。さうしてマーシーはクリスティアナに言ひました、あなたのやうに潜り門で懇切な款待を受けることを望むためのよい理由をもつてゐたならば、どんな「絶望の泥沼」でも私の勇氣を挫かないだらうと思ひます。

それはね、と對手は言ひました、あなたにはあなたの痛いところがお分りになつてゐられます、私には私の痛いところが分つてゐます。それに、あなた、旅路の果につくまでには皆相當のわざはひに遭ふと思ひますよ。

だつて、さうでせう、私どものやうに立派な榮光に到達しようと企て、私どものやうな幸福をこのやうに羨まれてゐる者は、私どもを憎む者が加へ得るくるしみやなやみに依つてどんな恐怖や威嚇に遭ふか分らないではありませんか。

ここまで來た時、ミスタア、サガシティは私を殘して立ち去り、私はひとりで夢を見てしまふことになつた。それで、私はクリスティアナとマーシーと、子供たちが、一同うちそろつて

門へ登つて行くのを見たやうに思つた。そこへ來た時、どういふ風にして門を訪れなければならないか、開けて下さつた人に何と言へばいいかといふことについて、ちよつとしばらくの間の討議にとりかかつた。結局は、クリスティアナは年長者であるから、入門を求めて戸を叩くこと、又、他の者に代つて門を開けた人に話をすることに極まつた。そこで、クリスティアナは叩き始めた。さうして、その夫のしたやうに、叩いてはまた叩いた。しかし、答へる者はなく、その代りに彼等は皆犬の吠えかかつて來るのを聞くやうに思つた。犬、それも大きな奴である。で、これが女たちと子供らを恐がらせた。また、しばらくの間はそれ以上思ひ切つて叩く氣になれなかつた、そのマスティフ〔註。猛犬〕が飛びついて來はしまいかと思つて。それで、今、彼等は心緒亂れて殆んどなすところを知らなかつた。犬が恐しいので、叩く氣にはなれない。門の「番人」が歸つて行くところを見つけて、機嫌を悪くすることを恐れるので、引き返すことも出來ない。たうとうもう一度叩くことを考へ、始に叩いたよりも激烈に叩いた。すると、門の「番人」が言つた、どなたですか。そこで、犬は吠えることを止め、彼は彼等に門を開いた。

すると、クリスティアナは低く御辭儀をして言つた、わが主よ、貴い御門を叩きましたこと

につきまして、婢女どもをお氣にさへさせられませぬやうに。

すると、「番人」は言つた、どこからおいでになつたのですか、御用は何ですか。

クリスティアナは言つた、私どもはクリスチアンの來ましたところから來たもので、あの人と同じ用向で來たのでございます。と、申すのは、おゆるしを願へますならば、「天の都」へ導くこの御門に御慈悲をもつて入れていただきたいのでございます。また、主よ、次にお答へいたしますことは、私は、今、上なる國にまゐつてをりますクリスチアンのかつての妻クリスティアナでございます。

それを聞くと門の「番人」は驚いた、おや、ついさきごろまではさういふ生涯を嫌つた方が巡禮になられたのですか、と、言ひながら。すると、この人は頭を垂れて言つた、はい、それに、私のこの可愛い小さいものもさやうでございます。

すると、彼はその手をとつて中に入れ、それからまた『幼兒の我に來るを許せ』(註。ルカ傳一八・一六)と言つた。それと共にその門を閉ざした。かうした後、上の方、門の上にゐる喇叭手に歡呼の聲と歡喜のための喇叭の音でクリスティアナを迎へるやうに呼びかけた。そこで、彼はそれに從ひ、音を鳴り響かせ、その妙なる調を以て空中を滿たした。(ルカ傳一五・七)。

さて、この間を通じてマーシーは外に立つてゐた、斥けられたのではないかと案じて、おのきながら、また泣きながら。しかし、クリスティアナが自分と子供たちのために入門の許しを得た時、この人はマーシーのために執成しを始めた。

クリスティアナ　わが主よ、私はおなじ理由でここまでまゐりました一人の道連をまだ外に立たせて居ります。私は主人の王さまから來るやうにとのお迎をいただいてゐるのですが、このものはお迎をいただかないで行くと思つてゐますので、よほど心を沈ませてゐるのでございます。

今やマーシーはその刻刻が一時間のやうに長く思はれたので、辛抱がしきれなくなつて來た。そこで、クリスティアナがもつと事をわけて執成しをするまでもなく、自ら門を叩くことに依つてその先廻りをしてしまつた。またその時の叩きかたがあまり大きな音を立てたので、クリスティアナをはつと思はせた。すると門の「番人」は言つた、あれはどなたです。クリスティアナは言つた、私の友だちでございます。

そこで、彼は門を開いて、外を覗いた、が、マーシーは絶息して外に倒れてゐた、何故ならこの娘は氣が遠くなつてゐた、それに門は結局開かれないのではないかと心配したのである。

すると、彼はその手をとつて言つた、『娘よ、われ汝に起きよと命ず。』〔註。マルコ傳五・四一〕。

ああ、あなた、と娘は言つた、私は氣が遠くなつてゐます、私のうちには殆んど命がございません。しかし彼は答へた、『わが靈魂裏に弱りし時、われ「主」をおもへり。しかしてわが祈り、なんぢに至り、なんぢの聖殿におよべり。』（ヨナ記二・七）。恐れることはない、立ちあがつて、何の故に來たかといふことを私に言ひなさい。

マーシー　私はお友だちのクリスティアナが受けてゐるやうなお招きを受けたこともないのに、その同じものを求めてまゐりました。あの人のお招きは王さまからです、私のは唯あの人からのものです。ですから、分を越えたことをしてゐるのではないかと心配いたします。

番人　あの方は一緒にこの場處へ來るやうに願つたのですか。

マーシー　はい、それで御覽の通り、まゐりました。若し神の御惠なり罪の御赦なりに餘分のものがおありでございましたら、哀れな侍女、私にもそれを頒けていただきたうございます。

すると、彼はまたその手をとり、やさしくつれて入つて、言つた、どんな手段で私のもとに來ようとも、私は私を信ずるすべての者のために祈るのです。それから側に立つてゐる者に言つた、何かその氣絶をとめるやうなものを持つて來てマーシーに嗅がせておやり。そこで人人

は沒藥の袋〔註。雅歌一・一三〕を持つて來てやつた。で、しばらくして、娘は生　回復した。

かうして、今やクリスティアナと、その子どもと、またマーシーは、道の始の「主」に迎へられ、その親切な言葉に與つた。そこで、彼等は更に進んで言つた、私どもは私どもの罪を悲しく思つてをります、それで、わが主にお赦しと、また私どものいたさなければならないことについて、この上のお教をいただきたう存じます。

私は、と、彼は言つた、言葉と行爲に依つて赦を與へます。言葉に依るといふのは赦の約束です。行爲に依るといふのは私がそれを得た方法です。はじめのものは、接吻を以て私の唇から受けとつて下さい。（雅歌一・二）。今一つのものはやがてその顯はされるままに受けとつて下さい。（ヨハネ傳二〇・二〇）。

さて、夢の中で見てゐると、彼は多くの善い言葉を語り、それに依つて彼等は大いなる歡喜を受けた。彼はまた門の頂に連れて行つて、どういふ行に依つて彼等が救はれることになつてゐるか、といふことを示した。〔註。十字架のキリストを示したのである。〕それと共に、彼等が道を辿つて行く時に再びそれを見て心を慰めるであらう、と言つた。

それから、彼はしばらくの間、彼等を下階の涼み座敷にとり殘し、そこで一同は自分たちだ

けになつて會談を始めた。で、クリスティアナはかういふ風に口を切つた、ああ、私たちがこへ入れたのは何といふ嬉しいことでせう。

マーシー　あなたがさうお思ひになるのは御尤ですが、私こそ誰よりも嬉しさに躍り上るわけがあります。

クリスティアナ　門のところに立つてゐた時、（叩いたのですが、誰も答へて下さらなかつたものですから、）一時は私どもの折角の努力も水の泡かと思ひましたよ、特にあの嫌な野良犬が私どもに向つてあんなにひどく吠え哮つた時には。

マーシー　でも、私が何よりも心配したのはあなた方が親切に迎へられたのを見た後、私はあとにとり殘されたことでした。『二人の女、磨碾きをらむに、一人は取られ、一人は遺されん』（マタイ傳二四・四一）と記されてゐることがいよいよ成就するのだと思ひましたよ。駄目だ、駄目だ、と叫び出すのを抑へるのにずゐぶん骨を折りましたわ。

それで、もうその上叩くのが恐しくなりましたの。でも、上を見あげて門の上に書いてあることを見た時に勇氣を振ひ起しました。私は又、もう一度叩くか、さもなければ死ぬるより外はないと思ひました。それで、叩きましたが、どんな風に叩いたか分りません、私の精神はそ

の時生死の間に悶えてゐたのですから。

クリスティアナ　どんな風に叩いたかお分りにならないのですか。とてもとても、一所懸命なもので、その音を聞いてさへはつと思ひましたわ、私は一生を通じてあんな戸叩きを聞いたことがありません。あなたが烈しく攻め寄せ、襲ひかかつて王國を奪はうとするのかと思ひましたよ。（マタイ傳一一・一二）。

マーシー　可哀さうに、私の身になつてもごらんなさい、あんな風になつてゐながら、ああしないでゐられる者がありませうか。御覽になつたやうに、戸は閉ざされてしまつたのでせう。あたりには恐しい猛犬がうろついてゐるのでせう。ほんたうですよ、私のやうに氣の弱い者なら、誰だつてあらんかぎりの力で叩かないものがありませうか。でも、主は私の無禮に對して何と仰有いました。

クリスティアナ　あなたのがたびしと叩く音を聞かれた時、とても靈妙な、無邪氣な微笑を洩らしになりました。あなたのせられたことがよほどお氣に召したのだと思ひますよ、その反對の徴候はお示しになりませんでしたから。でも、どうしてまたあんな犬を飼つておかれるのか、私は心ひそかに不思議に思つてゐます。あらかじめそれが分つてゐたならば、とてもか

うして出てくる勇氣は出なかつただらうと思ひます。でも、入つた上は入つたのです。私は心から喜んでゐます。

マーシー　この次ぎに降りておいでになつたら、あなたさへお宜しければ、何故あんな汚らはしい犬をお庭に飼つておかれるのか、伺つて見ませう。惡くはおとりにならないだらうと思ひます。

さうなさいよ、と子供たちは言つた、あいつを絞り殺すやうに勸めて見て下さい。ここから出て行く時に咬みはしないかと思つて恐いのですから。

それでそのうちに、彼はまた彼等のところへ來た、すると、マーシーはその前の地面に平伏して禮拜した、さうして言つた、わが主、今私の唇の犢を以て捧げまつる讃頌の生贄を容れさせたまへ。

それで、彼はその娘に言つた、『平安、なんぢにあれ。お起ちなさい。』しかし、娘はなほおもてを伏せて、言つた、『ああ、主よ、汝と辯疏ふ時汝は義し。されど汝の裁決につきてなんぢに語らしめよ。』（エレミヤ記一二・一）。何故あなたはあんな猛犬をお庭に飼つておかれるのですか、あれを見ると、私どものやうな女子どもはおそろしさに御門から逃げ出さうといたします。

彼は答へて言つた、犬の持主は別にあります、あれは他の者の地面に押し込めてあるのです。私の巡禮はその吠える聲を聞くだけです。あれはあの遠いところに見える城のものですが、この場處の壁のところまで來ることが出來ます。これまでにもその咆哮の大きな聲に依り、多くの正直な巡禮を脅かして、惡い方から善い方へ向けたことがあります。もとより、その持主は私と私に屬するものに格別好意をもつてあれを飼つてゐるのではなく、ただ、巡禮が私のところへ來るのをさしとめ、また彼等が入門を求めてこの門を叩くのを恐がらせる意向で飼つてゐるのです。折ふし鎖を絶ち切つて飛び出し、私の愛する者を窘めたこともあります、が、私は現在のところ、何事も我慢してゐます。それに、私の巡禮には時機を見計らつて助を與へますから、彼等をその力に委ね、その犬の本性が彼等の上に加へるやうに促すことを行はせるやうなことはありません。しかし、私の贖つた者よ、（註。エペソ書一・一四參照）。あなたが前以てこれだけのことをさへ知らなかつたとしても、よもや犬の一疋ぐらひを恐れたのではなからうと思ひますが、さうかしら。

門より門へ物乞をして行く乞食はあてにしてゐた施物を失ふよりも寧ろ犬にわめかれ、吠え

立てられ、また咬みつかれることをも敢へてするのですよ。一疋の犬—他人の庭にゐる犬、その吠え聲を巡禮の身のためになるやうにふり向ける犬—が、その一人でも私のところへ來ることをさしとめるでせうか。私は獅子より彼等を救ひ、犬のたけきいきほひより彼等の愛するものを救ひ出します。〔註。詩篇二二・二〇、二一參照〕。

マーシー　すると、マーシーは言つた、私は私の無智を告白します。私は自分の理解してゐないことを申し上げたのでした。何事もよいやうにお計らひ下さいますことがはつきりと分りました。

クリスティアナ　すると、クリスティアナはそろそろ旅に出かけなければならぬ、と言ひ出して、道筋のことを尋ね始めた。そこで、彼は彼等に物を食べさせ、その足を洗ひ（註。ヨハネ傳一三・五參照）前にその夫を取扱つたところに從ひ、御足のあとの道に彼等を出發させた。そこで、私は夢の中で、彼等がその道に歩を進め、まことに氣もちのよい天候のもとにゐるのを見た。すると、クリスティアナは歌ひ始めた、その言葉に曰く、

巡禮となりそめにける
かの日こそありがたきかな。

そこにまでわれをすすめし
かの人もありがたきかな。
とこしへに生きむとせしは
時を經て後なりしかな。
今は馳す、力のかぎり、
おくれしは無爲にまされり。
人の言ふごとく、始に
終をぞ見て行くままに、
よろこびに涙はかはり、
信仰に恐怖はかはる。

さて、クリスティアナとその道連が行くことになつてゐた道に續らした壁のむかふ側には庭園があり、その庭園はさきに述べた吠え犬の飼主のものになつてゐた。またその庭園に生えてゐる果物の樹のあるものは壁越しに枝をさし延ばしてゐた。それに果は熟れてゐたので、それを見付けたものは摘みあつめ、往往それを食べては身體を害ふのであつた。そこで、クリステ

ィアナの子供たちは、男の子がよくするやうに、樹が氣に入り、それに懸つてゐる果が氣に入つたので、打ち落してそれを食べ始めた。彼等の母は又さういふことをするのをさしとめて叱つたのであるが、子供たちはなほ止めなかつた。

いいかい、と母は言つた、子供たち、あなたがたは人のものを取つてゐるのですよ、その果は私たちのではないのですから。でも、この人はそれが敵のものであることを知らなかつた。若し知つてゐたならば、必ず恐しさのあまり死ぬるほどの思をしたことであらう。しかしそれも過ぎ去つて、彼等はその道を急いだ。すると、彼等をこの道に導き入れた場處から矢頃を二つばかり隔てたところまで行つた時、彼等は二人の醜い顏をした男がこちらへ向つて大急ぎにやつて來るのを見つけた。そこで、クリスティアナとその友のマーシーは面帕で顏をかくし、かうしてその旅をつづけた。子供たちも又その先に立つて進んだ、が、さうかうするうちに彼等はたうとう出會はしてしまつた。すると、彼等に向つてやつて來た者どもは、女たちのすぐ前にずつと寄つて來て、彼等を抱きすくめやうとするやうな素振を見せた。が、クリスティアナは言つた、お控へなさい、それとも、あたりまへにして、おだやかに通つておいでなさい。けれどもこの二人は彈人のやうにクリスティアナの言葉を耳にもとめず、いきなり手ごめにしよ

うとした。そこで、クリスティアナは大さう腹を立て、足で二人を蹴飛ばした。マーシーも亦、出來るかぎりのことをして二人から身を躱した。クリスティアナはまた二人に言つた、お控へなさい、さつさと行つておしまひなさい。お見かけ通り、私どもは巡禮で、それに、お友だちのお惠みに依つて暮らしてゐるやうな者ですから、奪られるやうなお金はもつてゐません。

醜い顏の男　すると、この男二人の中の一人が言つた。われわれはお金のために襲ひかかつたのではない、唯、われわれのお賴みするちよつとした要求を聽いてくれるなら、あなた方を永遠の妻としてあげるがどうだといふことを言ふために出て來たのだ。

クリスティアナ　今やクリスティアナは略この男たちの言ふことに想像がついたので、再び答を返した、あなた方のお賴みになることなんか聞かうとも、考へようとも、從はうとも思ひませんよ。急いでゐますから、ぐづぐづしてゐることは出來ないのです。私どもの用事は生死に關はる用事です。そこで再び、この人とその道連は二人を通り過ぎようと新に試して見たが、彼等は道を阻んで通さなかつた。

醜い顏の男　それから彼等は言つた、あなた方の命に害を加へようと考へてゐるのではない。われわれが欲しいのは他のものだ。

クリスティアナ　ああ、分りましたよ、とクリスティアナは言つた、あなた方は肉體と靈魂をひつくるめて私どもを奪つてしまはうと思つていらつしやるのです、その爲に出ておいでになつたことは知つてゐますから。でも、私どものこれから先の幸福を危くするやうな罠（註。誘惑）に釣り込まれる位ならば寧ろこの場で死んでしまひます。と、いふと共に彼等は人殺し！人殺し！と叫び、かうして女の保護のためにそなへられた律法の下に身を委ねた。（申命記二二・二三―二七）。しかしながら、男どもはなほも無理無態にその意を通さうとして迫つた。そこで、彼等は再び叫んだ。

さて、さきにも述べたやうに、彼等はその通つて來た門から遠くなかつたので、その聲は、彼等のゐたところからそちらへ聞えた。そこで、家内の或者は外へ出た、さうしてそれがクリスティアナの言葉であることを知つて、早早救援に出かけた。しかしながら彼等の見えるところまで來た時には、女たちは大立廻りの最中であり、子供たちはまたその側に立つて泣いてゐた。そこで、彼等の救のために來た人は兇漢どもにむかつて呼びかけた、何をしてゐるのだ。わが主の民に罪を犯させようとするのか、と言ひながら。彼はまた彼等を引捕へようとしたが、彼等は大きな犬の飼主の庭へ壁を乘越へて逃げ込んだ。それで、犬が彼等の保護者になつた。

「救援者」はその時女たちのところへ來て、異常はなかつたかと尋ねた。そこで彼等は答へた、あなたの主の君に御禮申し上げます、大して異常はございません、すこし脅かされただけでございます。あなたにも私どもを助けに來て下さいましたことを御禮申し上げます、さうでもなければ私どもは力が盡きたでせうから。

救援者　そこで、なほ二語三語話を交はした後、この「救援者」は次のやうに言つた、上の門でおもてなしを受けられた時、かよわい女の身であることは分つてゐられるのですから、あすこの主に案内者をお願ひにならないのがずゐぶん不思議に思はれましたよ。さうせられたならば、このやうな困難や危險を避けることが出來たでせう、主は案内者を與へられたでせうから。

クリスティアナ　ああ、私どもは目のまへの幸福に氣をとられて、さきに來るべき危險を忘れてゐたのでした。それに、王の御殿にこれほど近いところに、こんないたづら者が潜伏してゐようなどとは誰に思ひつくことが出來たでせうか。そりやもう、それを主の君にお願ひすれば私どものためにはよかつたのです。が、主は私どものためになるといふことを御存じなのですから、私どもにそれを附けて下さらなかつたのはどういふことかと思ひますよ。

救援者　願はないものを與へるのは常に必要であるとは限らない、それは、さういふことをして折角のたまものが値うちのないものとならないためです。しかし或一つのものの缺乏が感ぜられる時にはそれを感じる者の見るところで、本來もつべき値うちをそなへて來ます、で、さういふものとしてその後は用ゐられることになります。若し私の主が案内者をあたへられたならば、あなたがたは今、その理由をもつてゐられるやうに、それを願はなかつたといふことに對するあなたがたの手抜をさういふ風に嘆かれることはなかつたでせう。ですから、すべてのこと相働きて益となり（註。ロマ書八・二八）、あなたがたを油斷のないものとするのです。

クリスティアナ　わが主に立ち返り、私どもの愚かさを告白して、案内者をお願ひいたしませうか。

救援者　あなたがたの愚かさの告白は私から申し上げます。立ち返る必要はありません、あなたがたのおいでになるすべての場處には不自由のないことがお分りになるでせうから。何故なら、その巡禮を受け容れるために設けられたわが主の宿のいづれのものにもあらゆる攻撃に備へるだけのものが十分にあります。しかし、今も申しましたやうに、『彼等のためになすことを彼等に依りて求めらるるを欲りしたまふ。』（エゼキエル書三六・三七）。それにお願ひするほ

どの値がないといふやうなものはつまらないものです。かう言つた時、彼はその場處へかへつて行き、巡禮はその道に進んだ。

マーシー　すると、マーシーは言つた、弱つちやつたぢやありませんか。私はすべての危險を通り過ぎて、これ以上悲しい目に遭はないことだと、思つてゐました。

クリスティアナ　あなたは何も知らないのだから、とクリスティアナはマーシーに言つた、それがあなたには罪を逃れる理由にもなるでせうが、私は、家を出る前からこの危險が分つてゐて、しかも用意をしていただけるところで、それに對する用意をしなかつたのですから、なほさらのこと過失は大きいのです。

マーシー　すると、マーシーは言つた、どうしてお家を出るまへにこれを御存じでしたか。この謎を解いて下さい。

クリスティアナ　そりや言つてあげますよ。私が家から足を踏み出す前、ある夜、寢床に横たはつてゐる時に私はこれについて夢を見ました。といふのは、あの二人にこれ位似たものもないと思はれるやうな二人の男が寢床の裾に立つて、私の救を妨げるにはどうすればいいかと計謀を廻らしてゐるのを見たやうに思ひました。この言葉をそつくりそのまま言ひませう。二

人は言ひました（それは私がくるしんでゐた時でした）、この女をどうしてくれやう、こいつは覺めてゐても眠つてゐても罪の赦を求めて叫んでゐる。これをこのままにさせておけば、われわれはこの女の夫を失つたやうにこいつをも失つてしまふ。これが、さうでせう、私に氣をつけさせ、用意の出來る時に用意をするやうにさせたはずです。

マーシー　それぢやあ、とマーシーは言つた、私どもがこの怠慢に依つて私ども自身の不束なことを眺める好い機會を與へられたやうに、私どもの主はこの機會をとらへ、それに依つて御惠のゆたかさをお示しになつたのですわ。かういふ風に求めざる御慈しみを以て私どもに伴いて來られ、唯その御意のままに、私どもよりも強い者の手から救つて下さいましたのですから。

かうして今やなほしばらくの時を語り過した時、彼等はその道に立つてゐる一つの家に近づいて來た。その家といふのは巡禮の慰安のために建てられたものであり、諸賢は『天路歷程』のこれらの記錄の第一部にもつと詳細に述べたものを發見せられるであらう。（第一部五八頁參照）。そこで、彼等はその家（「インタープリタアの家」）に向つて近寄つて行つた、さうしてその戸口まで來た時、家の中で盛に話聲がするのを聞いた。

そこで、耳を澄ました、さうして、クリスティアナの名が話に上つてゐるのを聞いたやうに思つた。この人とその子供が巡禮に上つたといふ話がこの人に先立つて、はやくも傳へられてゐたことは御承知おきを願はなければならぬ。また、このことが人人にとつて一層喜ばしいことであつたのは、この人がクリスチアンの妻で、しばらく前には巡禮に上る話を聞くのをあんなに嫌つたあの女であるといふことを聞いたからである。そこで、かうして、彼等はじつと立つて、家の内の善良な人人が、戸口に立つてゐようとはゆめにも知らぬこの人のことを賞めゐるのを聞いた。たうとうクリスティアナは戸を叩いた、前にあの門を叩いたやうに。さて、戸を叩いた時、戸のところへ來たのは、その名をイノセント（天眞）といふ若い娘で、開いて見ると、思ひがけもなく、そこに二人の女がゐた。

娘　すると、娘は二人に言つた、この場處の誰とお話しになりたいのですか。

クリスティアナ　クリスティアナは答へた、これは巡禮となつた者のために特に許された場處であると承知いたして居りますが、今この戸口へまゐつてゐる私どもはさういふ者でございます。それで、この時刻に私どもが求めてまゐつたものの御相伴に與らせていただきたいのでございます。御覽の通り、日もよほど暮れてまゐりましたし、今夜はこれ以上先へ行きたくご

さいませんので。

娘　内にゐられるわが主に申し上げることの出來ますやうに、お名前を何と申し上げればよろしうございますか。

クリスティアナ　私の名はクリスティアナでございます。私は幾年か前、この道を旅してまゐりましたあの巡禮の妻でございました、これはその四人の子どもでございます。この娘も私の道連でございまして、やはり巡禮に行くところでございます。

イノセント　すると、イノセントは（それがその名であつたので。〔譯者註。バニヤンは既にイノセントの名を紹介したことを失念したのであらう。〕）驅け込んで行つて、内にゐる人人に言つた、戸口に誰がゐるか思ひつくことが出來ますか。クリスティアナと、その子たちと、その道連の方、みんなここでのおもてなしを待つてゐるのですよ。すると、人人は喜悅に躍り上つて、その主人へ告げに行つた。そこで、彼は戸口へやつて來た、さうしてこの人を眺めながら言つた、あなたは善人クリスチアンが巡禮の生涯に身を委ねられた時あとに殘したあのクリスティアナですか。

クリスティアナ　私は主人のなやみを輕しめ、ただひとりで旅路に上るがままにさせておいたほどの冷酷な女で、これはその四人の子どもでございます。でも、今は私もまゐりました、このほかの道は正しくないと確信してゐますから。

インターブリタア　ではまた、その息子に『今日わが葡萄園に往きて働けと言ひ、彼は答へて「往かじ」と言ひたれど、後悔いて往きたり』と言つた人について記されてゐることが成就したのです。（マタイ傳二一・二九）。

クリスティアナ　すると、クリスティアナは言つた、しかあらせたまへ、アーメン。神これを私の上に眞實の言葉となし、最後には平安の裡に、汚なく、咎なきものと見そなはしたまふことを得せしめたまへ。

インターブリタア　でも、どうして、さういふ風に戸口に立つてゐられるのです。お入り下さい、アブラハムの女よ。私どもは今もあなたの話をしてゐたのでした、あなたが巡禮になられたといふ知らせは前以て私どものところへ傳へられてゐましたから。さあ、子供たち、お入り下さい。さあ、娘さん、お入り下さい。そこで、彼は彼等を家に招じ入れた。

かうして、彼等が内に入つた時、腰を下して休むやうにと言はれた。その通りにすると、その家の中で巡禮にかしづく人人が彼等に會ふために部屋の中へやつて來た。さうして、一人が

微笑つた、するとまた一人が微笑つた、すると、彼等は皆微笑つた、クリスティアナが巡禮になつたといふことをよろこんで。彼等はまた子供たちを眺めた。子供たちを親切に受け容れるしるしとして、手でその顏を撫で廻はした。彼等は又マーシーにも心おきなく振舞つた、さうして一同に彼等の主人の家によく來て下さいました、と、言つた。

しばらく經つて後、夕餐の用意が出來てゐなかつたので、インタープリタアは彼等をその暗示の部屋につれて行き、クリスティアナの夫クリスチアンが以前に見たものを見せた。ここで、それ故に、彼等は檻の中の男や、男とその夢や、敵の中にその道を切り開く男や、彼等すべての者の中の最大なる者の肖像を、當時クリスチアンにあれほど有益であつたその餘のものと共に見た。

これを見てしまつた後、又、これらのものがクリスティアナとその仲間に依つて多少會得せられた後、インタープリタアはまた彼等を別に連れて、先づ一つの部屋へつれて行くと、そこには下の方を見る以外にはどちらをも見ない男が手に斧耙熊手をもつてゐた。またその頭の上には手に天の冠をもつた一人の者が立つてゐて、彼の斧耙熊手の代りにその冠をさし出してゐた。が、男は見上げもしなければ、意にも介しない、ただ勝手に床の上の藁や棒屑や埃を耙きあつ

めてゐた。

すると、クリスティアナは言つた、私は多少この意味が分つたと思ひます。これはこの世の人の姿です、さうではございませんか。

インタープリタア　仰有る通りです、と彼は言つた、さうしてその斧耙熊手は彼の現世的な心を示してゐます。それからこの男が手に天の冠を以て上より呼びかけてゐる「あの方」の仰せよりも寧ろ床の上の藁や棒や埃を耙きあつめる方に氣をとられてゐるのを御覽になるところは、天は或人にとつては喩言に過ぎないものであり、この世のものが唯一の實質をもつたものと考へられてゐることを示してゐます。さてまた、この男が下の方以外はどちらを見ることも出來ないことが示されてゐるのはどういふことかと言ひますと、地上のものは、それが人人の考の上に力をもつてゐる時には、その心をすつかり神から遠び去つてしまふといふことをお知らせするためなのです。

クリスティアナ　すると、クリスティアナは言つた、ああ、どうか私をこの斧耙熊手からお救ひ下さいますやうに！

インタープリタア　その祈は、とインタープリタアは言つた、殆んど錆び朽ちるまでうち棄

てられて顧る者もなくなつてゐます。『われに富を賜ふな』といふのは萬に一つの祈禱にもなつてゐません。（箴言三〇・八）。〔註。邦譯聖書には「我をして貧しからしめずまた富ましめず」とある。〕藁と棒屑と埃が大抵の人人にとつては今探し求むべき大切なものなのです。

それを聞いて、マーシーとクリスティアナは泣いて言つた、ああ、なさけないことですが、その通りでございます。

インタープリタアがこれを見せた時、彼は彼等をつれてこの家の一番よい部屋に入つて行つた。大さう立派な部屋であつた。それで、彼はぐるりを見廻して、そこに何か利益になるものを見付けることが出來るかどうか見てごらんなさいと言つた。そこで、彼等は幾度も幾度も見廻した。何故なら壁の上に極めて大きな蜘蛛がゐた外には何も見るべきものがなく、それを彼等は見逃してゐた。

マーシー　すると、マーシーは言つた、私には何も見えませんよ。しかし、クリスティアナは默つてゐた。

インタープリタア　しかし、とインタープリタアは言つた、もう一度見てごらんなさい。そこで、この娘はもう一度見た、さうして言つた、ここには手を壁にかけて下つてゐる一疋の醜

い蜘蛛の外には何もありません。すると、彼は言つた、この廣い部屋の中に一疋の蜘蛛しかゐないのですか。すると、クリスティアナの眼には水が浮んだ、この人はさとりの速い女であつたから。さうして言つた、はい、主よ、ここには一疋以上のものがゐます。それに、その毒はあれの中にあるものよりも遙かに恐しい害を與へる蜘蛛でございます。これはマーシーを赤面せしめ、子供たちにはその顏を蔽はせた、皆やつと謎の意味をさとり始めたからである。

すると、また、インタープリタアは言つた、『蜘蛛は（ごらんの通り）手をもてつかまり、王の宮にをる』のです。（箴言三三・二八）。〔註。邦譯聖書には「蜘蛛」が「守宮」になつてゐる。欽定譯聖書の英語は蜘蛛に當る。〕これが記されてゐる所以は、唯、あなたがたがどんなに罪の毒に滿ちた者であらうと、なほ且つ、信仰の手に依り、上なる「王」の家に屬する一番よい部屋に住むことが出來るものだといふことを示すためなのです。

クリスティアナ　私は、とクリスティアナは言つた、何かさういふことだらうとは思ひましたが、全てを想像することは出來ませんでした。私どもはどんな美しい部屋にゐても、蜘蛛のやうなもので、醜い動物のやうに見えるとは想つたのですが、この毒をもつた、醜い姿をした動物から信仰を行ふ方法を學ぶべきものだといふことは心に浮びませんでした。でも、なるほ

どあれは手をもつてかかり、家の一番よい部屋に住んでゐます。神は何物をも無用にはおつくりになりませんでした。

すると、彼等は皆喜んでゐるやうに見えた。しかし、眼には水が浮んでゐた。それでもお互の顔を見合はせ、また、インターブリタアの前に頭を垂れた。

彼は彼等を今一つの部屋につれて行つた、そこには牝雞と雛があり、彼は暫くの間それを觀てゐるやうに、と言つた。さうすると、雛の中の一羽が水槽のところへ行つて水を飲み、その水を飲む毎に頭と眼を天の方にあげた。ごらんなさい、と彼は言つた、この小さな雛鳥のすることを、上を見上げながら惠をいただくことに依り、その惠の出て來るところに感謝するといふことをこの雛鳥からお學びなさい。しかしもう一度、と彼は言つた、よく觀てごらんなさい。そこで彼等は注意して見ると、牝雞はその雛に對して四樣の仕方でその道を守つてゐる。一、それは普通の呼聲をもつてゐて、終日その聲を絶たない。二、それは特別の呼聲をもつて居り、その聲は時たまにしか出さない。三、それは雛をはぐくむ時の調子をもつてゐる。また、四、それは絶叫の聲をもつてゐる。（マタイ傳二三・三七）。

さて、と彼は言つた、この牝雞をあなた方の「王」に、またこの雛をその隨順の徒に較べて

ごらんなさい。といふのは、ちやうど牝雞に應ふやうに、「王」御自身もその仕方をもつておいでになり、それで以てその民に對する道を守つてゐられます。即ち、その普通の呼聲では何物をも與へられません。その特別の呼聲ではいつも何か與へ給ふものをもつてゐられます。「王」はまたその御翼の下にある者へのはぐくむ聲をもつてゐられます。又敵の來るのをごらんになつた時に警戒を與へるための絶叫の聲をもつてゐられます。私はあなたがたが女の方で、たやすくお分りになると思ひますから、かういふもののある部屋におつれしたのですよ。

クリスティアナ　で、どうか、とクリスティアナは言つた、もう少しお見せなすつて下さいまし。そこで彼は彼等を屠殺場へつれて行つた、そこでは屠殺者が羊を殺してゐた。が、意外なことには、羊は平靜であり、從容としてその死を迎へてゐた。すると、インターブリタアは言つた、あなた方はこの羊から受難の道を、また呟かず、訴へずに、非道に耐へて行くことを學ばなければなりません。ごらんなさい、いかにも靜かに死を迎へてゐるではありませんか、また、何の苦情も言はないで、その皮を耳の上からすつぽりと剝がれるがままにさせてゐるではありませんか。あなた方の「王」はあなた方を羊と稱へてゐられます。

この後、彼は彼等をその花園へつれて行つた、そこには種種樣樣の花があつた。で、彼は言

つた、これらすべてのものをごらんになりますか。そこで、クリスティアナは言つた、はい。すると、彼はまた言つた、ごらんなさい、花は身の丈と、色と、匂と、また、薬効がいろいろになつてゐます。また或ものは或ものよりも優つてゐます。それに、庭つくりが植えたところにちやんと立つてゐて、物爭をいたしません。

また彼は彼等を彼の野につれて行つた、それは小麥とその他の穀物の種子を播いたものであつた、が、彼等が見た時にはそのすべての頂が切りとられて桿ばかりが殘つてゐた。彼はまた言つた、この土地は肥料を施され、犁き返され、また種子を播かれました。しかしこの收穫をどうしたものでせう。すると、クリスティアナは言つた、或ものは燒いておしまひなさい、その餘のもので肥料をお作りなさい。すると、また、インタープリタアは言つた、それごらんなさい、果があなたのお求めになるものです、で、それが無いためにその罪を定めて火にうち棄てたり、人の足に踏ませたりするのです。この行に依り、自らの罪を定めることを戒めなければなりません。

かうして、外からかへつて行く時に、彼等は一羽の小さなロビン〔註。駒鳥。〕がその口に大きな蜘蛛をもつてゐるのを見つけた。そこで、インタープリタアは言つた、これをごらんなさい。

そこで、彼等は眺めた、さうしてマーシーは呆れてゐた。が、クリスティアナは言つた、ロビン・レッドブレスト〔註。「赤い胸のロビン」。駒鳥の愛稱である。〕のやうな可愛い小鳥にとつて、これはまた何といふ見下げたことでせう、それに、小鳥の中でも多くのものにたちまさり、人間と一種の交際をもちつづけることを好むものですのに。私はパンの屑か、或はさういふ害のないものを食べて生きてゐることと思つてゐました。私は以前よりも好まなくなりました。

インタープリタアはその時答へた、このロビンは一つの表象で、極めて適切に或信者を現してゐます。何故なら、うち見たところ、その人たちはこのロビンのやうに、調も、色も、ものごしも美しいのです。また、まごころからの信者に對して大さう深い愛をもつてゐるやうに見えます。さうして、他のすべての人にたちまさつてさういふ信者と交際し、その仲間に加はりたいと願つてゐるやうすは、あだかも善人の食べるパンの屑ででも生きて行けるものであるかのやうに思はれます。彼等はまたそれが聖徒の家と「主」の會合を屢〻訪れるのはそのためであるといふやうな風をしてゐます。しかし、彼等だけになつた時には、ロビンのやうに、蜘蛛を捕へて呑み込むことが出來るのです、彼等は日常の食物を變へ、邪曲を飲み、水のやうに罪を鵜呑みにすることが出來るのです。

そこで、彼等が家に歸つて來た時、夕餐はまだ用意が出來てゐなかつたので、クリスティアナは再たインターブリタアが何か益になる他のことを話すか或は見せていただきたいと願つた。

すると、インターブリタアは口を切つて言つた、牝豚が肥つてゐればだけ、泥濘を好みます。牝牛が肥つてゐればだけ、揚揚と屠殺者の許へ行きます。人が健康で、元氣であればあるだけ、惡事に傾き易いのです。

女には清楚として、また、美しくして暮したいといふ願があります、神の見たまふところに大なる價値をもつたもので飾られてゐるのは見苦しくないことです。

全一年を通じて夜明かしをするよりも一夜二夜の通夜をすることは易しい。そのやうに、立派な信者ぶりを以て始めるのは、最後まで爲すべきことを爲しつづけるよりも易しい。

あらゆる船長は、暴風雨の時には、船の中にある最も値の少いものを水中に捨てます。が、誰が最もよいものを第一に捨てるでせうか。神を恐れないもの以外には誰もありません。

一つの漏口が一つの船を沈めます。一つの罪が罪人を滅します。

その友を忘れる者は友に對して恩知らずです。しかし、その「救主」を忘れる者は已れみづからに對して無慈悲です。

罪の中に生活して、この世の後の幸福を待ち望む者はムギナデシコ〔註。麥の中に生える雜草。〕を播いて、その納屋を小麥や大麥で滿たさうと思つてゐる者に似てゐます。

人若しよい一生を送りたいと思ふならば、その最後の日を身近くに引寄せ、これをいつもその話對手とするがよろしい。

耳うちと考へなほしは世の中に罪のあることを證明してゐます。

神がとるにも足らぬものとしてうち棄て給うたこの世界が人間にはこれほど値のあるものと考へられてゐるとするならば、神が嘉し給ふ天はどういふものであるでせうか。

これほど多くの災厄をともなつてゐる一生が私どもには惜しくて手離し難いものであるとするならば、天上の生涯はどういふものであるでせうか。

誰も皆、人の善性を賞め立てようとします。しかしながら、當然動かされなければならぬやうに、神の善性に心を動かされてゐる者は何處にゐますか。

食卓に就けば、食べて卓を離れないことは滅多にありません。そのやうに、イエス・キリストには全世界が必要とするより以上の功績と義があるのです。

インターブリタアが話を終つた時、彼は再び彼等を花園につれ出して一もとの木のところへ

ともなつた。その木の内側はことごとく朽ちて無くなつてゐたが、それでもなほ生長して葉をつけてゐた。すると、マーシーは言つた、これはどういふことを示したものですか。彼は言つた、外側は美しくて、内側は朽ちてゐる、この木は神の花園にある多くの者にくらべることが出來ます。その人たちは口でこそ神のために高尚なことを言つてゐますが、實際はそのために何もしようとはしないのです。その葉は美しいのですが、その心は惡魔の引火奴箱の引火奴になるより以外には何の役にも立たないものです。

今や夕餐の用意が出來て、膳立がととのひ、すべてのものが卓上に置かれた。またインタープリタアはいつも食事の時に泊つてゐる者を音樂でもてなすことになつてゐたので、樂人たちは樂器を奏でた。そこには又歌を歌つた者があり、その聲は大さう美しいものであつた。その歌はかうであつた——

主のみわがよりどころにて、
　またわれのやしなひのぬし。
いささらば、われにともしき
　なにごとのえやはあるべき。

歌と音樂が終つた時、インタープリタアはクリスティアナに當初その心を動かして巡禮の生涯に身を委ねるやうにさせたものは何であつたかと尋ねた。クリスティアナは答へた、第一に主人を失つたことが心に浮んで、心底から悲しく思ひました。が、そんなことはただ自然の情でございます。すると、その後、主人のなやみや巡禮の旅路のこと、又それについて私がどんなに意地のわるいふるまひをしたかといふことが心に浮びました。そこで、罪の咎めが心を捉へ、池にも引張り込むところでしたが、運よく私は主人の幸福な身の上を夢に見、また主人が住んでゐる國の王さまから、御許に來るやうにとの御手紙をいただきました。その夢と御手紙がともどもに心にはたらきまして結局この道をとるよりほかにはいたしかたがないやうにしたのでございます。

インタープリタア　しかしお家からお出かけになる前には何の反對にもお會ひにならなかつたのですか。

クリスティアナ　はい、會ひました、御近所の方で、ミセス、ティモラスといふ人がございました（この方は獅子が恐いからと言つて主人に後戻りをするやうに說きつけやうとした人の身内の人でございます）。この方は、その所謂、私の向ふ見ずな冒險といふものに對してすつ

かり私を莫迦にしておしまひになりました。またそれに對して私の氣を殺ぐために出來るかぎりのもの、主人が道中で遭つたくるしみやなやみを說き立てました、が、これには皆かなりよく打克つことが出來ました。しかし、私の見た夢の中で二人の醜い顏をした男が、私の旅行を失敗させるにはどうすればいいかといふことをたくらんでゐるやうに思ひましたが、その方が大さう私を惱ましました。今でもそれは私の心の中にうろついてゐまして、逢ふ人毎に、惡い事をしに、さうして私を道から外へ放り出すために、やつて來るのではないかと、誰も皆恐しく思はせます。それに、誰彼となく知られたくはないのですけれど、御主人には申し上げますが、このお家とそれに依つて私どもがこの道に入りました御門との間で、私どもは二人ともひどい襲擊に出會はし、人殺し！と叫ばなければなりませんでした。さうして、この襲擊を加へた二人は私の夢に見た二人に似てゐました。

すると、インタープリタアは言つた、あなたの始はよろしい、あなたの後の端はますますよくなることでせう。そこで彼はマーシーに言葉をかけ、この娘に向つて言つた、で、あなたをここへ來るやうにさせたのは何ですか、可愛い娘さん。

すると、マーシーは顏を赤くして、身を震はせ、暫くの間は無言のままであつた。

インタープリタア　すると、インタープリタアは言つた、氣遣はありませんよ、唯、信じて、思つてゐることを仰有い。

マーシー　そこで、娘はやつと口を開いて言つた、御主人さま、ほんたうのところ、私は經驗がございませんので、それを思ひますと、默つてゐたいと思ふ一念に迫られ、また結局は思つてゐることも言へないのではないかといふ氣遣で胸が一ぱいなのでございます。私はお友だちのクリスティアナのやうにまぼろしや夢の話をすることが出來ません。また親しい仲であつた者の勸告を聽かなかつたのに對して嘆くといふやうなことを身に覺えたこともございません。

インタープリタア　では、娘さん、あなたがせられたやうにすることを決心させたものは何でしたか。

マーシー　それはかうでございます、このお友だちが私どもの市を立ち去らうとして荷ごしらへをしてゐられる時に私と今一人の方とが偶然お訪ねしたのでございます。それで、私どもは戸を叩いて、入つてまゐりました。內へ入りました時、そのしてゐられることを見まして、これは一體何事ですかと尋ねました。この方は御主人のところへ行くやうにとの御使をいただいたと言はれました。それから、進んで御主人が不滅なるものの間に、冠をかむり、竪琴を奏

で、その君の食卓で飲食し、そこへ導いて下すつたことに對して讃への歌を歌ひなどしながら、美しい場處に住んでゐられるところを夢の中で見たといふ話をなさいました。ところが、かういふことを私どもに話してゐられる間に、私は私の心が胸の中で燃え立つやうに思ひました。私は心の中で申しました、若しこれが眞なら、私は父と、母と、生れの國をあとにし、出來ることなら、クリスティアナと一緒に行きませう、と。

そこで、私はなほその上に、かういふことが眞であるかどうかといふこと、又私にお供をさせて下さるかどうかといふことを尋ねました。今、私どもの市には最早、滅亡の危險に瀕してゐない住家はないといふことが分りましたから。それでも私は重苦しい心をもつて出てまゐりました、と申しますのは、出て來ることに氣がすすまなかつたからではなく、あとに殘した身内のたくさんの者のことを思つたからでございます。

で、私は、心の願を傾けてやつてまゐりました。また、出來ることならば、クリスティアナと一緒に、その御主人のところへ、又、御主人の王さまのところへ行きたいと思つてゐます。

インターブリタア　あなたが出て來られたのはよろしい、あなたは眞を信用せられたのですから。あなたはルツです。ナオミに對し、またその神なる主に對して抱いてゐる愛のために父

と、母と、生れの國をあとにして、それまでは知らなかつた民と共に行つたあの娘です。『ねがはくは主なんぢの行爲に報いたまへ、ねがはくはイスラエルの神なる主、なんぢが身を寄せむとてその翼の下に來れるもの、なんぢに十分の報施を賜はらむことを。』（ルツ記二・一二）。

今や夕餐は終り、床に就くための用意が出來た。女たちはひとりひとり別に臥て、子供たちは一緒に臥た。さて、マーシーが床に臥した時、この娘は喜悅のあまり眠ることが出來なかつた、何故なら、最後に望を失ひはしないかといふその疑念はこれまでのいつにもまして遠くへとり去られてしまつたからである。そこで、これほどまでに恩寵をさづけたまふ神をありがたく思ひながら、また、讃へながら、横たはつてゐた。

あくる朝、太陽と共に彼等は起き上つて出發の用意をした。しかしながら、インターブリタアは暫くの間滯在して貰ひたいと言つた、何故なら、と彼は言つた、あなた方は整然としてこから出かけなければなりません。そこで、最初彼等に門を開いた娘に言つた、この方方を庭の中の浴場へおつれして、お洗ひし、旅に依つてたまつたよごれかちきれいにしておあげ。そこで、娘イノセントは彼等をともなひ、庭につれて行き、浴場に導いた。それから、彼等に告げて、そこで身を淨めてきれいにならなければならない、主人はその家を訪れた女たちが巡禮

に旅立つ前にはさうすることを望むのであるから、と言つた。彼等はそこで入つて行つて身を淨めた、それはもう、彼等も子供たちも皆洗つたのである。さうしてその浴場から氣もちよく清麗になつたのみならず、その關節は大いに生氣を加へられ、力づけられて、出て來た。それで、彼等が入つて來た時には洗浴のために出て行つた時よりもよほど美しく見えた。

浴場を出て庭から歸つた時、インタープリタアは彼等を迎へ、彼等を眺め、彼等に言つた、月のごとく美はし、と。〔註。雅歌六・一〕。そこで、印を持つて來るやうにと命じたが、この印は彼の浴場で身を淨めた人人が常に捺印せられたものである。それで、印がとり寄せられ、彼はその標章を彼等の上につけて、これから先に行くべき處處で見分けのつくやうにした。さて、この印はイスラエルの子等がエジプトの國から出て來た時に食べた踰越節の食物の內容と總括であり、その標章は彼等の眼の間につけられた。この印が大いに彼等の美を加へた、といふのは、それはその顏の一つの裝飾であつたからである。それはまた彼等の嚴肅を加へ、その容貌をいよいよ天使のそれに近いものとした。〔出埃及記一三・八—一〇〕。

すると、インタープリタアは再びこの女たちにかしづいてゐる娘に言つた、衣裝部屋へ行つてこの人人のための衣裝をとつておいで。そこで、娘は行つて白い衣裝をとり出し、彼の前に

置いた。で、彼は彼等にそれを着るやうにと、命じた。『そは白くして淸らかなる細布なりき。』〔註。ヨハネ默示錄一九・八參照〕。女たちがこのやうに飾られた時、互に恐しいもののやうに思はれた。何故なら、彼等は各〻互に見ることの出來た榮光を己れ自らの上には見ることが出來なかつたからである。今や、それ故に、彼等は互に彼等自身よりも尊びあつた。『あなたは私よりも美しいのですから』と、一人が言つた、すると、『あなたこそ私よりも美麗ですよ』と、對手は言つた。子供たちも亦、この人人の仕上げられた樣子を見て茫然と立つてゐた。

インタープリタアはその時、彼の僕、グレイト・ハート〔大勇氏〕といふ者を呼び寄せて、劍と兜と盾を執れ、と命じた。さうして、この私の女たちをつれて、と彼は言つた、「美」と稱へる家に導いて行け、その場處でこの人人は次に憩ふであらう。そこで、この僕は武器を執つて彼等の前に進んだ。また、インタープリタアは一路平安を祈る、と言つた。又、この家に屬する人人は多くの親切な祈りで彼等を見送つた。そこで彼等は道に進み、さうして歌つた——

ここはわれらの第二程。
ここにわれらの見聞せし
よきものごとは代代を經て、

他人にかくされたりしなり。
芥耙熊手、蜘蛛に雞、
雛も一つの教訓を
われにつたへぬ、それ故に
從はしめよ、その旨に。
屠殺の人や、花園や、
野や、こまどりや、その餌食、
さらに朽樹も意味ふかき
論旨をわれにあたへけり。
目覺めて、祈り、まこともて
努むるやうにせしめむと、
わが十字架を日日に負ひ、
かしこみて「主」に仕へつつ。

さて、私は夢の中で、彼等が道に進み、グレイト・ハートは先登に立つて行くのを見た。か

うして彼等は行き、やがて、クリスチアンの荷がその背中から落ちて石の棺の中へ轉げ込んだところへやつて來た。で、ここで、彼等は一休みした。それからまたここで神を崇めた。今、とクリスティアナは言つた、門で私どもに言つて聞かされたことが心に浮びます、それは私どもが言葉と行爲に依つて罪を赦されるといふことです。言葉に依るといふのは約束に依るといふことであり、行爲に依るといふのは、その獲得せられる方法に依るといふことでした。約束が何であるかといふことは私にも多少は分つてゐます。しかし、行爲に依る、或はその獲得せられた方法に依つて赦を受けるといふのは何であるか、ミスタア、グレイト・ハート、あなたは御存知だと思ひます。それ故に、若しおよろしければ、そのことに就いてのお話を伺はせていただかうではありませんか。

グレイト・ハート　行はれた行爲に依る罪の赦といふのは、或人に依り、それを必要とする他の人のために獲得せられた罪の赦です。赦された人に依るのではなく、私がそれを得た方法に依つて得るのであると、あの他の方が言つてゐられます。ですから、もう少し詳しく申しますと、あなたやマーシーやこの子供たちの獲得した罪の赦は他の人、すなはち、あなたがたを門に入れた人に依つて達成せられたのです。彼はこの二重の方法でそれを達成せられました。

彼はあなたがたをおほふために義を行ひ、またあなたがたをその中で洗ふために血を流されました。

クリスティアナ　でも、私どものためにその義を手離されたのであれば、御自身のためには何をおもちになるでせう。

グレイト・ハート　その人はあなたがたが必要とせられるより、また、自分が必要とするより以上の義をもつてゐられます。

クリスティアナ　どうかそれを明らかにして下さい。

グレイト・ハート　承知しました。が、先づその前に申し上げておかなければならないことは、私どもが今その話をしようとしてゐる人は匹儔をもたない者であるといふことです。彼はひとりの人の中に、明らかに識別せられ、到底分割することの出來ない、二つの性質をもつてゐられます。これらの性質の各々に一つの義が屬し、また、各々の義はその性質の本質的な要素になつてゐます。それで、その性質からその正しさなり義なりを分離するといふことはその性質を絶滅せしめるのと同じやうに困難なことなのです。ですから、私どもはこの二つなり、或はいづれか一つなりが、私どもの上に被せられて正しくせられ、またそれに依つて生きるた

めに、これらの義に與る者とはなるのではないのです。これらの外にこの「人」がこの二つの性質の一つに結びついたものとしてもつてゐられる一つの義があります。これは人性より識別せられたものとしての神性の義でもなければ、神性より識別せられたものとしての人性の義でもなく、兩方の性質の結合に存する一つの義であり、彼が委任せられることになつてゐた仲保の職の資格をもつやうに、その神に依つて用意せられるためには本質的なものであるところの義と稱へることの出來るものでありませう。若しその第一の義を離すならば、彼はその神性に離れます。若しその第二の義を離すならば、彼はその人性に離れます。若しこの第三のものを離すならば彼に仲保の職の資格を與へるところの完全に離れます。そこで、彼は今一つの義をもつてゐますが、これは啓示せられた意志の實行或は服從に存するもので、彼が罪人の上に被せるもの、また、それに依つて彼等の罪がおほはれるものは即ちそれです。ですから、彼は言つてゐられます、『一人の不從順によりて多くの人の罪人とせられし如く、一人の從順によりて多くの人は義とせらるるなり。』(ロマ書五・一九)と。

クリスティアナ　しかし、その他の義は私どもには役に立たないものでせうか。

グレイト・ハート　役に立つのです。それらのものは彼の性質と職務の上の本質的な要素で

あり、從つて他の者に傳へることの出來ないものではありますが、しかもなほ、〔人を〕義とする〔註。すなはち人の罪を救ふ〕義がその目的のために功力をもつのはそれらのものの功德によるのですから。彼の神性の義はその服從に功德をあたへます。彼の人性の義はその服從に義とする資格をあたへます。またこの二つの性質を彼の職務に結合することに於て存する義はその義にそれがために定められた仕事を行ふ權力をあたへます。

そこで、ここに神としてのキリストが必要としない義があります、それがなくても彼は神なのですから。ここに人としてのキリストが彼をさういふものとするために必要としない義があります、それがなくても彼は完全な人なのですから。又、ここに神・人としてのキリストが必要としない義があります、それがなくても彼は完全にさういふものなのですから。しからば、ここに、神として、人として、神・人としてのキリストが御自身に關しては必要としない義があるわけであり、それ故に彼はそれを割愛することが出來るのです。すなはち、〔人を〕義とする義であり、御自身はそれを必要とせられない、それ故に與へておしまひになる、そこで、それは『義の賜物』と稱へられてゐます。（ロマ書五・一七）。「主」キリスト・イエスは御自身を律法の下に置かれたのですから、この義は與へておしまひにならなければなりません。何故な

ら、律法はその下にある者に『正しく行ふ』〔註。ミカ書六・八〕のみならず、愛を行ふ義務をも負はせるからです。それ故に、若し彼が二つの外衣をもつてゐられるならば、律法に依り、その一つを外衣を有つてゐない者に與へなければならないのであり、また與へる義務があるのです。ところが私どもの「主」は實際二つの外衣をもつてゐられます、一つは御自身のために、一つは分け與へるために。それで、彼はその一つを有つてゐない者に惜しみなく與へられるのです。で、クリスティアナ、マーシー、またここにゐるあなたがたのその他の人たち、かういふわけで、行爲に依り、すなはち他の人の所業に依つて罪の赦があなたがたに及ぶのですよ。あなたがたの「主」キリストがその所業をせられた方であり、はたらいて求めたものをすぐその次にお逢ひになる哀れな乞食に與へておしまひになるのです。

しかし、また、行爲に依つて罪を赦すためには、それで以て私どもを蔽ふための何物かが用意せられると共に、代價として神に支拂をするための何物かがなければなりません。罪は私どもを義しい律法の正しい呪詛に委しました。そこで、私どもはこの呪詛から贖罪の方法に依つて義とせられ、私どもが行つた害毒に對する代價が拂はれなければなりません。（ロマ書四・二四）。さうして、これは、あなたがたに代り、あなたがたの身代りとして立ち、あなたがたの罪過に

對するあなたがたの死を遂げるために來られた、あなたがたの「主」の血に依る代價です。（ガラテヤ書三・一三）。かうして彼は血に依つてあなたがたの罪過からあなたがたを救はれ、義を以てあなたがたの腐敗した、不具になつた靈魂を蔽はれました。そのために、神はあなたがたを見過しにせられ、世を審判くために來給ふ時にもあなたがたを損はれないのです。

クリスティアナ　これは結構なことを伺ひました。今、私は言葉と行爲に依つて私どもが罪を赦されるといふことに依り、學ぶべき物のあることが分りました。ねえ、マーシー、折角これを心にとどめておくやうに致しませうね。また、子供たち、お前たちも覺えてゐるのですよ。しかし、あなた、私の夫クリスチアンの荷をその肩から落したのも、あの人が喜悅のあまり三度躍り上つたのも、これではなかつたでせうか。

グレイト・ハート　さうです、他の方法では切ることの出來なかつたあの紐を斷ち切つたのはこれを信ずることであつたのです。又、あの方にこのことの功德の一つの證據を示せるために、あの方は十字架のところまで荷を運ばされたのです。

クリスティアナ　さうだらうと思ひました。何故なら、私の心はその前にも輕やかで、喜ばしかつたのですが、今は十倍も輕く、喜ばしくなつてゐます。で、私はまだ極僅しか感じてゐ

ないのですが、それでも私の感じたところに依つて、若し世の中で最も重い荷を負うた人がここにゐて、今の私のやうに見たり、信じたりするならば、それは必ずその心を一層愉しく、快活にするだらうと思ひます。

グレイト・ハート　これらのものを見たり、深く考へたりすることに依つて慰藉があたへられ、重荷が輕くせられるのみならず、それに依つて切實な愛情が私どもの中に生れます。何故なら、罪の赦が約束に依るのみならず、がういふ風にして來るものであることを一度でも考へるならば、彼の贖罪の方法と手段に動かされない者、從つてまたそれを自分のために行つて下すつた人に依つて動かされない者がありませうか。

クリスティアナ　その通りです。彼が私のために血を流されたことを思ひますと、私の心が血を流すやうに思はれます。ああ、なんぢ、愛ふかき者よ。ああ、なんぢ、崇とき者よ。あなたは當然私をお有ちになる方です。あなたは私を買はれたのです。あなたは當然私のすべてをお有ちになる方です。あなたは私に値うちがあるより一萬倍もの代價を私のために支拂はれたのです。これが私の夫の眼に水を浮ばせ、又、それがあのやうにかるがると歩を運ばせたのは不思議ではありません。きつと私が一緒にゐたことを願つたことと思ひます。が、私はあのやう

に、ひどい業さらしでしたからあの人をたつたひとりで來させたのでした。ああ、マーシー、あなたのお父さんやお母さんがここにゐられたらと思ひますよ。それからまた、ミセス、ティモラスも。いや、それのみか、私は今、眞心からミセス、ウォントンも亦ここにゐられたらよいと思ひますよ。必ず、必ず、あの人たちの心は動かされますよ。一方の人の恐怖も、また一方の人の強い情慾も、再び家へ立ち戻らせるだけの、さうして善い巡禮となることを斷るやうにさせるだけの力をもたないでせう。

グレイト・ハート　あなたは今、情に激して語つてゐられます。が、いつもかういふ風であると思はれますか。それに、これはあなたのイエスが血を流されるのを見た者には誰彼となく傳へられることではないのです。側に立つてゐた者、彼の心から地面に血の流れるのを見てゐた者もありましたが、それでゐて、このことからは遙かにかけ離れ、哭くどころか、却つて彼を笑ひ、御弟子になるどころか、却つて彼に對してその心を冷酷にしました。ですから、あなた方の有つてゐられる一切のものはね、私の女たちよ、私があなたがたにお話したことを聖く瞑想することに依り、あなたがたの心に刻みつけられた特別の印象に依つて有つてゐられるのですよ。牝雞はその普通の聲では雛に食物を與へないと教へられたことを思ひ出して下さい。

それ故に、これをあなたがたが有つてゐられるのは特別の神恩に依るのです。

さて、なほも私は夢の中で、彼等が先を急いで、クリスチアンが巡禮の道すがらその側を過ぎた時、シムプル、スロース、及びプリザムプションが横たはつて眠つてゐたところまで來るのを見た。〔第一部七七頁參照〕。すると、どうだらう、この三人は向ふ側の少し離れたところに手械足械をはめて木に懸けられてゐた。

マーシー　すると、マーシーは彼等の嚮導であり、案内者であるものに言つた、あの三人はどういふ人ですか。どんなことのためにあすこに懸けられてゐるのですか。

グレイト・ハート　あの三人の男は極めて惡い氣立をもつた者でした。自分たちは巡禮となる氣がなく、出來る限りの者を妨げました。彼等自ら懶惰と愚劣を好み、說きつけることの出來る限りの者をやはりさういふものにしました。のみならず、最後には仕合はせをすると思はせるやうに教へたのです。クリスチアンが側を過ぎた時には眠つてゐました。さうして今、あなたがたが側を過ぎる時には木に懸けられてゐます。

マーシー　でも、あの人たちが人をその意見に從はせることが出來ましたか。

グレイト・ハート　出來ました。幾人もの人に道を踏み逸させました。自分たちと同じやう

12278

にするやうに説きつけた者にはスロウ・ペイス〔遲行氏〕があります。それからまた、ショート・ウィンド〔喘息氏〕といふ者や、ノウ・ハート〔無勇氏〕といふ者や、リンガア・アフター・ラスト〔戀慾氏〕といふ者や、スリーピー・ヘッド〔嗜眠氏〕といふ者や、ダル〔鈍〕といふ名の若い女を説き伏せ、道の外へ逸れて、彼等のやうなものになるやうにしてしまひました。それにあなたがたの「主」の悪い噂を言ひ觸らし、他の者を説きつけて彼は僕を酷使する主人だと思はせました。又、善い御國の悪い噂を言ひ觸らして或人人の言ふやうなそんな善い國ではすこしもありやしないと言ひました。またその仕へ人を誹しその中の最も秀れた者をおせつかいな、厄介な、御苦勞な人たちだと考へ始めました。その上、神のパンは粃殼であり、その子たちの慰藉は妄想であり、巡禮の旅や勞苦を全く無駄なことだと稱へることも出來たのです。

クリスティアナ　おやまあ、とクリスティアナは言つた、さういふ人だつたのでしたら、私は決して可哀さうだなどとは思ひませんよ。あたりまへの仕置を受けてゐるのですもの。またかういふ風に大通の近くへ懸けられて、他の者の見せしめと警告になつてゐるのはいいことだと思ひます。しかし、あの人たちの罪業が鐵か銅かの板か何かに刻みつけて、ここへ、あの人

たちが悪事を行つたそのところへ、他の悪人たちのいましめに殘しておいたらよくはないでせうか。

グレイト・ハート　さうなつてゐますよ、少し壁の方へ行かれたら分ります。

マーシー　いえ、いえ、それには及びません。木に懸けられ、名は朽ち、罪業はいつまでも生きて見せしめにさせておけばいいのです。ここへ來るまでにこの人たちが木に懸けられたのは貴い御恩寵であつたと思ひます。さうでもなければ、私どものやうな哀れな女にどんなことをしたか分りませんよ。そこで、この娘はそれを歌にして言つた——

いざさらば、三人、懸りて、符徴となれよ、
徒を寄せ、眞にそむくすべてのものに。
巡禮に心をつくす者にあらずば、
あとに來る者は恐れよ、かかる最期を。
また、いまし、わがたましひよ、心せよ、
聖けさを迫むるすべてのともがらに。

かうして彼等は「困難の丘」の麓までやつて來た、そこで、また、彼等の善友グレイト・ハ

ートは機會をとらへてクリスチアンその人がここを通りかかつた時に起つたことを話した。さういふわけで、彼は先づ彼等を泉へつれて行つた。ごらんなさい、と彼は言つた、これはクリスチアンがこの丘を登る前に水を飲んだ泉です。その時は清い、良い泉でしたが、今は巡禮がここでその渇をとどめることを望まない或人人の足でかき濁されてゐます。（エゼキエル書三四・一八）。すると、マーシーは言つた、どうして又そんなに猜むのかしら。だが、と彼等の嚮導は言つた、これが掬ひ上げられて、すがすがしい善い器に入れられた時には結構飲めるのです、さうすると、泥は底に沈んで、水は自らもつと清くなつて來ますから。それで、クリスティアナとその道連もさういふ風にするより外に仕方がなかつた。彼等は水を掬ひ上げた、それからそれを陶器の壺に入れた、さうして泥が底に降りてしまふまでそのままにさせておき、さてその上でそれを飲んだ。

次に、彼は彼等にフォーマリティとヒポクリシーが道に迷つた、丘の麓にある二つの側道を示した。〔第一部八三頁參照〕。それで、と彼は言つた、これらは危險な徑なのです。クリスティアンが通りかかつた時には二人の人がここで身を滅してしまひました。さうして、ごらんの通り、これらの道は、その後、鎖と柱と溝でとざされたのですけれども、それでもなほ、骨を折

つてこの丘を登るよりも寧ろここで危險を冒した方がよいと思ふ者があります。

クリスティアナ　『違犯者の途は艱難なり。』（箴言一三・一五）。頸の骨を折る危險もなしにその道へ入り込むことが出來るのが不思議ですよ。

グレイト・ハート　何としても行くのですよ。それどころか、何時でも「王」の仕へ人の誰かが偶〻彼等を見て、間違つた道に入つてゐると告げ、危險に氣を付けろと言ひますと、その時、彼等は嘲笑ひながら答を返して、『なんぢが「主」の名に於いてわれらに述べし言葉につきては、われらなんぢに聽かじ。われらは何にもあれ、われらの口より出づることを必ずなすべし』などと言ふのです。（エレミヤ記四四・一六、一七）。それに、もう少し先をごらんになると、これらの道はこの柱や溝や鎖に依るばかりではなく、またすつかり籬を廻らして周到に警戒を施したものであることがお分りになるでせう、が、それでもその人人はそこへ行かうとするのです。

クリスティアナ　その人人は懶けものです。骨を折ることを好まないのです。登り道が不愉快なのです。それで、『惰者の道は棘の籬なり』と記されてゐる通りに、その人人に成就せられてゐるのです。そりやもう、その人人はこの丘を登り、都へ行くそれから先のこの道を辿る

よりも寧ろ陷穽の上を歩くことを好むでせう。

そこで彼等は出發して丘を登り始め、上り坂を歩いて行つた。が、頂上に達する前にクリスティアナは喘ぎ出した、さうして言つた、これはきつと息苦しい山なのよ。靈魂よりも安樂を愛するものがもつと平らかな道を選ぶのも不思議ではないことよ。すると、マーシーは言つた、私、坐らなくちやならないわ。又、子供たちのうちの一番小さいものは泣き出した。さあ、さあ、とグレイト・ハートは言つた、こんなところに坐り込んではいけません、もう少し上へ行くと「君」の四阿亭がありますから、それから彼は幼いものの手をひいてそこまでつれて行つた。

四阿亭まで來た時、一同はいそいそと腰を下した、誰もみな酷しい暑さになやんでゐたのであるから。すると、マーシーは言つた、勞する者にとつての憩は何といふ樂しいことでせう。（マタイ傳一一・二八）。又、巡禮たちの「君」がかういふ休憩所を備へて下さるのは何といふ御親切なことでせう。この四阿亭のことはよく聞いてゐました。が、これまでには見たことがありませんでした。でも、ここで、眠らないやうに氣をつけませうね、私の聞いたところに依りますと、お氣の毒にもクリスチアンに大變な犧牲を拂はせたのはそれだつたといふことですから。

すると、ミスタア、グレイト・ハートは小さい人たちに言つた、さあ、可愛い子供たち、氣もちはどうです。巡禮に出かけることをどう思ひますか。すると一番小さいものが言つた、動悸が打つて心臟が張り裂けさうでした、でも、困つてゐた時に手を貸して下すつてありがたうございました。それから今、お母さんが教へて下さつたことを思ひ出します、すなはち、天に行く道は梯子を上るやうなもので、地獄へ行く道は丘を降るやうなものだといふことです。でも、私は丘を降つて死に行くよりも梯子を上つて命に行きたいと思ひます。

すると、マーシーは言つた、でも、諺に、「丘降る道、樂な道」とありますね。しかし、ジェイムズ〔ヤコブ〕（それがその名であつたので）は言つた、私の考へるところでは、丘を降りて行くのがどの道よりも難しいものになる日が近づいてゐます。よく出來ました、とその先生が言つた、あなたは正しい答をしましたよ。すると、マーシーはにつこりと笑つた、が、子どもは顏を赤くした。

クリスティアナ　さあ、とクリスティアナは言つた、ここで脚を休めてゐる間、少少口を樂しくするために、何かちよつと食べますか。といふのは、ミスタア、インタープリタアがあの方のお家を出る時に私の手に入れて下すつた柘榴がすこしありますよ。あの方は又蜜房をすこ

しとお酒の小さな壜を下さいました。あなたに何か下すつたのだと思ひましたよ、とマーシーは言つた、片わきへお呼びになりましたから。さうなの、下すつたのですよ、と對手は言つた。ですけれど、とクリスティアナは言つた、最初家から來た時にさうしなければならぬと言つたやうにいつもいたしますよ、あなたはあのやうに快く私の道連になつて下すつたのですから、私の有つすべてのよいものを頒けて私どもと一緒にいただくのです。そこでこの人はマーシーにも子供たちにも、皆の者に與へた。で、あなた、とクリスティアナはミスタア、グレイト・ハートに言つた、あなたも私どものやうに召し上りますか。しかし彼は答へた、あなたがたは巡禮の旅をしてゐられます、私はやがて歸る身の上です。お有ちになつてゐるものが、せいぜいお役に立つやうに祈ります。家へ行けば私も毎日同じものを食べてゐるのです。さて、彼等が食べたり、飲んだりして、なほしばらくお喋舌りをした時、案内人は彼等に言つた、日が暮れかかつて來ました、およろしければぼつぼつ行くことにしようではありませんか。そこで、彼等は起ち上つて歩き、子供たちは先に立つて行つた。しかし、クリスティアナは酒の壜をもつて行くことを忘れた。それで子供をかへしてとりにやつた。すると、マーシーは言つた、これは物を失ふところだと思ひます。ここでクリスチアンはその卷物を失ひました。ここでクリステ

イアナはその壜を置き忘れました。あなた、この原因は何ですか。そこで、案内人は答へて言つた、原因は眠と忘却ですよ。或人は目を覺ましてゐなければならぬ時に眠ります。また或人は覺えてゐなければならぬ時に忘れます。で、これが屢〻休憩所で、或巡禮が、或ことがらで損をする者となるのはどういふわけかといふことのほんたうの原因です。巡禮といふものは目を覺まして、彼等が既にその最も大いなる享樂の下に受けたことを覺えてゐるべき筈です。しかし、さうすることが缺けてゐるために、往往にして彼等の喜悅は涙に終り、彼等の日光は雲にとざされるのです。この場處でのクリスチアンの物語を見てもあきらかです。

ミストラストとティモラスが獅子が恐いからといふので後戻りをするやうに說きつけやうとしてやつて來たところ〔第一部八五頁參照〕まで行つた時、一つの仕置臺のやうなものがあつて、その前の、道に對つた側にひろい板があり、それには一節の詩が書いてあり、またその下へ、その場處にその仕置臺が建てられた理由が說明せられてゐるのに氣がついた。その詩はこれであつた——

この仕置場を見る者は
心と舌にこころせよ。

さらずば、ここへ急ぐべし、
むかし、急ぎし人のごと。

詩の下の言葉は次の通りであつた、『この仕置臺は臆病或は不信に依り、巡禮の旅を進むるを恐るるが如き者をその上にて處罰するために建てられたるものなり。また、この仕置臺の上にてはミストラストとティモラスの兩人、クリスチアンをその旅路に於いて妨げむと努めたるに依り、熱鐵をもて舌を燒き貫かれたり。』

すると、マーシーは言つた、これは「〔神に〕愛されし者」〔ダビデ〕の言ひぐさによほどよく似てゐますね、『いつはりの舌よ、なんぢに何をあたへらるべきか、或は何を爲さるべきか。ますらをの利き箭と杜松の炭なり。』（詩篇一二〇・三、四）。

そこで、彼等は進んで獅子の見えるところへやつて來た。さて、ミスタア、グレイト・ハートは強い人であつた、それで獅子を恐れなかつた。しかしながら、彼等が獅子のゐるところへ來た時先へ立つて進んでゐた子供たちは退いて小さくなつてゐる方がありがたいと思つた、そこで後へ退り、あとの方へ廻つた。これを見て、彼等の案内人は微笑み、さうして言つた、どうしたのです、子供たち、危險が近づいて來ない時には先に立ち、獅子が出て來るとさつそく

後へ廻るのが好きなのかね。

さて、彼等が登つて行つた時、ミスタア、グレイト・ハートは獅子を物ともせず、巡禮たちのために道をひらくつもりで、その劍を拔いた。すると、そこへ獅子の後押に敢へて自ら當らうとする者のやうに思はれた一人の男が現はれた。で、この男は巡禮たちの嚮導に向つて言つた、どういふわけで貴樣たちはここへ來たのか。さて、この男の名はグリム〔兇暴氏〕或はブラディ・マン〔流血氏〕であり、巡禮を殺すからさういふ名を與へられてゐた、又、彼は巨人の族の一人であつた。

グレイト・ハート　すると、巡禮たちの嚮導は言つた、この女たちと子供たちは巡禮に行くところだ、これはその行かなければならぬ道だ、で、なんぢと獅子が何としようと、この人たちを行かせて見せるぞ。

グリム　これはその者どもの道ではない、またここへ入ることは罷りならぬ。己はさし止めるために來たのだ、で、その目的のために獅子の後押をするぞ。

さて、實情を言ふと、獅子の獰猛と、その後押をする男の兇暴なふるまひに依つてこの道は近ごろ人通りがなくなり、殆んど草に蔽はれてゐた。

クリスティアナ　すると、クリスティアナは言つた、これまでは大道に人通りがなくなつてゐましたけれども、過ぎ去つた時には旅人が側道を歩きましたけれども、私がふるひ立つた今はさういふことであつてはならないのです。今、『われ起ちてイスラエルに母となれり。』（士師記五・六、七）。

グリム　すると彼は獅子に誓つて、何と言つてもさういふことでなければならぬ、だから側道へ行け、彼等はここを通ることが出來ないのだから、と言つた。

グレイト・ハート　しかし彼等の嚮導は先に立つてグリムに立ち向ひ、その劍をもつて縱横無盡に打ちかかつたので、彼はたぢたぢと退却するより仕方がなくなつた。

グリム　すると、獅子の後押をしようとした者は言つた、貴樣は己の領土で己を殺すつもりか。

グレイト・ハート　われわれの入つてゐるのは「王」の公道だ、なんぢは王の道になんぢの獅子を置いてゐるのだ。が、弱い者ではあるが、この女たちと子供たちには、汝の獅子があらうとあくまでもその道を貫徹させる。さう言ふと共に、眞向ふから一擊を加へて彼に膝をつかせた。またこの一擊でその兜をうち碎き、次の一擊で片腕を斬り落した。すると、巨人は

恐しい聲をあげて號いたので、女たちは愕然とした、が、その地上に跑きながら横たはつてゐるのを見て喜んだ。さて、この獅子どもは鎖でつながれてゐたので、ひとりではどうすることも出來なかつた。それで、彼等の後押をしようと考へてゐた老怪グリムが死んだ時、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、さあ、私についていらつしやい、獅子から害を受けるやうなことは起りませんから。彼等はそこで先を急いだ、が、女たちはその側を通る時に戰へた。子供たちも亦死にさうな顏をしてゐた、が、一同、それ以上に害を蒙ることもなく通り過ぎた。

その中に彼等は門守の番小屋の見えるところへ行き、やがてそこに辿りついた。が、このことがあつてから後はそこへ行くことを一層急いだのであつた、といふのは、夜その邊を歩くことは危險であつたからである。それで、門に來た時、嚮導は門を叩き、門守は叫んだ、誰方ですか。しかし、嚮導が、私ですよ、と言ふと、すぐさま、彼はその聲を聞き分けて降りて來た（嚮導はそれまでにも屢〻巡禮の案內人としてそこへ行つたことがあつたので）。降りて來た時に彼は門を開いた、さうしてそのすぐ前に立つてゐる嚮導を見て（女たちはその後にゐたので見えなかつたのである）彼に言つた、どうせられました、ミスタア、グレイト・ハート、今晩こんなに遲く何の御用で來られました。巡禮を數人、と彼は言つた、こちらへつれてまゐりま

した、主人の命令で、その人達はお宿を願はなければならないのです。いつも獅子の後押をする巨人のやつに邪魔をせられなければ、もう少し早くここへ來る筈でした。が、長い、厄介な格闘の後、あいつを斬り斃して巡禮たちを安全にここへつれてまゐりました。

門守　お入りになつて、朝までおとまりになりませんか。

グレイト・ハート　いや、私は今夜主人のもとへ歸ります。

クリスティアナ　まあ、あなた、あなたが私どもの巡禮から離れておしまひになるなどといふことは思も依らないことですわ。實意をつくし、親切をつくし、強く私どものために戰ひ、まごころから忠告を與へて下すつたのですもの、私は決して私どもに對する御好意を忘れることはないと思ひます。

マーシー　すると、マーシーは言つた、ああ、私どもの旅路の果までついて來ていただくことが出來ればどんなにかありがたいのですけれど。私どものやうな哀れな女が、友もなく護衛もなしに、この道のやうに艱難に滿ちた道をどうしてつづけて行くことが出來ませう。

ジェイムズ　すると、一番末の子供のジェイムズが言つた、ねえ、あなた、曲げても私どもと一緒に行つて、私どもを助けて下さいませんか、私どもはこんなに弱いのですし、この道は

事實このやうに危險が多いのですから。

グレイト・ハート　私は主人の命のままに從ひます。若し主人が終始あなた方の嚮導をするやうにと定めたならば、喜んでお供をいたしませう。が、ここで、あなたがたは最初にやり損ひをせられました。といふのは、主人が私にここまでお供をするやうにと言ひつけた時、あなた方は最後まで一緒について來て貰ふやうにお願ひになるべきで、さうすれば、主人は御要求を聽いただらうと思ひます。ですが、現在のところ、私は引き退かなければなりません。それで、クリスティアナさん、マーシー、また健氣な子供たちよ、さやうなら。

すると、門守、ミスタア、ウォッチフル〔第一部八九頁參照〕はクリスティアナにその國のこと、その身内のことを尋いた。で、この人は言つた、私は「滅亡の市」からまゐりました。私は孀婦でございまして、夫は亡くなつたのでございます。夫の名は巡禮のクリスチアンでございます。何と仰有います、と門守は言つた、あの方が御主人でしたか。さやうでございます、とこの人は言つた、また、これはその子供たちでございます。また、これは、とマーシーを指しながら、私と同じ市の方でございます。すると、門守は、さういふ時の慣に從つて呼鈴を鳴らした、すると、門のところへその名をハムブル・マインド〔謙〕といふ、娘たちのひとりがや

つて來た。で、その娘に門守は言つた、奥へ行つて、クリスチアンの妻のクリスティアナとその子供たちが巡禮の途すがらここへ來てゐますと言つて下さい。そこで、娘は奥へ入つて行つて、それを告げた。しかし、ああ、その娘がその口からただその言葉を洩らした時、奥では何といふ歡喜の聲が擧つたことであらう。

そこで人人は急いで門守のところへ來た、クリスティアナはまだ門に立つてゐたのであるから。すると、その中でも最も落ちついた人の或者が言つた、さあさあ、お入りなさい、クリスティアナ、お入りなさい、あの善人の奥さん。お入りなさい、惠まれた女よ、おつれになつた皆さんと一緒にお入りなさい。そこで、この人は入つて行つた、またその子供であり、道づれであつた者もそのあとにつづいた。さて、入つて行くと、大さう大きな部屋につれて行かれ、そこで腰を下すやうにと言はれた。で、腰を下した、すると家の主だつた者がお客さまに逢つて歡迎するために呼ばれた。そこで彼等は入つて來た、それから、この人達が誰であるかといふことは分つてゐたので、互に接吻して、言つた、よくいらつしやいましたね、神の惠の器である人たちよ、あなた方の友である私どものところへよくいらつしやいました。

さて、時刻は大分遲かつたので、また巡禮はその旅に疲れてゐたので、それに鬪ひを見たり、

恐しい獅子を見たりしてぐつたりしてゐたので、それで、彼等は出來るだけ早く憩につく支度がしたいと願つた。いや、と家族の人たちは言つた、それよりも先づ少し肉でも食べて元氣になつて下さい。といふのは、この人たちのために小羊をそれについたいつものソースと共に用意しておいたので。（田埃及記一二・二一、二八。ヨハネ傳一・二九）。それは、門守が彼等の來ることを前以て聞いてゐて、それを奥の人たちに通じておいたからである。そこで、食事をしたため、詩篇を誦へてその祈禱を終つた時、彼等は再び憩につきたいと願つた。しかし、とクリスティアナは言つた、選り好みをするやうなあつかましいことが許されるものでございましたら、主人がこちらにゐました時に住んでゐた部屋に憩ませていただきたいのでございます。そこで、人人は彼等をそこへつれて行き、彼等は皆一つの部屋に身を横たへた。一同が憩んでゐた時、クリスティアナとマーシーはいろいろその場合に適はしいことの談話を始めた。

クリスティアナ　主人が巡禮に出かけました時には、後を逐ふことがあらうなどとは全く思ひませんでもたよ。

マーシー　かうしてその床に身を横たへ、その御部屋で憩むことなどもお考へにはならなかつたでせう。

クリスティアナ　なほさらのこと、安らかな思をもつてあの人の顏を見たり、もろともに、「主」の君を崇めたりすることは思ひも寄らなかつたのですが、しかし今ではさうなることを信じてゐます。

マーシー　お聽きなさい。樂隊が聞えませんか。

クリスティアナ　聞えますよ、あれはきつと私どもがここへ來たことを喜ぶための音樂の音ですよ。

かういふ風にしばらく話してゐたが、やがて二人は眠に就いた。そこで、朝になり、この二人が目を覺ました時、クリスティアナはマーシーに言つた。

クリスティアナ　今晩、眠つてゐる間にお笑ひになつたのはどうなすつたのですか。多分夢を見てゐたのでせう。

マーシー　さうでした、樂しい夢でしたよ。でも、ほんたうに笑ひまして？

クリスティアナ　ええ、心底から笑つたわ。でも、マーシー、どうかその夢を話して下さいな。

マーシー　私はたつたひとりで寂しいところに坐つてゐる夢を見てゐました、さうして私の

心の冷たいことを嘆いてゐました。ところが、そこに坐つてゐることもあまり長くならないうちに大勢の人が私を見たり、私の言ふことを聞いたりするため、私のぐるりに集つて來たやうに思ひました。で、その人たちは耳を傾け、私はなほも私の心の冷たさを嘆いてゐました。これに對して或人は私を笑ひました、或人は私を莫迦者だと言ひました、或人は私をこづき廻しました。さうすると、私は上を見上げ、一人の人が翼を張つて私の方へ來るのを見たやうに思ひました。で、その人はまつすぐに私のところへ來て言ひました、マーシー、どうしたのかい。そこで、その人が私の嘆きを聞かれた時、彼は言はれました、『平安、汝にあれ。』（註。士師記一九・二〇、ペテロ前書五・一四參照）。その人は又そのハンカチーフで私の眼を拭ひ、私に銀と金の衣を着せて下さいました。その人は私の頸のぐるりに鎖をつけ、私の耳に耳環をつけ、私の頭に美しい冠を戴かせて下さいました。（エゼキエル書一六・八—一二）。それから私の手をとつて言はれました、マーシー、わがあとに從へ。そこで彼は昇天せられ、私はそのあとからついて行き、終にある黃金の門のところへ行きました。すると、彼は門をお叩きになりました、さうして奥にゐる人人が戸を開きました時、その人は入つて行かれ、私はそのあとに從つて玉座のところへ行きますと、その上にある人が坐つてゐられ、その人は私に、女、よく來たね、と仰有いま

した。その場處はあかるく、きらきらと輝いて星のやうでした、といふよりも太陽のやうでした。それから、そこではあなたの御主人を見たやうに思ひました。それで、夢から覺めました。が、私、笑ひましたか。

クリスティアナ　笑つたどころですか。でも、そんなに幸福な身の上をごらんになつたのですから、無理はありませんよ。私がこんなことを言ふのを許して下さらなければなりませんが、それは善い夢なのですから、又、その第一の部分がほんたうであるごとが分つて來られたやうに、第二の部分もさうだといふことが最後にはお分りになるでせうから。『まことに神は一度二度告げ示したまふなれど、人これを曉らざるなり。人、熟睡する時、また床に睡る時に夢或は夜の異象の中に。』（ヨブ記三三・一四、一五）。私どもは、床についてゐる時には、神とお話をするために目を覺まして横たはつてゐる必要はありません。彼は私どもの眠つてゐる間に私どもを訪れて、その時私どもにその聲を聞くやうにさせて下さることが出來るのです。私どもの心は屢〻私どもが眠つてゐる時に目を覺ましてゐます。神はそれに對つて、言葉に依るか、諺に依るか、休徴と喩に依つて、人が目を覺ましてゐるのと同じやうに、話をすることが出來るのです。

マーシー　とにかく、私は私の夢を喜んでゐますよ、そのうちにそれが實現せられて、もう

一度私を笑はせてくれることになると思ひますから。

クリスティアナ　もうとつくに起きて、私どものしなければならぬことを伺ふ時刻になつてゐると思ひます。

マーシー　若し暫く滯在するやうにと言つて下さつたら、快く御親切に從ふことにしませう、ね、お願です。あのお嬢さんたちともう少しお近づきになるために、ここで暫く滯在したいのです。プルーデンスとパイエティとチャリティ〔第一部九二頁參照〕は大さううつくしい、またまじめな顏をもつてゐるやうに思はれます。

クリスティアナ　皆さんのなさることを見てからのことにしませう。そこで、起き上つて、支度が出來た時、彼等は下階へ降りて行つた、さうして一同は互にその憩みを訊ね、又、快く眠れたかどうかと尋ねあつた。

マーシー　大變よくやすめました、とマーシーは言つた、これまでの生涯にもつた一等氣もちのよい夜のやどりの一つでした。

すると、プルーデンスとパイエティは言つた、暫くここにおとまりになるといふことにせられたら、この家でかなふものはあなたがたのものです。

チャリティ　さうなの、それにほんたうに喜んでさし上げますのよ、とチャリティは言つた。で、彼等は同意し、そこに、一月或はそれ以上も滞在し、お互に大さう益を受けた。また、ブルーデンスはクリスティアナがどういふ風にその子供たちを育てたかといふことを知りたいと思つたので、子供たちの信仰を試問する許可を求めた。で、クリスティアナは快く承諾した。そこで、ブルーデンスは、その名をジェイムズといふ、一番若い子どもから始めた。

ブルーデンス　で、この人は言つた、さあ、ジェイムズ、あなたは誰があなたを創つたかといふことを私に言ふことが出來ますか。

ジェイムズ　父なる神、子なる神、聖靈なる神。

ブルーデンス　よく出來ました。誰があなたを救つたかといふことを言ふことが出來ますか。

ジェイムズ　父なる神、子なる神、聖靈なる神。

ブルーデンス　これも、よく出來ました。でも、どういふ風にして父なる神はあなたを救はれましたか。

ジェイムズ　その恩寵に依つて。

ブルーデンス　どういふ風にして子なる神はあなたを救はれましたか。

ジェイムズ　その義と、死と、血と、命に依つて。

ブルーデンス　して、どういふ風にして聖靈なる神はあなたを救はれましたか。

ジェイムズ　その照明と淨化と保護に依つて。

すると、ブルーデンスはクリスティアナに言つた、かういふ風に子供たちをお育てになつたのは御手柄でしたね。一番末の方がこんなによくお答へになることが出來るのですから、他の方にこれらのことをお尋ねする必要はないと思ひます。それで今、その次の一番若い方に尋いて見ませう。

ブルーデンス　さあ、ジョウゼフ（この子の名はジョウゼフ〔ヨセフ〕であつたので）、私が問ふことに答へて下さいますか。

ジョウゼフ　よろしいですとも。

ブルーデンス　人間とは何ですか。

ジョウゼフ　理性のある動物で、神に依り、弟が申したやうにして創られたものです。

ブルーデンス　『救はれた』といふこの言葉にはどういふことが含まれてゐますか。

ジョウゼフ　人間は、罪に依り、俘囚と苦難の境遇を招いたといふことです。

ブルーデンス　三位一體の神に依つて救はれるといふことにはどういふことが含まれてゐますか。

ジョウゼフ　罪はとても大きな、力のある暴君なので、神以外の何者もその毒手から私どもを引き出すこ[illegible]が出來ないといふこと、又神は人間に對して極めて親切で、愛が深く、その結果、實際にこの苦しい境遇から人間を引き出して下さるといふことです。

ブルーデンス　哀れな人人をお救ひになる神の御計畫は何ですか。

ジョウゼフ　御名と御恩寵とその正義その他の榮を示すことです、又その創られたもののとこしへの幸福をはかることです。

ブルーデンス　救はれなければならぬものは誰ですか。

ジョウゼフ　その救を受け容れる者です。

ブルーデンス　よく出來ました、ジョウゼフ。お母さんはあなたにしつかりと教へ、あなたはよくその言はれたことを聽きましたね。

それから、ブルーデンスは一人を除いては一番年上のサミュエルに言つた。

ブルーデンス　さあ、サミュエル、あなたにも問を出すことを承知して下さいますか。

サミュエル　無論です、どうか何でも仰有つて下さい。

ブルーデンス　天國とは何ですか。

サミュエル　最も惠まれた場處、又、境遇です、神がそこに住んでゐられますから。

ブルーデンス　地獄とは何ですか。

サミュエル　最も悲しい場處、又、境遇です、罪と惡魔と死の住むところですから。

ブルーデンス　何故あなたは天國へ行きたいと思ひますか。

サミュエル　神を見て、疲勞ることなくお仕へすることが出來るやうに。キリストを見て、とこしへに愛しまつることが出來るやうに。ここではどうしても享けることが出來ないほど十分に聖靈に滿たされるやうに。

ブルーデンス　これもなかなかよく出來る子供です、又よく學んだ子供です。

そこで、この人は、その名をマシウ〔マタイ〕といふ長男に言葉を向けて言つた、さあ、マシウ、あなたにも問ひますが、いいですか。

マシウ　承知いたしました。

ブルーデンス　では、神に先立ち、或は神より前にかつて何かあつたかどうか、それを尋ね

ます。

マシウ　ありませんでした。神は劫初からの神ですから。又、第一の日の始に至るまで、神御自身を除いては生存してゐたものがありませんでした。『そは六日の中に主は天と地と海とその中のあらゆる物とを造り給へり。』〔註。創世記一、出埃及記三一・一七、使徒行傳四・二四參照。この引用文は出埃及記と使徒行傳を結びつけたものと思はれる。〕

ブルーデンス　聖書を何と思ひますか。

マシウ　神の聖なる言葉です。

ブルーデンス　その中に書かれたことであなたに分らないことは何もありませんか。

マシウ　あります。たくさんに。

ブルーデンス　その中であなたに分らないやうな個所に出會はした時にはどうしますか。

マシウ　神は私よりも聰明であると思ひます。〔註。神の御旨が分らないのは當然である、との意。ウエインウッドの田舍小屋でロマ書八・一九―二三の意味を訊かれた時、バニヤン自ら『聖書は私よりも聰明である』と答へたといふことが傳へられてゐる。〕私は又、神が私のためになるであらうといふことを知つてゐられるその中のすべてを知らせて下さるやうに祈ります。

ブルーデンス　死者の復活についてはどういふ風に信じてゐますか。

マシウ　彼等、すなはち、葬られた者、腐敗に於いては同じものでありませんが、本質に於いては同じものがよみがへると信じます。又、私はこれを二重の理由に基いて信じます、第一、神がそれを約束せられたのですから。第二に、神はそれを行ふことが出來るのですから。

すると、ブルーデンスは子供たちに言つた、あなたがたはなほお母さんの仰有ることをよく聽かなければなりません、お母さんはまだまだあなたがたに教へることが出來るのですから。あなたがたはまた勉めて他人から聽く、ためになる話に耳を傾けなければなりません、何故なら、あなたがたのためにその人たちはためになる話をするのですから。又、天と地が教へることを觀察し、それも注意ぶかく觀察するのですよ。しかし特に、あなたがたのお父さんが巡禮になる原因であつたあの「書物」を熟讀するのですよ。私は私で、子供たちよ、あなたがたがここにゐる間に、私の力にかなふことならば教へてあげます、また信仰上の修養になるやうな質問を出して下さるなら嬉しく思ひます。

さて、この頃にはこの巡禮たちも一週間この場處にゐたので、マーシーには大分この娘に意を寄せてゐるやうな一人の訪問客が出來た。その名をミスタア、ブリスク〔輕燥氏〕と言つて、

多少教養のある人であり、宗教にも志があるやうな風であつた。が、俗世間とは極めて密接な間がらの人であつた。それで、この人は一度また二度ならず、マーシーのところへ來て愛を寄せるのであつた。このマーシーは美しい顏の娘であつた、それで、なほさらのこと魅力があつたのである。

この娘の心も亦、いつも何かすることに忙しくしてゐた。自分のために何もすることがない時には、他人のために袴や着物をつくるのが常で、またそれを乏しい人人に與へるのが常であつたから。で、ミスタア、ブリスクはこの娘がその作つたものを、何處へ或はどういふ風に處置するかといふことを知らなかつたので、その片時も怠けてゐないといふことは大いに思召にかなつたやうであつた。こりやきつとよいお內儀さんになるぞ、と彼は心の中で思つた。

マーシーはそこで家人であつた娘たちにこの事をうちあけ、その人たちはマーシーよりもよく當人を知つてゐたので、この人のことを尋ねた。で、娘たちの言ふには、彼はずゐぶん氣忙しい人で、宗教にも志のある人であつた、が、どうも善であるものの力には無頓着な人ではないかと思はれる、といふことであつた。

まあ、それぢやあ、とマーシーは言つた、私はこれ以上お目にかかりますまい。私は決して

心に障碍を有たないつもりですから。

ブルーデンスは、すると、答へて、あの人には大して氣を落させるやうなことをする必要はない、マーシーが貧しい人人のために行ひかけたことを續けてゐれば、やがてその意氣込が冷却するであらう、と言つた。

それで、その次に來た時、彼はこの娘が、例の仕事をしてゐるのを發見した、貧しい人人のためのものを作りながら。すると、彼は言つた、おや、いつもそれをやつてゐるのですね。はい、と娘は言つた、私のために、又、他人さまのために。それで一日にいくら儲かりますか、と彼は言つた。私がこんなことをしますのは、と娘は言つた、『善き業に富み、眞の生命を捉ふることを得んために、來るべき時に對して善き基を貯ふることを得んため』です。（テモテ前書六・一七—一九）。ええ、では伺ひますが、それで何をなさるのです。裸のものに衣せるためです、と、娘は言つた。（註。マタイ傳二五・三六參照）。それを聞くと、彼は面を伏せた。そこで、彼は再びこの娘のもとに來ることをさしひかへた。さうして、その理由を問はれた時、彼は言つた、マーシーは可愛い少女だが、よくない氣質にわづらはされてゐるのでね。

男が娘を離れた時、ブルーデンスは言つた、ミスタア、ブリスクはやがてあなたを棄てると

言ひませんでしたか。そればかりではなく、あなたの悪い噂を言ひ觸らしますよ。何故なら、あの人が宗教に志をもつてゐるにも拘らず、また、見たところではマーシーを愛してゐるやうに思はれるにも拘らず、マーシーとあの人はまるで違つた氣立の人ですから、二人は到底一致しないと信じてゐます。

マーシー　誰にもそのことを言ひませんでしたが、私は今までにも夫を有つことが出來たのです。しかし、その人たちは私の氣質を好まないやうな人でした、その一人でも私の容姿に難くせをつけた者はなかつたのですけれど。それでその人たちと私とは一致しなかつたのです。

ブルーデンス　今の時代にはマーシー〔慈善〕の名ばかりが稱へられて、それ以上のことはまるで重んぜられないのですもの。あなたの氣質から出た行に堪へ得る者はほんの僅かの人たちですよ。

マーシー　ようございます、とマーシーは言つた、誰も私を迎へてくれなければ私は獨身を通します、それとも私の氣質を夫のやうなものにします。もつて生れたものを變へることは出來ないのですもの。それにこの一事で私と反對の人と緣を結ぶといふことだけは私の生きてゐるかぎり承知しないつもりです。私にはバウンティフル〔寛〕といふ名の姉がありまして、そ

れがああいふ卑しい人の一人と結婚しました。が、その人と姉とはどうしても合ひません。姉はその始めからの行を、といふのは貧しい人人に親切にすることを決心してゐましたので、夫はいさかひの時に姉を罵りました、その上でその家から追ひ出してしまひました。

ブルーデンス　でも、きつと、その人は信者だつたのでせう。

マーシー　さうなのです、世の中は今、その人のやうな者や、あの人のやうな者で滿ちてゐます、が、私はああいふ人人には一切御免を蒙ります。

このころクリスティアナの長男マシウは病氣になり、またその病はひどく彼を苦しめた、といふのは腹部に時時兩方の端を同時に締めつけられるやうな激しい痛みを感じたのである。それに又、そこから遠からぬところにミスタア、スキル〔老巧氏〕といふ、年をとつた評判のよい醫者が住んでゐた。そこで、クリスティアナの希望で、彼等はこの人を迎へに人を送り、彼はやつて來た。部屋に入つた上、少しその子供を診察した時、彼はその子供が腹痛を病んでゐるのであると言つた。それから子供の母に言つた、マシウは最近どんな食べものを食べましたか。食べものでございますか、とクリスティアナは言つた、衛生にかなつたもの以外には何もいただかせて居りませんが。醫者は答へた、この子は何か或ものに手を出したのであるが、そ

れが消化れないで胃の腑に殘つて居り、手段を用ゐなければとり除くことが出來ない。これはどうしても下劑をかけなければならぬ、でないと死んでしまひます。

サミュエル　すると、サミュエルが言つた、お母さん、お母さん、道の始にあるあの門を出てから間もなく兄さんが拾つて食べたのは何でしたつけ。そら、左手の、壁のむかふ側に果樹園があつて、その樹の或ものは、壁の上に蔽ひかかつてゐたのを兄さんは打ち落して食べたでせう。

クリスティアナ　ほんに、さうだつたね、とクリスティアナは言つた、この子はあれをとつて、食べたわね。仕様のない子だつたらありやしない、私は叱つたのだけれど、それでも食べようとするのだものね。

スキル　衛生にかなはない食べものを何か食べたのだといふことは分つてゐました。それにあの食べもの、すなはちあの果實は中でも最も有害なものなのです。あれはベルゼブルの果樹園の果實です。あれを注意してあげる者がなかつたのは不思議です。ずゐぶんの人があれで死にましたよ。

クリスティアナ　するとクリスティアナは泣き出した。さうして言つた。何といふ仕樣のない子どもだらう！　また、何といふ不注意な母親だらう！　この子のためにどう致せばよろしいでせうか。

スキル　まあ、まあ、あまり氣を落さないで下さい。子どもは回復するかも知れませんよ、だが、下劑と吐瀉はやらなければなりません。

クリスティアナ　どうかお力で出來るだけのことをしてやつて下さい、費用はいとひませんから。

スキル　いや、なるだけお安値くしてあげたいと思つてゐるのです。そこで、彼は下劑を作つた、が、それは弱くて利き目がなかつた、それは山羊の血とまだ仔を生まない牝牛を灰にしたもの、少量の牛膝草の液などで作つたものだといふことであつた。（ヘブル書九・一三—一九、同一〇・一—四）。下劑が弱くて利かないことを見た時、スキル氏はマシウのために適當なものを作つた。それは Ex Carne et Sanguine Christi（註。「キリストの肉と血より」『このラテン語は借用したものである。』とベニヤンは傍註の中に述べてゐる。『天路歷程』の中にラテン語の引用せられてゐるのは第一部と第二部にそれぞれ一回あるだけで、この場合などはわざわざ自分が無學であることを斷つてゐるゆである。ここではただ藥品らしく見せるためであり、また暗に世間の藥品に行はれる奇怪な言葉を飜したものと思はれる。）（ヨハネ傳六・五四—五七、ヘブル書九・一四）。（御承知の通り醫者といふものは患者に

奇體な藥を與へるものである。）で、それは一粒か二粒の約束と、これに相應するだけの鹽を加へて、丸藥に作り上げられた。（マルコ傳九・四九）。さて、彼は絶食の間、それを一回に三粒宛、一パイント（約三合一勺餘）の四分の一の半分の悔改の涙に入れて飲まなければならぬといふことであつた。（セカリヤ書一二・一〇）。この服藥が配劑せられた時、子供は腹痛で身がちぎれるやうに苦しみながらも、飲むことを嫌つた。さあ、さあ、と醫者は言つた、飲まなければいけないよ。胸がむかむかするのです、と子供は言つた。私はどうしても飲ましますよ、とその母は言つた。きつと吐き出してしまひます、と子供は言つた。伺ひますが、とクリスティアナはミスタア、スキルに言つた、それはどういふ味のするものですか。すこしも惡い味はありませんと、ドクタアは言つた、そこで、彼女はその舌の先で丸藥の一つを嘗めて見た。まあ、マシウ、と彼女は言つた、この服藥は蜜よりも甘いのよ。若し、お前がお母さんを愛するなら、若しお前が弟たちを愛するなら、若しお前がマーシーを愛するなら、若しお前がお前の命を愛するなら、飲んでおくれ。で、大騒ぎをして、その藥の上に神の祝福を祈つた後、彼はそれを飲み、それは又都合よく効能を示した。それは下瀉を起し、又靜かに眠り、かつ、休むやうにさせた。それは氣もちのよい發熱と夥しい發汗を催さしめ、すつかりその腹痛をとり除いた。

そこで、いく程もなく彼は起き上り、杖をついて歩き廻り、部屋から部屋へと行き歩いて、グルーデンスやパイエティやチャリティに、彼の病のことや、どういふ風にして癒されたかといふことを話すのであつた。

そこで、子供が癒された時、クリスティアナはミスタア、スキルに言つた、先生、この子のためにいろいろお骨折やお心遣にあづかりましたにつきましてはいかほど御禮を致せばよろしうございますか。すると、彼は言つた、さういふ場合にそなへて作られ、又用意せられた規則に從つて、醫師會の會長に支拂つていただきます。（ブル書一三・一一—一五）。

クリスティアナ　が、先生、と彼女は言つた、これはこの他のどういふものに利くのでございますか。

スキル　何にでも利く丸藥です。巡禮が罹りやすい一切の病氣に効能があります。さうして、よく調劑してある時には、いつまでも保ちます。

クリスティアナ　どうか、先生、私にこれを十二函こしらへて下さいませんか。これを手に入れることが出來ましたら、他のお藥は用ゐないつもりでございますから。

スキル　この丸藥は病氣の時に癒すにもいいのですが、病を豫防するためにも利き目があり

ます。それどころか、適當にこの藥を用ゐさへすれば人は永遠に生きることも出來るといふことを私は斷言して憚りません。（ヨハネ傳六・五〇）。が、クリスティアナさん、この丸藥を用ゐるには私の處方以外のどのやうな方法を用ゐてもなりませんよ、さういふことをすると、すこしも利きませんから。そこで、彼はクリスティアナに、クリスティアナ自身のため、その子供たちのため、マーシーのための藥を與へた。それからマシウにはこれ以上熟れない梅の果を食べないやうに氣をつけるのだよ、と告げ、彼等に接吻して、立ち去つた。

ブルーデンスが子供たちに、何時でも尋きたいと思ふ時には、ためになるやうな質問をするやうに、さうすれば彼等に何か教になることを答へてあげると言つたといふことは既に諸賢に申し上げた。

マシウ　そこで、前に病氣であつたマシウがこの人に尋ねた、何故、大抵の藥は私どもの口蓋に苦いのでせう。

ブルーデンス　「神の言葉」とその功驗が現世の心にはどんなにおもしろくないものであるかといふことを示すためです。

マシウ　何故藥は功驗を示す時には下瀉をさせたり、吐氣を起させたりするのでせう。

ブルーデンス　「言葉」は、それが有効にはたらいた時には、情と思を淨めます。ね、ごらんなさい、一方が身體に行ふことを、一方は靈魂に行つてゐます。

マシウ　私どもの火の炎が上に昇るのを見て何を學ぶべきでせうか。また、太陽の光と靈妙な感應力が下へさすのを見て。

ブルーデンス　火の昇ることに依り私どもは熱烈な願に依つて天に立ち昇ることを教へられます。太陽がその熱と、光と靈妙な感應力を下へ送ることに依つて私どもは世の「救主」が、高い御身分でありながら、その恩寵と愛をもつて下にある私どものところへ降下せられたことを教へられます。

マシウ　雲は何處から水をとりますか。

ブルーデンス　海から。

マシウ　それに依つて私どもは何を學ぶことが出來ますか。

ブルーデンス　牧師たちはその教理を神からとるべきであるといふことを。

マシウ　何故雲は地上にその身をぶちまけてしまひますか。

ブルーデンス　牧師たちは神について知つてゐることを世間に傳へるべきであるといふこと

を示すためです。

マシウ　何故虹は太陽に依つて起りますか。

ブルーデンス　神の恩寵の契約はキリストに於いて確認せられてゐるといふことを示すためです。〔註。創世記九・一三―一七參照〕。

マシウ　何故泉の水は地中を通つて海から私どもへ屆くのですか。

ブルーデンス　神の恩寵はキリストの肉體を通つて私どもへ屆くといふことを示すためです。

マシウ　何故泉の水の或ものは高い丘の巓に湧き上るのですか。

ブルーデンス　恩寵の靈は貧しく、低い多くのものの中に湧き出でるのとおなじやうに偉いなる者、力ある者の或ものの中にも湧き出でることを示すためです。

マシウ　何故火は蠟燭の心に結びつきますか。

ブルーデンス　恩寵が心に火を點じなければ私どもの中には生命の眞の光がないといふことを示すためです。

マシウ　何故心と蠟と又すべてのものが蠟燭の光をもちつづけるために無くなつてしまふのですか。

ブルーデンス　肉體と靈魂と又すべてのものが私どもの中にあるあの神の恩寵に奉仕するため、またそれを立派にもちつづけるために盡し果されなければならぬといふことを示すためです。

マシウ　何故ペリカンはその嘴で自分の胸を破るのですか。〔註。ペリカン鳥には嘴の下に大きな袋があつて、その中に魚を入れ、それを雛に食べさせる時には嘴を胸におしつけてその袋から出すのである。そこで、ペリカンはその嘴を以て胸を破り、自分の血で雛を養ふのであるといふ誤信が一般に行はれた。イギリスではエリザベス朝の文學に屢々このことが言及せられてゐるのみならず「胸を傷つくるペリカン」は紋章の意匠にもなつて居り、一六七五年王立科學協會が纂修したナイル河の風物誌にもこの誤が傳へられてゐる〕。

ブルーデンス　その血でその雛を養ふため、またそれに依つてありがたいキリストがその血に依り死よりお救ひになるほど、その雛、その民を愛したまふことを示すためです。

マシウ　雞の鳴く聲を聽くことに依つて何を學ぶことが出來ますか。

ブルーデンス　ペテロの罪とペテロの悔改を記憶えてゐることをお學びなさい。〔註。マタイ傳二六・六九―七五參照〕雞の鳴くのはまたあの日が迫つてゐることを示します。ですから、雞

の鳴く聲はあなたにあの最終の恐しい審判の日を思ひ出させるやうになさい。

さて、この頃には彼等の滯在も一月を過ぎてゐた。それで、彼等は家の人たちに暇乞をして出發したいと思ふ、との意を傳へた。すると、ジョウゼフが母親に言つた、ミスタア、インタープリタアのお宅へお使を遣つて、私どもの道の殘りの案内者になつて下さるやうにミスタア、グレイト・ハートを送つていただきたいとお願になつた方がいいでせう。よく氣がつきました、と母親は言つた、私は殆んど忘れてゐました。そこで、この人は歎願書を認め、門守のミスタア、ウォッチフルに、それを誰か適當な人に依つて親切な友、ミスタア、インタープリタアに届けていただきたい、と賴んだ。それが、その手に屆いた時、彼は歎願書の内容を見た上で、使の者に言つた、かへつてグレイト・ハートを送る、と言つて下さい。

クリスティアナが宿つてゐた家の人たちは旅路を進めたいと思つてゐることを知つた時、家中の者を集め、このやうに有益な客をそのもとへ送られたことに對して彼等の「王」に感謝を捧げた。さうした上で、人人はクリスティアナに言つた、それからあなたが旅路をつづけてゐられる時の瞑想の種にするため、巡禮にお見せするのが私どもの習慣になつてゐるものをすこしお見せしようではありませんか。そこで、人人はクリスティアナと、その子供たちと、マ

ーシーを物置部屋につれて行つて、エバが食べて、夫に與へ、それを食べたことに依り、樂園を逐はれた林檎の一つを見せ、さて、これを何と思ふか、と尋ねた。すると、クリスティアナは言つた、食物か、毒のあるものです、どちらであるか分りません。で、人人は事の仔細をうちあけ、この人は、まあ、とばかり、手をあげて驚嘆した。（創世記三・六、ロマ書七・二四）。

それから人人はとある場處にともなつてヤコブの梯子を見せた。その時幾人かの天使がその上を昇るところであつた。それで、クリスティアナは天使の昇つて行くのを眺めてはまた眺めた、一行のほかの者も同樣であつた。その上で、人人は何か他のものを見せるために他の場處に行かうとしてゐた、が、ジェイムズはその母に言つた、どうかもう少しここに留まらせて下さるやうにお願ひして下さい、これは美しい光景ですから。そこで、彼等は再びふり返つた、さうしてこのいかにも愉快な展望に眼を養ひながら立ちつくした。（創世記　二八・一二、ヨハネ傳一・五一）。

この後、人人は彼等を黃金の錨のかかつてゐるところへつれて行き、さうして、クリスティアナにそれをとり下せと言つた。何故なら、と人人は言つた、それをお有ちになるやうにあなたにさしあげるのです、あらい天候にお逢ひになるやうなことがあつた場合に幔（註。聖所の幔）

の中にあるものを捉へて離さず、毅然と立つためには、それをお有ちになることがどうしても必要なのですから。で、彼等はそれを喜んだ。（ヘブル書六・一九）。そこで、人人は彼等をつれてわれらの祖先アブラハムがその子イサクを神に捧げた山に行き、祭壇と、薪と、火と、庖刀を見せた、それらのものは今日のこの日に至るまで残つてゐるのであるから。（創世記二二・九）。それを見た時、彼等は手をあげて驚き、自らを祝福して言つた、まあ、アブラハムといふ人は何といふ主人に對する愛の深い、又、自制心の強い人でせう。これらすべてのものを見せた後、ブルーデンスは彼等をつれて食堂に入つて行つたが、そこには一臺の見事なヴァージナル（註。十六、七世紀に行はれた鍵盤樂器。今日のピアノの前身である。クウィーン、エリザベスはヴァージナルの妙手であつた。）が置いてあつた。そこで、この人はこれを彈奏し、また彼等に見せたものを次のやうな見事な歌にして、言ふには——

エバの林檎を示したり、
心をゆるしたまふなよ。
ヤコブの梯子、その上の
天使もまた見たまひき。

錨受けさせたまひしも、
これにて足ると思ほすな、
アブラムのごと、犠牲に
いとよきものを出すまで。

ちやうどこの頃にほとほとと戸を叩く者があつた。そこで、門守が戸を開けると、どうだう、ミスタア、グレイト・ハートがそこにゐた。しかし、彼が入つて來た時の喜悦は又何とも名狀することの出來ないものであつた。何故なら、しばらく前に彼が巨人老怪グリム・ブラディ・マンを斬殺して獅子から彼等を救つたことが今やまざまざと彼等の心に思ひ出されたからである。

すると、グレイト・ハートはクリスティアナに、またマーシーに言つた、「主人」はあなたがたひとりひとりに一壜の葡萄酒と、また乾した穀物を少しと柘榴を二つ三つ、子供たちには無花果と乾葡萄をすこし、道中元氣をつけるためにおことづけになりました。

そこで、彼等はその旅路に向ひ、ブルーデンスとパイエティはつれだつて行つた。彼等が門へ來た時、クリスティアナは門守に、近ごろここを通つて行つた者があつたかと尋ねた。彼は

言つた、いえ、ありません。唯、大分前にひとりありましたが、その男はまた、最近、あなた方のおいでになる「王」の大通りに大盗難があつたと言つてゐました、が、盗人は捕へられ、やがて死罪の裁判を受けることになつてゐると言つてゐました。すると、クリスティアナとマーシーは恐怖を抱いた、が、マシウは言つた、お母さん、ミスタア、グレイト・ハートが一緒に行つて、私どもの案内者になつて下さる間は恐れることはありませんよ。

そこで、クリスティアナは門守に言つた、こちらへまゐりましてから私に盡していただいたいろいろの御親切や、子供たちをあんなに可愛がつて、親切にして下さいましたことをありがたく存じます。御親切にはどう御禮を申し上げたならばよいか分りません。それで、どうか私の志のしるしとしてこの僅なものをお納め下さい。と、そこで、この人は彼の手に黄金のエインジェル〔註。昔の金貨。現行貨幣の四シリング程に當る。表面の意匠に天使がついてゐたのでエインジェルの名がある。〕をとらせた、すると、彼は低く御辭儀をして言つた、なんぢの衣をつねに白からしめよ、なんぢの頭に膏を絶えしむるなかれ〔註。傳道之書九・八。〕、マーシーをながらへしめよ、死なしむるなかれ、その業を少なからざらしめよ。〔註。申命記三三・六。モーセの臨終にルベンを祝福した言葉を用ゐたものである。邦譯は少し違つてゐる。欽定譯聖書參照〕。また子供たちに言つ

た、なんぢら、若き日の慾を遁れ、眞摯にして聰明なる者と共に聖德を求めよ〔註。テモテ後書二・二二の改作〕、かくて、なんぢらの母の心を喜ばしめ、謹嚴なるすべての人に賞めらるべし、と。そこで、彼等は門守に感謝して出發した。

さて、私は夢の中で見たのであるが、彼等が更に進んで丘の嶺まで來ると、パイエティはふと思ひついて叫んだ。どうしませう！　クリスティアナと道連の方にさしあげたいと思つてゐたものを忘れてゐました。と、そこで、それをとりに走つて行つた。そのゐない間にクリスティアナは右手の方のすこし離れた杜の中で、まことに美しく、妙なる調を聞くやうに思つた。その詞は次のやうなものであつた、

わが一生をつらぬきて
神の恩はけざやけし。
さればぞ永遠に「大宮」を
われの住處と定めなむ。

〔註。この一聯は詩篇二三・六から、次の一聯は詩篇一〇〇・五から、いづれもトマス・スターンホールドの韻文譯を用ゐたものである〕。

それから、なほも耳を傾けてゐると、今一つのものがそれに答へるのを聞くやうに思つた。

そは、永遠にかはらざる
　神の「慈愛」を知ればなり。
神の「眞」はゆるぎなし、
　幾千代かけて恒ならむ。

と言ひながら。

そこで、クリスティアナはブルーデンスにあの美しい調を奏でてゐるのは何であるかと尋ねた。あれは、と彼女は言つた、私どもの田舍の鳥です。あの鳥は花が現れ、太陽が暖く照り輝く春でないと滅多に歌ひませんが、その頃になると日もすがら歌ふのを聞くことが出來ます。（雅歌二・一一、一二）。私はよく、と彼女は言つた、あの鳥を聞きに外へ出ます、私どもはまた、屢〻私どもの家で飼ひ馴らします。氣が沈む時にはまことによい對手です、それにまた、林や杜や寂しい場處を好ましい住處としてくれます。

この時にはパイエティも歸つてゐた、それで彼女はクリスティアナに言つた、これをごらんなさい、宅でごらんになつたあのすべてのものの明細書をもつてまゐりました、忘れつぽくな

つたと思はれた時にはこれをごらんになり、再びあの品品を思ひ出されて、涵養と慰藉にすることが出來ませう。

さて、彼等はそろそろ丘を降りて「謙遜の谷」に入つて行つた。丘は嶮しく、道は滑りやすいのであつたが、よく心を配つたので、先づはことなく下へ降りた。谷に辿りついた時、パイエティはクリスティアナに言つた、これは御主人のクリスチアンが兇惡な惡魔アポルオンに出會はされた場處で、また彼等があの恐ろしい闘を闘つたところです。その話は必ず聞かれたことと思ひます。でも、元氣よくいらして下さい、このグレイト・ハートさんがあなた方の嚮導と案内者になつて下さる限り、あなた方はさういふ目にお遭ひにならないと思つてゐますから。そこで、この二人が巡禮たちを彼等の嚮導に委ねた時、彼は先に立つて進み、彼等はその後に從つた。

グレイト・ハート　すると、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、この「谷」を大して恐れる必要はありませんよ。自ら招かなければここには私どもを害ふものが何もないのですから。なるほど、クリスチアンはここでアポルオンに出會はして、慘澹たる格闘を演じましたがね。大體、あの合戰は彼が丘を降りて行く時に足を滑らしたことの結果なのです。あすこで足を滑

らしたものはここで格闘する覺悟をしなければなりません。それで、この谷はこんな嶮悪な名を得たのです。何故なら、世人は何か恐ろしいことが斯様斯様の場處に起つたといふことを聞くと、その場處が或兇悪な悪魔だとか、悪靈だとかの出て來るところであるといふ説を抱きます。ところが、情ないことには、さういふことがそこで起るといふのは、その人人の行つたことの結果に依るのです。

「謙遜の谷」それ自身は鴉がその上を飛ぶ如何なる谷にも劣らない豊饒な場處なのです。若しうまく見つかつたならば、どこか、このあたりに何故クリスチアンがあのやうにひどく惱まされたかといふことを説明してくれるものを見出すことが出來ると思ひます。

すると、ジェイムズがその母に言つた、あれ、あすこに柱が立つてゐます、それに、何だかその上に書いてあるやうに思はれます。何であるか、行つて見やうではありませんか。そこで、彼等は行つてそこに書いてあるのを見た、ここに來る前のクリスチアンの蹉跌と、彼がこの場處にて遭へる戰を後に來る者の警戒とならしめよ、と。

ごらんなさい、と彼等の嚮導は言つた、言はないことですか、どこかこのあたりに何故クリスチアンがあのやうにひどく惱まされたかといふことを知らせてくれるものがある、と。それ

から、クリスティアナの方へふりむいて言つた、私はクリスチアンや、そのめぐりあはせがあの人のそれと同じものであつた人人を悪く言ふのではありませんよ。この丘は降るよりも登る方が易しいのですから。世界でもこの地方一帯の丘の中でさういふことが言へるものはあまりありません。しかし、あの方のことはこれだけにしておきませう、安息の境涯に入られてゐるのであり、それに亦その敵に克つて勇敢な勝利を得られたのです。上に住まはせたまふ者のお許しを得て、私どもが試みに逢ふ時に臨んであの方よりも不首尾な事を仕出來さないやうにしたいものです。

が、この「謙遜の谷」のことに立ちかへつて申し上げませう。これはこの地方一帯で最も善い、また最も豊饒な土地なのです。肥沃な土地で、ごらんの通り、牧草の原になつてゐるところが多いのです。で、若し人が今私どもが來てゐるやうに、夏の頃ここへ來るならば、前以てこの土地のことを何も知らず、またその目に見るものを喜ぶ人であるなら、その人を喜ばすやうなものを見ることが出來ます。ごらんなさい、この谷の青青とした綠の色を、また百合の花で飾られたところを。(雅歌二・一)。私はまた、この「謙遜の谷」に善い地所をもつてゐる多くの勞働者を知つてゐます。(何故なら、神は高ぶる者を拒みたまふ。されど謙る者にはいよい

よ恩寵を與へたまふ。)(ヤコブ書四・六、ペテロ前書五・五)。それといふのは實際豐饒な土地なので、手掴みにとれるほど物がよく實ります。或者はまた、彼等の「父」の家に行く最も近い道がこであればよい、さうなれば、これ以上丘や山を越えて行く苦勞がなくて濟むのだ、と思つてゐます。しかし、道は道ですよ、どうにもなりませんな。

さて、彼等が行く行く話をしてゐる時に、その「父」の羊を飼つてゐる一人の少年を見つけた。極めて見窄らしい着ものを着てゐたが、いかにも冴冴とした、縹緻の好い顏の少年で、ただひとり坐つてゐる時に歌をうたつた。お聽きなさい、とミスタア、グレイト・ハートは言つた、あの羊飼の少年の言ふことを。そこで彼等は耳を傾けた、すると、彼は言つた。

低きもの落つるうれひを、
賤しきは驕慢を、知らず。
謙遜る者はつねづね
神をその嚮導とす。
少くとも、多くとも、
わがもてるものにて足れり。

(ビリビ書四・一二、一三)。

(ヘブル書一三・五)。

さらに、主よ、足るをぞねがふ、
かくするを救ひたまへば。

巡禮の旅行く者に
充ち足るは、げに、重荷なり。
この世にて少く、後に、
幸あるぞよろづ代によき。

すると、彼等の嚮導は言つた、あれが聞えますか。あの少年は絹と天鵞絨に纏まれてゐる者よりも樂しい日日を過し、あの「安心」といふ藥草をより多くその胸に收めてゐると思ひます。しかし、私どもの談話を進めませう。

この谷に、以前、私どもの「主人」は別莊をもつてゐられ、ここにゐられることが大さうお好きでした。また、この牧草の原を散歩せられるのがお好きでした、空氣が爽やかであるといふので。それに、ここでは物音やこの世の忙しさから釋き放たれてゐることが出來ます。どの國も皆、物音と混亂に滿ちてゐます、「謙遜の谷」だけが、あの深閑とした孤獨の場處なのです。他のところではありがちの、瞑想を妨げられたり邪魔せられたりするといふやうなことが

ここではありません。これは巡禮の一生を愛する者でなければ誰もその中を歩かない谷なのです。それに、クリスチアンはアポルオンに出會はして激しい交戰に入るといふやうな不幸に遭はれましたけれども、むかしは人人がここでよく天使たちに逢つたものだ、（ホセア書一二・四五）ここで「眞珠」を見つけたものだ、〔註。マタイ傳一三・四六〕またこのところで「生命」の言葉を見つけたものだ、といふことを申上げておかなければなりません。

私どもの「主人」がここにむかし別莊をもつてゐられて、ここを散歩するのがお好きであつたといふことは申しましたか。なほ附け加へたいと思ひますのは、このところで、またこの土地に住み、この中を通つて行く者には、道中の生活を支へるため、また、彼等の旅路を進めて行くためのその上の奬勵として、或時期に忠實に支拂をするための年收を殘しておかれたといふことです。

サミュエル　さて、彼等が進んで行くうちに、サミュエルはミスタア、グレイト・ハートに言つた、小父さん、お父さんとアポルオンがこの谷で戰をしたことは分ります。が、その闘はどのあたりでしたでせう、この谷は大きいやうですが。

グレイト・ハート　あなたのお父さんは私どもの前にある、あの、あすこのところ、「忘却の

原」のすぐむかふの窄い通路でアポルオンと戰はれました。それに實際あの場處はここら一帶の中でも最も危險なところなのです、といふのは、いつでも巡禮が襲擊せられるのは、その受けた惠澤と彼等がいかにその惠澤に値しないものであるかといふことを忘れた時なのです。あれはまた他の者もひどく惱まされたところです。が、あの場處については私どもがそこへ行つた時にもつと詳しく申上げませう、今日に至るまで、あすこには何かあの戰のしるしになるもの、或はあすこでああいふ戰があつたといふことを明らかに示す記念碑のやうなものが必ず殘つてゐると思ひますから。

マーシー　すると、マーシーは言つた、私は私どもの旅路を通じて他の何處にゐた時にも劣らず、この谷にゐることを結構なことと思ひます。この場處は私の氣もちに合ふやうに思はれます。私は馬車のがたがたと鳴る音や車輪の響く音の聞えないところが好きなのです。ここでは人が大して邪魔をせられないで、自分はどういふ者であらうか、何處から來た者であらうか、何を仕上げたか、またどういふことのために「王」がお召しになつたかといふやうなことを考へてゐることが出來るやうに思はれます。ここで、人は考へ、心を碎き、その人の眼が「ヘシボンの魚池」のやうになるまで、その精神を溶かすことが出來ます。（雅歌七・四。欽定譯聖書參

照)。このバーカの谷を正しく行く人人はこれを泉と致します、神が天よりここにあるものの上に送りたまふ雨が又その池を滿たします。(詩篇八四・五、六、七)。〔註。「バーカの谷」は欽定譯聖書に發見せられるけれども、邦譯聖書には「涙の谷」となつてゐる。「バーカ」は「泣哭」を意味するヘブル語である〕。この谷はまたそこから「王」が葡萄園を彼等に與へたまふもので、そこを通つて行くものは歌をうたふのです、(ホセア書二・一五。欽定譯聖書參照)。クリスチアンがアポルオンに出會はしたにも拘らず、歌ひましたやうに。

グレイト・ハート　その通りです、と彼等の嚮導は言つた、私は幾度もこの谷を通りました、さうしてここにゐる時ぐらゐ氣もちのよいことはありませんでした。

私はまた多くの巡禮の案内人になりました、さうして彼等は皆同じことを告白してゐます、「王」は言つてゐられます、『我はただ苦しみ、また心をいため、わがことばを畏れをののく者を顧るなり』と。(イザヤ書六六・二)。

今や彼等は上に述べた戰のあつたところへさしかかつた。すると、嚮導はクリスティアナと、その子供たちと、マーシーに言つた、これがその場處です、この地面にクリスチアンが立ちました、あすこへアポルオンが彼に向つてやつて來ました。それから、ごらんなさい、言はないことですか、ここにこの日までこれらの石の上に御主人の血の或ものが殘つてゐます。又、ごらんなさい、今なほアポルオンの折れた投槍の破片の或ものが見られます。又、ごらんなさい、双方ここを先途と戰つた時、足で以て地面を踏みつけたことを、又、その側杖で以て石といふ石をことごとく粉微塵にうち碎いたことを。いや、まことに、クリスチアンはここで男を發揮せられましたよ、若しそこにゐたなら、あのハーキュリーズが示すことが出來たほどに強い者であることを示されました。アポルオンが敗けた時、「死の影の谷」と稱へられてゐる、この次の谷へ退却しました、そこへ私どもは程なくまゐります。

それ、あすこにまた、この戰のこと、また萬代不易の名譽を傳へてクリスチアンの勝利のことを刻みつけた記念碑が立つてゐます。そこで、ほんの行手の道のほとりに立つてゐたのであるから、彼等はそこへ歩み寄つてその銘を讀んだ、それを、言葉通りに言ふと、斯うであつた、

いと奇しくも眞なる
戰ありき、ここもとに。
クリスチアンとアポルオン、
ここに雌雄を爭ひき。

人は男を發揮して
鬼を退散せしめけり。
その記念にぞわれは立つ、
このことどもを證して。

この場處を通り過ぎた時、彼等は「死の影」の境にさしかかつたが、この谷はこれまでの谷よりも長く、多くの人人の證明することが出來るやうに惡性のものの出沒する、極めて薄氣味のわるい處であつた。けれども、この女たちと子供たちは晝のあかりをもつてゐたことでもあり、それにグレイト・ハートが案内者であつたから、その中を事なく通つて行つた。

この谷に入りかかつた時、彼等は死人のそれのやうな呻き、何だかとても大きな呻きが聞えたやうに思つた。彼等はまた極度の呵責になやんでゐる者の言葉のやうな悲嘆の言葉が語られてゐるのを聞いたやうに思つた。かういふことは少年たちを恐ぢすくませ、女たちにも青白い顏をさせた。が、彼等の案内者は安心してゐるがよい、と言つた。

そこで、もう少し先へ進んで行つた、すると、彼等は足の下で、洞になつたところがあるかのやうに、地面が震へ始めるのを感じた。また蛇のそれのやうな叱聲のやうなものを聞いた。

が、まだ、何も現れなかつた。すると少年たちは言つた、私たちはまだこの陰氣な場處の果に來てゐないのですか。けれども嚮導は、しつかり元氣を出して、足もとをよく見よと、命じた。係蹄にでもかかるといけないから、と彼は言つた。

この時ジェイムズは身體の工合がわるいと言ひ出した。が、その原因は恐怖であつたと思ふ。そこで、その母はインターブリタアの家で貰つた酒壜からの酒を少量と、ミスタア、スキルが調劑した丸藥を三粒、彼に飲ませた、すると少年は元氣を回復し始めた。かうして彼等は道に進み、谷の眞中位のところまで來た。その時、クリスティアナは言つた、むかふの私たちの行手の路に何だか見えるやうに思ひます。見たこともないやうな形をしたものです。すると、ジョウゼフが言つた、お母さん、何ですか、それは。醜いものだよ、坊や、醜いものだよ、と彼女は言つた。でも、お母さん、どんなものですか、と彼は言つた。何だかえたいの知れないものよ、と彼女は言つた。さうして、今はほんの少しばかり離れたところにゐる、と。それから彼女は言つた。すぐ側にゐる。

よし、よし、とミスタア、グレイト・ハートは言つた、一番恐い者は私にくつついてゐて下さい。そこで惡魔は迫り寄り、案内者はこれを邀へた。が、それは彼のところへ來たかと思ふ

とその瞬間に消散して誰の目にも見えなくなつた。その時、彼等はいつか以前に人の言ふのを聞いたことを思ひ出した、『悪魔にたち向へ、さらば彼なんぢらを逃げ去らん』と。〔註。ヤコブ書四・七〕。

かうして、少少活氣を與へられたので、彼等は先を急いだ。が、あまり遠くへ行かないうちに、マーシーは後方を眺め、何かしら、まるで獅子のやうな形をしたものを見たやうに思つた。それは大きな、ずしんずしんと響く足どりで、悠然と逐ひかけて來た。また、空洞音のやうな咆哮の聲をもつてゐて、その咆える毎に谷中を反響せしめ、嚮導であつた者の心を除く、彼等の心を痛ましめた。かうしてそれは迫り寄り、ミスタア、グレイト・ハートは後へ廻つて一同を彼の前に行かせた。獅子も亦、歩調を速めてやつて來た。そこで、ミスタア、グレイト・ハートは一泡吹かせてくれようと身構へをした。(ペテロ前書五・八、九)。しかし、愈ゝ抗戰が決心せられたと見てとつた時、彼は引き退き、それ以上はやつて來なかつた。

そこで、彼等は再び先を急ぎ、案内者は先登に立つて進んだ、が、やがて、道幅一杯に、一つの坑が掘り返されてあるところにさしかかり、それを乘り越えて行く準備が出來ないうちに、濛濛たる煙と暗闇が彼等の上に落ちかかつて物が見えなくなつてしまつた。そこで、巡禮たち

は言つた。ああ、今、私どもはどうすればいいだらう？　けれども、彼等の嚮導は答へた、心配することはありません、ぢつと立つてゐて、これにも亦どういふ結末がつくか見ていらつしやい。で、道が塞がれてゐたから、彼等はとどまつた。その時、また、敵の物音やどつとうち寄せる音がいよいよ明らかに聞えるやうに思はれ、その上、坑の火と煙はよほどたやすく見分けられた。すると、クリスティアナはマーシーに言つた、やつと今、私は可哀さうに、主人の受けたくるしみがどんなものであつたかといふことが分ります、この場處のことはずゐぶん聞いてゐたのですが、今までにここへ來たことはありませんでした。可哀さうに、あの人は、夜、たつたひとりで此處を歩いたのでした。殆んどこの道を通じて夜だつたのです。それにあの悪鬼どもがずたずたに引裂かうとするかのやうに、そのぐるりに立ち廻つてゐました。話をした人は幾人もありますが、自らその中へ行つた者でなければ「死の影の谷」がどういふものであるかといふことを傳へることは出來ません。『心の苦しみは心みづから知る。そのよろこびには他人あづからず。』〔註。箴言一四・一〇〕。ここにゐるといふことは恐しいことです。

グレイト・ハート　こりやまるで大波の中に立ち働き、深淵の中へ沈んで行くやうだ。まるで海の唯中にゐるやうだ、また、山のどん底へ降りて行くやうだ。かうなると、大地が大手を

ひろげてわれわれのぐるりに永遠の閉め出しを食はせたやうに思はれます。『されど暗闇に歩み、光を有たざる者をして主の名を頼ましめ、かれらの神により縋らしめよ。』〔註。イザヤ書五〇・一〇。欽定譯聖書參照〕。私は、既に申し上げましたやうに屢々この谷を通つて今なやまされてゐるよりも遙かに酷い目に逢つたのですが、それでもごらんの通り生きてゐます。大口をきくのではありませんよ、私の力で自分を救つたのではないのですから、唯、私は私どもが立派な救をもつだらうといふことを信じてゐるのです。さあ、私どもの闇をあかるくすることの出來る、また、これらのものばかりでなく、地獄のサタンども一切を叱りつけ下さることの出來る者へ祈らうではありませんか。

そこで、彼等は聲をあげて祈つた、すると、神は光と救を送り給うた、といふのは、今や彼等の道には障碍がなかつた、つい今さき、坑で以て足をさしとめられたその場處になかつたのである。でも、彼等はまだ谷を通り越してゐたのではなかつた、で、なほも進んで、大さうひどい臭や嫌な臭みを眺め、誰も皆、大さう氣もちを悪くした。すると、マーシーはクリスティアナに言つた、ここにゐるのは「門」やインタープリタアのお宅や、私どもが最後に宿をしていただいたお家にゐるやうに愉快なことではありませんね。

ああ、それでも、と、少年たちの一人が言つた、ここを通つて行くことはいつもここに住んでゐることのやうには悪くはありませんよ、それに私の知つてゐる限りでは、私どもの爲に用意せられてゐる家に行くためにこの道を行かなければならぬ一つの理由はそれに依つて私どものお家がいよいよ樂しいものとなるやうに、といふことでせう。

感心だね、サミュエル、と嚮導は言つた、あなたは今成人のやうなことを言ひましたよ。でも、さうぢやありませんか、と少年は言つた、ここを出て行くやうなことがあつたら、私は今までの一生にかつて大切にしたよりもまして、光とよい道を大切にすると思ひますよ。すると、嚮導は言つた、その中に出て行きます。

そこで、彼等は先を急いだ、ジョウゼフが言つた、まだこの谷の果を見ることは出來ないのですか。すると、嚮導は言つた、足もとに氣をつけなさい、やがて係蹄の間にやつて來ますから。そこで、彼等は足もとに氣をつけて進んで行つた、が、係蹄で以て大分なやまされた。さて、彼等が係蹄の間へやつて來た時、彼等は一人の男がその肉をすつかり裂かれ、引きちぎられて、左手の溝の中に投り込まれてゐるのを見た。すると、嚮導は言つた、『あれはヒードレス〔無思慮氏〕といふ男で、この道を歩いてゐた者ですが、ずゐぶん長い間あすこに横たはつ

てゐます。あの男が捕へられて斬り殺された時にはテイク・ヒード〔熟慮氏〕といふ男が一緒にゐたのですが、この方はあいつらの手を遁れました。このあたりでどれほど多くの者が殺されたかといふことはとても想像することが出來ません、それだのに、人人は愚かにも向ふ行きが強くて、輕輕しく巡禮に旅立ち、嚮導もなしにやつて來るやうなことをするのです。氣の毒だつたのはクリスチアンです、あの人がここで免れたのは不思議です。が、あの人はその神に愛されてゐられたし、又、御自身の盛な勇氣をもつてゐられた、さもなければ、とてもああいふことを仕竟うせることは出來なかつたのです。さて、彼等がこの道の果のクリスチアンが通り過ぎた時に岩窟を見た、ちやうどそのあたりに近づいて行つた時、そこから巨人モールが出て來た。〔註。「モール」は前に現れた「グリム」、後に現れる「スレイ・グッド」と共にこの巡禮たちが出會はす三人の巨人の一人である。「モール」といふ名はラテン語の "Malleus" 「槌」といふ意味をもつてゐる言葉から出たものであるが、それがこの巨人にどういふ關係をもつてゐるのか分らない。〕このモールは詭辯で以て若い巡禮たちを害ふことを慣としてゐた、それで、グレイト・ハートの名指しをして呼びかけ、彼に對つて言つた、幾度汝はかういふことをしてはならぬと言はれたか。どういふことを？　と、その時ミスタア、グレイト・ハートは言つた。どういふことをだと？　と巨人は

言つた。汝はどういふことかといふことを知つてゐる、が、已は汝の職業に止めを刺してやるのだ。しかし、とミスタア、グレイト・ハートは言つた、闘を始める前に、先づ、何故闘はなければならぬかといふことを合點して置かうではないか。今や女たちと子供たちは震へながら立ち、どうすればいいか分らなかつた。巨人の曰く、汝はこの國の物を盗む。盗みの中でも最悪なものを以て盗む。そんなことは一般論に過ぎない、とミスタア、グレイト・ハートは言つた、特殊事項を言へよ、おい。

すると、巨人は言つた、汝は誘拐の業を行ふ、汝は女子供を寄せあつめて他國へ連れて行き、それがわが主人の王國を弱くすることになる。が、この時、グレイト・ハートは答へた、われは天の神の僕だ、わが業務は悔改にまで罪人を説得することだ。われは男と女と子供を、闇から光へ、サタンの力から神へ轉向させるやうに努力することを命ぜられてゐる、で、若しこれが本當に汝の喧嘩の理由であるなら、汝の望む時に早速闘を始めようではないか。

そこで巨人は迫り、ミスタア、グレイト・ハートは進んでこれを邀へた。また、進みながら劍を拔いた。が、巨人は棍棒をもつてゐた。そこで、これ以上とかくすることもなく闘にとりかかり、最初の一撃で巨人はミスタア、グレイト・ハートに片膝をつかせた。それと共に女た

ちと子供たちはわつと聲をあげた。そこで、ミスタア、グレイト・ハートは身を持ち直し、奮迅の勢で攻め立て、巨人の腕に傷手を負はせた。かうして熱闘一時間、沸きたぎつ大釜の中から出て來る熱氣のやうに、息は巨人の鼻の孔から出て來た。

そこで、彼等は休息するために坐つた、が、ミスタア、グレイト・ハートは祈に身を委ねた。女たちや子供たちも亦、戰闘が、繼續してゐる間を通じて嘆いたり、泣き叫んだりする外には何もしなかつた。

彼等が身を休め、息をついだ時、彼等は再び闘にとりかかり、ミスタア、グレイト・ハートは一撃巨人を地にうち倒した。いや、待て、姿勢をとり直させてくれ、と彼は言つた。そこで、ミスタア、グレイト・ハートは公明正大に起ち上らせてやつた。そこで、再び闘を始め、巨人はその棍棒でミスタア、グレイト・ハートの頭蓋骨を危くうち碎くところであつた。

ミスタア、グレイト・ハートはこれを見て、元氣一杯の力をこめて走り寄り、彼の第五番目の肋骨の下をぐさと突き刺した。そこで、巨人は力を失ひ始め、これ以上棍棒を持ち上げることが出來なくなつた。すると、ミスタア、グレイト・ハートは更に打撃を加へて巨人の首を肩から斬り落した。そこで、女たちと子供たちは喜んだ、ミスタア、グレイト・ハードも亦、神

の成したまひし救に對して神を讃へた。

このことが終つた時、彼等は力を協せて一本の柱を建て、その上に巨人の首を縛りつけた、またその下へ旅人たちの讀むことが出來るやうに、文字で書き記した。

この首を身につけし者こそ
巡禮を迫めさいなめしなれ。
その道をとどめ、誰をも假借せず、
すべての者を虐げたり。
終に、われ、グレイト・ハート、起ち上り、
巡禮の道のしるべとなれり。
終に、われ、かれらの敵なりし
この者に立ちむかひたり。

さて、私は彼等が少し離れたところに巡禮のための見晴臺として築かれた上り坂へ出かけて行くのを見た、（それはクリスチアンが彼の同人フェイスフルをそこからはじめて見た場處であつた。）それで、ここに彼等は腰を下して休んだ、彼等はまた、あのやうに危險な敵からの

救を得たといふので、ここで飲んだり、食べたり、また樂しく遊んだりした。かうして、坐り、また食べてゐる時に、クリスティアナは嚮導に戰爭で傷手を負ひはしなかつたか、と尋ねた。すると、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、いや、肉體に少し負うただけです。しかし、それも私を辟易ませるやうなことになるどころか、今では私の「主人」とあなた方に對する私の愛の證で、結局は神の恩惠に依つて私の受ける報酬を大きくする手段となるのです。

クリスティアナ　でも、あなた、棍棒をもつて出て來るのを御覽になつた時には恐ろしく思はれませんでしたか。

グレイト・ハート　自分の才能に疑念を抱くのは、と彼は言つた、すべてのものよりも強く在します者に依り賴むことが出來るための、私の義務です。

クリスティアナ　しかし、彼があの最初の一擊であなたを地にうち倒した時にはどう思はれましたか？

グレイト・ハート　それはね、かう思ひましたよ、と彼は言つた、主御自身もかういふ目に逢はれた、しかも最後に克ちおふせられたのは主である、と。

マシウ　皆それぞれ好きなことを考へた上で、私の思ふところでは、神が私どもに對して驚

くべく御親切であつたといふことです、この谷から連れ出して下さつたことにしても、また、この敵の手から救つて下さつたことにしても。私としてはこれ以上、私どもの神を疑ふべき理由を見ません、今、かういふところで、このやうなその愛の證據を示されたのですから。

そこで彼等は起ち上つて、また先へ進んだ、ところが行手の方、少しばかりのところに一もとの槲の木が立つてゐて、その下に、彼方がそこへさしかかつた時、ぐつすりと寢込んだ一人の老巡禮を發見した。彼等はその着物と、またその杖とその帶とで彼が巡禮であることを知つた。

そこで、嚮導、ミスタア、グレイト・ハートはこの男の目を覺ました、すると、老紳士はその目をあげた時に聲をあげて叫んだ。どうしたといふのだ？　汝らは一體誰だ？　ここで何をしてゐるのだ？

グレイト・ハート　まあ、さう憤り給ふな、ここにはあなたに好意をもつてゐる者以外に誰もゐないのだ。でも、老人は起き上つて、すこしも心を許さず、斷然、彼等の素性を知らうとした。すると、嚮導は言つた、私の名はグレイト・ハートです、私は天國へ行かうとしてゐられるこれらの巡禮たちの嚮導です。

オネスト　すると、ミスタア、オネスト〔正直氏〕は言つた、失禮致しました。私はあなた方が先ほどリトル・フェイス〔小信氏〕の金を奪つた仲間の者ではないかと思つたのです。でも、今、よく氣をつけて見ますと、なるほどもつと正直な方方であることが分ります。

グレイト・ハート　では、若し、われわれがその仲間だつたら、あなたの身を衞るためにどうする、或はどんなことが出來ると思つてゐられましたか。

オネスト　どうする、と仰有るか。そりや、息のつづくかぎり戰ふつもりでした。で、さうする段になれば、私をうち負かすことは決して出來ないと信じてゐます。クリスチアンたるものは、自ら降伏しない限り、決して克服することの出來ないものですから。

グレイト・ハート　天晴、オネスト老人、〔註。これはベニヤンの手拔り。グレイト・ハートはこれから後にこの老人の名を聞くのである。〕と嚮導は言つた、これに依つてあなたが正眞正銘の雄雞〔註。鬪雞からの譬喩〕であることが分ります、「あなたは本當のことを言はれたのですから。

オネスト　また、これに依つて私もお前さんが眞の巡禮とはどんなものであるかといふことを知つてゐられることが分ります。他の連中はわれわれが誰よりも最も早く克服せられる者であると思つてゐるのですから。

グレイト・ハート　さて、今、このやうに都合よくお逢ひすることが出來たのですから、どうかお名前と、また、出て來られた處の名を伺はせて下さい。

オネスト　名前を言ふことは出來ません、が、私は「愚鈍の町」からまゐりました、それは「滅亡の市」の彼方四度のところにあります。

グレイト・ハート　おや、それではあの國の方ですか。あなたを略おし當てたと思ひます、お名前はオネスティ老人、ではありませんか。そこで、老紳士は赤面した、抽象的な意味でのオネスティ〔廉直〕ではありません、が、オネスト〔正直〕は私の名前です、私は私の性分が私の稱へられてゐるものに一致することを願つてゐます。

オネスト　だが、あなた、と、老紳士は言つた、どうして、さういふ處から來たのだからさういふ人間であるといふことをおし當てることが出來ました？

グレイト・ハート　以前主人からあなたのことを伺つてゐました、あの方は地上に行はれる一切のことを御存知なのです。が、私は屢々あなたのお國から誰にせよ出て來るのは不思議だと思つてゐました。あなたの町は「滅亡の市」にさへ劣るのですから。

オネスト　さうです、私どもは太陽から更に離れたところにゐるのです、それで、更に冷た

く、また無感覚なのです。が、よしんば人は氷の山にゐたとしても、「義」の太陽がその上に立ち昇つたならば、その凍つた心は氷解を感じるでせう。私にしてもさういふ風でした。

グレイト・ハート　さうでせうとも、オネスト老人、さうでせうとも、それに相違ないといふことは私にも分つてゐます。

それから、老紳士は愛の聖き接吻を以て巡禮たち一同に挨拶した、〔註。「愛の聖き接吻」はこの頃の清教徒の一部に行はれた習慣であつた。初代教會の例に倣つたものと思はれるが、バニヤンは寧ろこの習慣に反對であつた。『神恩無量』第三百十五章參照〕。また彼等に彼等の名を、彼等が巡禮の旅に出てからこのかたどういふ風に暮して來たか、といふことを尋ねた。

クリスティアナ　すると、クリスティアナは言つた。私の名前は御聞及びになつたことがあると思ひます、善良なクリスチアンは私の夫でした、また、これはその四人の子供でございます。しかし、彼女がその名をうちあけた時、その老紳士はどんなに喜んだかといふことを諸賢は思ひうかべることが出來ますか！　彼は雀躍した、彼は微笑んだ、無數の好意を傾けて祝福した、さうして言ふには、

オネスト　御主人のこと、その旅のこと、その一生に經驗せられた戰のことはずゐぶん聞い

てゐますよ。お慰めになるやうに申し上げますが、御主人の名は世界のこのあたり一帶に鳴りわたつてゐます。その信仰、その勇氣、その忍耐、このすべてに於ける彼の誠實はその名を有名なものとしたのです。そこで、彼は少年たちの方を向いて彼等の名を尋ね、彼等はそれを告げた。すると、彼は彼等に言つた、マシウ、お前さんは取税人マシウ〔註。マタイ〕のやうになるのだね、惡德に於いてではなく、德に於いて。（マタイ傳一〇・三）。サミュエル、と彼は言つた、お前さんは信仰と祈りの人、預言者サミュエル〔註。サムエル〕のやうになるのだね。（詩篇九九・六）。ジョウゼフ、と彼は言つた、お前さんは潔白で、誘惑から遁れる者、ポテパルの家に於けるジョウゼフ〔註。ヨセフ〕のやうになるのだね。（創世記三九）。それからジェイムズ、お前さんは正義の人ジェイムス〔註。ヤコブ。イヨセフス、ヘギシップス等の歴史にはイエスの兄弟ヤコブを「正義の人ヤコブ」と稱へてゐる〕われわれの主の御兄弟のやうになるのだね。（使徒行傳一・一三）。

すると、彼等は彼にマーシーのこと、彼女がクリスティアナとまたその少年たちと共に出て來るためにその町とその身内の者を後にしたことの次第を告げた。それに對して老正直人は言つた、マーシーがお前さんの名前ですか。「あはれみ」に依つてお前さんは力づけられ、道すがら襲ひかかる困難を切り拔け、終には「あはれみ」の源に、樂しんで面を合はせることにな

りませう。

この間を通じてミスタア、グレイト・ハートは極めて上機嫌であり、にこにことその道連を眺めてゐた。

さて、彼等がうちつれて歩いて行く時に、嚮導は老紳士に對つてその地方から巡禮の旅に出て來たミスタア、フィアリング〔氣遣氏〕といふ者を知つてゐなかつたかと尋ねた。

オネスト　知つてゐましたよ、大さうよく、と彼は言つた。あの人は「事の根」〔註。人の性質の最も大切なところ。ヨブ記一九・二八に「事の根」とあるのが典據〕をもつてゐたのですが、しかし私の生涯に出逢つた者の中でも極めて厄介な巡禮のひとりでした。

グレイト・ハート　あの人のことを御存知だといふことは分ります、まさにその通りの性格を描かれましたから。

オネスト　存じてゐるどころか！　あの人とは大さう仲のいい道連でした。殆んどいつも一緒にゐました。あの人がこれから後どういふことがわれわれの身に起るであらうかと考へ始めた時にも私は一緒にゐたのです。

グレイト・ハート　私は主人の家から「天の都」の門まで、あの人の嚮導を致しました。

オネスト　では、どんなに厄介な人かといふことを御存知でしたね。

グレイト・ハート　知つてゐました、でも、十分それに耐へることが出來ました、私のやうな職業に從事する者は屢々あのやうな人の案内を頼まれるのですから。

オネスト　ではひとつ、あの人のことを、またあの人が御案内の下でどういふ風に振舞つたかといふことを聞かせていただかうではありませんか。

グレイト・ハート　何ですよ、あの人はいつも彼が行くことを願つてゐるところへ行き損ひはしないかと氣遣つてゐたのです。それに少しでも反對するやうなことを聞くと、誰がどんなことを言つても、はらはらとするのです。一月以上もずつと「絶望の泥沼」に號いてゐて、その前を何人もの人が行くのを見たにも拘らず、又彼等、その中の多くの者が手を貸してやらうとしたにも拘らず、思ひ切つて踏み出さうとしなかつたといふことです。と言つて、もとの道に引返へさうともしないのです。「天の都」と彼は言ひました、若しそこへ行かなければ自分は死ぬるに違ひない、と。それでゐて、あらゆる困難に氣を落し、どんな者がその道に捨てた藁にも蹉跌くのです。さて、今も申しましたやうに、大分長い間「絶望の泥沼」の中にあつた後、或日さし麗かな朝、どうしてやつてのけたのか存じませんで、とにかく、踏み出しまし

た、それでまあ乗り越えたわけです。が、越えた時にも彼は殆んどそれを信じようとしませんでした。あの人は「絶望の泥沼」をその心にもつてゐたやうです、彼が到るところに持ち歩いた「泥沼」ですね、さもなければ、とてもああいふ風ではあり得なかつたと思ひます。で、彼は「門」へ辿り着きました。私の言ふ意味はお分りでせう、この道の始まるところに立つてゐるあの門です。で、そこでも亦、思ひ切つて門を叩く前にずゐぶん長い間立つてゐました。門が開かれた時には後退をして、他人に先をゆづり、彼は資格のない者だと言ふのです。彼はその中の或者より前に着いてゐたにも拘らず、多くの者は彼より先に入つて行きました。そこに、あの不憫な男は戦きながら、恐ぢすくみながら、立つてゐたのですが、きつと、見る者の心に憐れを催さしめたことと思ひます、と言つて後へ立返へらうともしないのです。たうとう、彼は門にかかつてゐた槌をとつて小さくとんとんと叩きました。すると、或人が門を開けました、が、彼は前のやうにたぢろぎました。門を開いた人は彼の後から歩み出でて、言ひました。汝、戦ける者よ、汝は何を求めるのであるか、と。それと共に彼は地にうち倒れました。彼に物を言ひかげた人は彼がこんなに氣の弱いのを見て不思議に思ひました。そこで、彼に言ひました、平安汝にあれ、起きよ、私は汝の爲に門を開いたのである、入るがよい、汝は祝福せられ

たのであると。それを聞いて彼は起ち上り、戦きながら入つて行きました、が、中へ行つた時には顏を見せるのを恥ぢました。さて、御存知の風習に依り、そこで暫く待遇を受けた後に、旅路に上るやうにと命ぜられ、またそのとるべき道を教へられました。かういふ風にしてあの人は私どもの家へ來たのです。しかし、門で振舞つたやうに、主人インターブリタアの家でもやはり同じやうに振舞ひました。思ひ切つて訪はうとするまでには、大分長い間、そのあたりの寒さの中にうろうろしてゐたのですが、それでゐて後へ返らうともしない、それに、その頃の夜は長くて寒かつたのです。なあに、懐にはあの人を迎へ入れ、家の慰藉を與へ、元來ああいつた小心な者であるからといふので、強い、頑丈な嚮導を附けて貰ふため、主人に宛てた「窮急狀」をもつてゐたのですが、それにも拘らず、戸を訪ふことを恐れたのです。それで、そのあたりをあちこちとうろつき廻つたあげく、可哀さうに、殆んど餓死をしさうになりました。いやはやその悄氣かへつてゐることと言へば、他の幾人もの人が戸を叩いただけで入つて行くのを見ながら、それでも思ひ切つてやつてのけることが氣遣はれるといふていたらくです。たうとう私が窓から外を見たのだつたと思ひます、戸のあたりをあちこちしてゐる男を見とめましたので、その男のところへ出て行き、何者であるか、と尋ねました。が、可哀さうにその、

目には水がたたへられてゐました。それで、私は何を求めてゐるのかといふことが分りました。そこで、私は入つて行つてそれを家の者に告げ、私どもの主にこのことを知らせました。そこで、彼はもう一度私を送り、お入りになるやうに願つたのです、が、いやもうそれがまた大抵なことではなかつたのですよ。やつとのことで入つて行きました、又、それは主のために申し上げておきたいと思ふのですが、主はあの人に對してとても親切に振舞はれたのです。食卓にある御馳走でそのいくらかのものが彼の皿の上に載せられなかつたものは殆んどありませんでした。すると、あの人は「書狀」をさし出し、主はそれを見て、あの人の願は聽きとどけると言はれました。で、あの人は大分長い間そこにゐるうちに多少元氣になり、以前よりはよほど氣もちが樂になつたやうに見うけられました。といふのは、御存知とは思ひますが、主人は大さう肚の中の優しい人で、特に氣遣ひをする者にはさうなのです。で、あの人に對してもなるだけその元氣を強めるやうに振舞はれたのでした。さて、彼があの場處にある物を一見して、「都」へ行くための旅路に上る支度が出來た時、主人は以前クリスチアンにしたやうに酒の入つた壜と食べるために少少の力づけになるやうなものを與へられました。かうして私どもは出發し、私は彼の先に立つて行きました。が、あの男は物數を言はないのでしてね、大きな聲で

ため息をつくばかりです。

三人の男が絞罪に處せられてゐるところへ來ますと、彼はその最後も亦ああいふことになるのではないかと思ふのでした。十字架と石棺を見た時だけは喜んだやうに見えました。正直なところ、そこではちよつと眺めるために立ち停りたいと言ひました。それからその後しばらくの間は大分元氣にしてゐました。「困難の丘」にさしかかつた時にはあれを物ともせず、獅子をも大して恐れませんでした、といふのは、御存知のやうに、あの人のなやみはああいふもののことではなかつたのです、あの人が恐れるのは最後に受け入れて貰へるかどうかといふことだつたので。

私は「美」の家につれて行きました、あの人がその氣になる前につれて行つたと思ひます。それから又、家に入つた時、あすこに住んでゐる令嬢たちと近附になるやうにさせましたが、交際に顏を出すことを恥ぢましてね。ひとりでゐることを切望するのですが、それでゐて、おもしろい談話はいつでも好きで、よく衝立のかげに隱れて、それを聞くのでした。古いものを見たり、心の中でそれらのもののことを考へたりすることも好きでした。後に私に話したところでは、さきほど出て來た家、すなはち「門」のところにある家と、インタープリタアの家に

ゐたいと思つたが、それを願ふほど大膽にはなれなかつた、といふことでした。

それからまた、「美」の家を出て、「謙遜の谷」へ丘を降りて行く時には、あの人は今まで私の生涯に見た誰にも劣らぬほど見事に降りました。何故なら、あの人は最後に幸福であることが出來さへすれば、自分がどんなに賤しいものであつても一向平氣です。のみならず、谷とあの人との間には何となく心の通ふものがあつたと思ひます、あの人の巡禮の途すがら、あの谷にゐた時ぐらゐ機嫌のよかつたことはなかつたのですから。

そこでは身を横たへ、地面に抱きつき、あの谷に生えてゐる花といふ花に接吻するのでした。（エレミア哀歌三・二九）。今やあの人は毎朝夜明けと共に起き上り、あの谷の中を往來したり、あちこちと歩いたりするのでした。

しかし、あの人が「死の影の谷」にさしかかつた時、私はこの男を失ひはせぬかと思ひましたよ、といふのは、何も立ちかへる意向があつたといふのではありません、それはいつも嫌がつてゐたのです、唯、恐怖しさで死にさうになつたからです。ああ、怪物が私を捉へる、怪物が私を捉へる、と叫び、私はそれをあの人から拂ひ退けてやることが出來ませんでした。あすこでは大騒ぎをしたり、聲を立てたりしましたので、あの手合が聞きつけさへすれば、それだ

けで勢を得て私どもを襲撃するやうにさせたのです。

しかし、これははつきりと氣がついたことなのですが、あの人がそこを通る間、あの谷は私がその前後に知つてゐるいかなる時にも劣らぬほど靜かでした。きつと、あの、あすこに住んでゐる敵どもは私どもの主からあの時、特別のさし止めと、ミスタア、フィアリングがそこを通つてしまふまで手出しをしてはならぬ、といふ命令を受けてゐたのだと思ひます。

何もかもお話しするのは御退屈でせう。ですから、もう一節か二節だけ言ふことにしませう。「虚榮の市」にさしかかつた時、私はあの人が市にゐるすべての人と戰はうとするのだと思ひました。あすこでは二人とも頭を毆られはしまいかと思ひました。それ位人人の愚かな行に對してあの人は逆上せあがつてしまつたのです。「蠱惑の地」でも亦、あの人はすつかり目を覺ましてゐました。が、橋のない川に來た時にはまたふさぎ込んでしまひました。さあ、さあ、と彼は言ひました、彼は永遠に水に溺れてしまふ、これほど多くの里程を經て見に來たあの御顏を樂しんで眺めることは終にないのである、と。

ここでまた極めて著しいことに氣がついたのですが、この時の川の水は私の生涯に見た何時よりも水量が減つてゐました。それで彼はたうとう、靴を濡らすより以上の困難もなしに渡つ

て行きました。彼が「門」〔註。天國の門。〕に向つて上つて行く時にミスタア、グレイト・ハートはやをら暇を述べて、上での歡迎を願ふと言ひました。〔註。これもバニヤンの手抜りである。バニヤンはグレイト・ハートが話をしてゐる者であることを忘れたのである。〕と、彼は言ひました、大丈夫、大丈夫、と。そこで、私どもは双方に別れ、私はそれ以上彼を見ませんでした。

オネスト　では、結局はうまく行つたのですね。

グレイト・ハート　さうですとも。あの人について疑念を抱いたことはありません。あの人は選りぬきの精神をもつた人でした、唯、いつも自分を極めて低いものとしてゐたので、それが彼の一生を自身にもあのやうに厄介なものとし、他人にもあのやうに厄介なものとしたのでした。（詩篇八八）。彼は多くの人より以上に罪に感じ易い人でした。（ロマ書一四・二一、コリント前書八・一三）。他人に害を加へることを恐れるあまり、正しいことでも屢々自分をさし制めようとする、といふのは、それが罪を犯すことになつてはならぬから、といふのです。

オネスト　しかし、それほどの善人がその生涯を通じてあんなに暗い思をしなければならないのはどういふわけでせうか。

グレイト・ハート　それには二種の理由があります。一つは叡智の神がさういふ風になつて

ゐることを望みたまふ、或者は笛を吹かなければならぬ、また或者は泣かなければならぬ、といふわけです。（マタイ傳一一・一六—一九）。ところで、ミスタア、フィアリングはこの低音部を奏でた人でした。あの人やあの人の仲間はサックバット〔註。中世紀の管樂器。トロムボーンのやうに長い管を上下に動かすことに依つて管の中の空氣を震動せしめるやうになつてゐる。〕を吹くので、その調は他の音樂の調よりも哀愁を含んでゐます、尤も、或人の言ふところに依ると、低音部は音樂の基礎であるといふことです。私などは心の憂に始まらぬ信仰の告白には一向氣乘りが致しません。すべての絃の調を合はせる時、通常音樂者の觸れる最初の絃は低音部です。神もまた、御自身のために靈魂の調子を合はせる時には先づこの絃を奏でたまふ。唯、ここだけがミスタア、フィアリングの不完全なところでした、あの人は晩年にいたるまでこれ以外には他の音樂を奏でることが出來なかつたのです。

かういふ風に臆面もなく譬喩を用ゐて、話をするのは若い讀者の才智を成熟させるためです。それに、「默示錄」には救はれた者が喇叭や竪琴を奏で、御座の前にその歌をうたふ音樂者に比較せられてゐるからです。〔註。バニヤンは夢の中の人であることを忘れてゐる。この說明は脚註の中にでも入れて置くべきものである〕。

オネスト　あの人は極めて熱心な人でした。それはあなたがあの人についてお述べになつた話に依つて分ります。困難や、獅子や、また「虚榮の市」はすこしも恐れませんでした。あの人にとつて恐怖であつたものは唯、罪と死と地獄でした、あの「天國」に於けるあの人の身に關はることについて多少の疑念をもつてゐたのですから。

グレイト・ハート　御說の通りです。さういふものがあの人をなやますものでした、さうしてそれらのものは、あなたが適切に言はれましたやうに、そのことに關するあの人の心の弱さから出たもので、巡禮の一生の實行上の部分についての精神上の弱さから出たものではないのです。私は、諺にもあるやうに、その道を邪魔したならば、燒木杭にでも嚙みつくことの出來る者であることを敢へて信じます。だが、あの人を壓迫してゐたものは、どんな人にも容易に拂ひ退けることの出來ないものですよ。

クリスティアナ　その時、クリスティアナは言つた、このミスタア、フィアリングのお話は私の益になりました。私に似た者はゐないと思つてゐたのですが、その善人と私の間には多少似たところがあり、唯、二つのことで私どもは違つてゐます。その人のなやみは大さう大きいもので、外へ爆裂しましたが、私は私のものを衷へしまひ込んでゐました。その人のものは、

また、ひどくその人を迫め立てて、それらのものは待遇のために備へられた家家の戸を叩くことも出來ないやうにさせましたが、私のなやみはいつもいよいよやかましく叩かせるものでした。

マーシー　私も亦心にあることを言はせていただけるなら、その人のものが少しは私の中にも宿つてゐたと申さなければなりません。何故なら、私はいつも、他のものを失ふことを恐れるより以上に「湖」〔註。死の川。〕と、パラダイスを失ふことを恐れてゐました。ああ、と私は思ひました、あすこに住居をもつ幸福さへあれば、それで十分だ、それを得るために全世界を失ふとも、と。

マシウ　すると、マシウは言つた、恐怖は私に私は救に伴ふものを心の中に持つてゐるどころではないと思はせる一つのものでした、が、その人のやうな善人でもさうであるなら、私にも益になるものとならないわけはありません。

ジェイムズ　恐怖なし、神恩なし、とジェイムズは言つた、地獄に對する恐怖のあるところにいつも神恩があるとは限りませんが、しかし、神に對する畏怖のないところに神恩のないことは確實です。

グレイト・ハート　感心だね、ジェイムズ、あなたが言ひ當てましたよ、何故なら、神を畏れるのが智慧の始であり〔註。箴言一・七〕、始がなければ眞中もなく、終もないことは確實です。しかし、われわれはここでミスタア、フィアリングの談話を終りませう、この訣別の辭を送つた後に。

さて、マスタア、フィアリング、汝は恐れき、
汝が神を、また怖れてありき、
ここにある間に、汝を敵に賣る
何事にせよ、行すこともあらむかと。
汝はまた「湖」と「坑」とを恐れたりしか。
他人もかくせしことを願ふなり。
その故は、汝が智慧を缺ける者ども、
かれどちはみづからの身をぞ滅ぼす。

さて、私は彼等が話をしながらなほも進んで行くのを見た。といふのはミスタア、グレイト・ハートがミスタア、フィアリングに終を告げた後、ミスタア、オネストは今一人の人のことを

彼等に話し始めたからである、が、その名はミスタア、セルフ・ウィル〔我儘氏〕であつた。あの人は巡禮であるやうな風をしてゐました、とミスタア、オネストは言つた、しかし私は道の始まるところに立つてゐる「門」へ行つたことがなかつたと思つてゐます。

グレイト・ハート　それについて話をせられたことがありますか。

オネスト　はい、一度二度ならず、致しました。しかし、いつもあの人の氣質そのままの我儘を示しました。あの人は、人も、論も、實例も構ひつけない。その心が行ふやうに促すことを行ふ、その外のことは何ものもあの人に行はせることが出來ない、といふのです。

グレイト・ハート　どういふ主義を抱いてゐたのでせう？　あなたは言つて下さることが出來ると思ふから伺ふのですが。

オネスト　人は巡禮の德と同じやうに惡德にも從つていいものだといふこと、またその兩方を行ふならば確實に救はれるものだといふことを主張してゐました。

グレイト・ハート　どういふ風にですか。最も善い者でも巡禮の德に從ふと同樣に惡德に從ふことがあり得るといふのであれば、大して咎めることは出來ません。何故なら、實際私どもは絕對的に惡德から除外せられてゐるのではなく、唯、目を覺まして努めるといふ條件の下に

除外せられてゐるのです。しかし、これはその人のいふことではないやうに思はれます、さうではなくて、仰有ることを正しく了解したとすれば、あなたの仰有る意味は、彼はさういふことが許さるべきことである、といふ意見をもつてゐたといふのでせう？

オネスト　さう、さう、それが私のいふ意味です、またそれを彼は信じ、且つ行つてゐました。

グレイト・ハート　しかし彼がそんなことを言ふのに對してどういふ理由をもつてゐましたか。

オネスト　それはね、據りどころには聖書があると言ひました。

グレイト・ハート　どうぞ、ミスタア、オネスト、二三個所その細かいところを私どもに示して下さい。

オネスト　さうしませう。他人の妻と關係することは、神の愛したまひしもの、〔註。「ダビデ」のヘブル語の意味は「愛するもの」である。〕ダビデの行つたことである、だから、彼もそれをすることが出來ると言ひました。〔註。サムエル後書一一參照〕。一人以上の女をもつことはソロモンの行つたことである、だから、彼もそれをすることが出來る、と言ひました。〔註。列王記略

上一一參照〕。サラと、エヂプトの敬虔な產婆は虛言を吐いた、神に救はれたラハブもさういふことをした、だから、彼もそれをすることが出來る、と言ひました。〔註。創世記一二・一四—二〇、出埃及記一・一五—二二、ヨシュア記二參照〕。弟子たちはその主の命を奉じて行き、所有者の驢馬を奪ひ去つた、だから彼もそれをすることが出來る、と言ひました。〔註。マタイ傳二一・一—七參照〕。ヤコブは手練と伴りを用ゐて父の遺產を得た、だから、彼もそれをすることが出來る、と言ひました。〔註。創世記二七參照〕。

グレイト・ハート　突拍子もない！　何ですか、あの人がさういふ意見だつたといふのは確かなことですか。

オネスト　私は彼がそれを辯じ立ててゐるのを聞きました、これに對して聖書をもつて來い、これに對して論據をもつて來い、などと。

グレイト・ハート　いかに容赦しても、世の中に存在させてはおけない意見だ。

オネスト　私のいふことを正しく理解して下さらなければなりませんよ。あの人は誰でもかういふことをしていいものだとは言はなかつた、唯、さういふことをした者のもつてゐた德をもつた者は、彼等も亦それをしてもいいのである、と言つたのです。

グレイト・ハート　しかし、そんな結論より以上に誤まつたものがありませうか。これはまるで、これまでの善人は意志の弱いことから罪を犯した、それ故に、彼には縱な心からそれをすることが許されてゐる、といふやうなものです。或は幼兒が一陣の烈風に煽られ、または石ころに躓いて泥の中に身を汚したといふ理由に依り、それだから彼は勝手氣儘に臥轉んで、牡豕のやうにその中にあがき廻つてもいいものだといふやうなものです。何人にせよ、肉慾に依つてそこまで盲にせられ得るとは誰が思ひ得たでせうか。しかしながら記されてあることは眞であるに相違ありません、彼等は不從順なるに依つて御言に蹉跌く、これは斯く定められたるなり。（ペテロ前書二・八）。

その惡德に耽溺するやうな者が敬虔な人の德をもつことが出來ると、彼が想つてゐるのは他の妄想と同じやうに甚しい妄想です。それはちやうど、犬が私は子供の惡臭紛紛たる排泄物を嘗めるのであるから子供の品性をもつてゐる、或はもつことが出來ると言ふやうなものです。神の民の罪を食べてしまふ（ホセア書四・八）ことはその德を具へた者の徵ではないのです。なほ又そんな意見をもつてゐる者が現今その衷に信仰や愛をもつてゐるとは信ぜられません。しかし、あなたが彼に對して强硬な反對論を唱へられたことを存じて居ります、彼は自分のために

どういふ辯解をすることが出來ましたか、伺はせて下さい。

オネスト　それはね、意見のためにこれを行ふのは、これを行つてしかも意見ではそれに反對を唱へるよりも、よほど正直なことのやうに思はれる、と言ふのです。

グレイト・ハート　極めてよくない答辯だ、私どもの意見がさういふことがらに反對であるのに肉慾の手綱を弛めるのは惡いことではありますが、罪を犯してそれをすることに對する寬容を抗辯するに至つては一層惡いことです。一つは偶ゝ傍觀者を蹉跌かせることがあります、今一つは彼等を說きつけて係蹄の中へ陷れるのです。

オネスト　あの人の口を有たないで、あの人と同じ考の者はたくさんありますよ、で、それが巡禮に旅立つことを現在のやうに價値のないものとするのです。

グレイト・ハート　御說の通り、またそれは嘆かはしいことです。しかし、パラダイスの「王」を畏れる者は彼等すべての中から出て來るでせう。

クリスティアナ　世の中には奇體な意見がございます、私はいよいよ死ぬるといふ時になつて罪を悔改めても十分間に合ふと言つた人を存じてゐます。

グレイト・ハート　さういふ連中はあまり聰明でもありませんよ。その命のために、二十マ

イル走らなければならぬ一週間をもつてゐたとしたならば、その人はその旅行をその週の最後の時刻まで繰り延べることは嫌だと思ふでせう。

オネスト　仰有る通りです、が、しかし自ら巡禮を以て任じてゐる大抵の者が實際さういふことをやつてゐるのです。ごらんの通り、私は老人で、幾日もこの道の旅人でした、それで、多くのことに氣がついてゐます。

その前にある全世界を吹き捲くるやうな勢で出發し、それでゐて「荒野」に於ける人人のやうに數日の中に死んでしまひ、斯うして終に「約束の國」を眺めることの出來なかつた者を見ました。

當初巡禮を志した時にはすこしも望があるやうでなく、一日も生きることは出來ないと思はれたのですが、それでゐて、大さう立派な巡禮であることを示した者を見ました。

大急ぎでさきへ走り、またしばらくして後にはちやうど同じやうに速やかに後へ走つてかへる者を見ました。

當初巡禮の一生のことを大さう賞めて語り、しばらくして後にはこれに反對して同じやうに語つた者を見ました。

最初パラダイスへ向つて出發した時にはさういふ場處があるといふことをきつぱりと斷言した者、それが殆んどそこまで行つた時に、返つて來てそんな處はないと言ふ者を聞きました。

抵抗せられた場合にはどうするかといふことを高言する者、それが危急虚報を聞いてすら信仰より、巡禮の道より、また一切のものより遁げ出すのを聞きました。

さて、彼等が斯ういふ風に道を辿つてゐると、そこへ彼等の方へ走つて來る者があつて、言ふには、方方、またかよわい類の人人、命を大切にせられるなら、處置を講ぜられるがよろしい、この先には盜賊がゐますよ。

グレイト・ハート　するとミスタア、グレイト・ハートは言つた、それはいつかリトル・フェイスを襲つた三人のやつらです。さあ來い、と彼は言つた。こちらはそなへが出來てゐるぞ。そこで彼等は先を急いだ。今や、どうしても惡黨どもに逢ひさうに思はれたので、道を曲る毎に見配つたのであるが、ミスタア、グレイト・ハートのことを聞いたのであるか、或は何か他の獲物でもあつたのか、巡禮たちには寄りつかなかつた。

クリスティアナはこの時自分と子供たちのために旅館があればいいと思つた、彼等はくたびれてゐたから。すると、ミスタア、オネストは言つた、この先少し行つたところに一つありま

すよ、そこには極めて尊敬すべき御弟子、ガイオといふものが住んでゐます。〔註。聖書にはガイオといふ名の人が四人ある。ここに言及せられてゐる者はパウロの宿の主人であつたガイオであらう。ロマ書一六・二三、コリント前書一・一四參照。ヨハネ第三書はこのガイオに宛てたものであり、その第五節に『愛する者よ、なんぢ旅人なる兄弟たちにまで行ふところみな忠實をもてなせり』とある。〕そこで一同そちらへ立ち寄ることに決めた、が、これはこの老紳士がこの人についてかういふ好い評判を傳へたからのことであつた。やがて、その戸まで來た時、彼等は叩かないで入つて行つた、一般の人人は旅館の戸を叩かないのが常であるから。そこで、彼等は宿の主人を呼び、彼はやつて來た。で、彼等はその夜そこに泊ることが出來るか、と尋ねた。

ガイオ　はい、そりやもう、あなた方が眞個の人でゐられるなら、と申すのは私の方は巡禮の外にはお客をとらないのでございます。すると、クリスティアナ、マーシー、また少年たちは、この宿屋の亭主が巡禮の愛好者であるといふので、いよいよ嬉しく思つた。それで、部屋を求め、彼は一つをクリスティアナとマーシーと子供たちのために、また一つをミスタア、グレイト・ハートと老紳士のために示した。

グレイト・ハート　すると、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、ガイオさん、晩餐には

何がありますか。この巡禮たちは今日ずゐぶん遠路をやつて來て、くたびれてゐるのです。

ガイオ　日も暮れましたので、とガイオは言つた、出て行つて食物を求めるのは都合が惡うございます、が、私どものもち合はせてゐるもので、御滿足の行くことなら、どうぞ召し上つて下さい。

グレイト・ハート　お家にあるもので滿足しますよ、お世話になつたところから考へると、あなたは手近な品に事を缺いたことのない人だから。

すると、彼は下へ降りて行つて、その名をテイスト・ザット・ウィッチ・イズ・グッド〔須味善美氏〕といふ料理人に話して數だけの巡禮のために晩餐の用意をするやうにと命じた。さうした上で、再び上つて來て、言ふには、さあ、皆さん、よくいらして下さいました、おもてなしの出來る宿をもつてゐることを幸に存じます。で、夕餐の用意が出來る間、若しおよろしければ、何かためになるおはなしをして、樂しみ合はふではありませんか。そこで一同は言つた、承知しました。

ガイオ　するとガイオは言つた、このお年を召した奥さまはどなたの御連合ですか。またこの若いお嬢さまはどなたのお女御ですか。

グレイト・ハート　この女の方は往時の巡禮、クリスチアンの妻で、これらはその子たちです。この娘さんは御近附の方で巡禮の旅について來るやうに說きつけられた人です。少年たちは皆父に似て居り、その迹を踏んで行きたいと思つてゐます。それどころか、老巡禮が宿つた、どの場處でも、その足のどの足迹でも、彼等の心に喜びをあたへ、彼等はその同じところに宿りたい、踏みたいと思ふのです。

ガイオ　すると、ガイオは言つた、これがクリスチアンの御家內ですか。これらがクリスチアンのお子たちですか。私は御主人の父上を存じ上げてゐます、そればかりか、その父上の父上を。あの血統を引いた人には善良な人が多うございましてな、その先祖は最初アンテオケに住んでゐられました。〔註。使徒行傳一一・二六に『弟子たちのキリステアン〔クリスチアン〕と稱へらるることはアンテオケより始まれり。』とある〕。クリスチアンの親たちは（御主人がその話をせられるのをお聞きになつたとは思ひますが、）立派な方でした。あの人たちは私の知つてゐる誰よりも以上に大いなる德と、巡禮の主やその道やまた主を愛する人人のための勇氣をもつた者であることを示されました。私は御主人の身內の方で眞理のための試練に堪へられた多くの人たちのことを聞いてゐます。御主人がそこから出て來られた家族の最初の者の一人であつたステパノ

は石で頭を擊たれました。（使徒行傳七・五九、六〇）。この一族の今一人の者、ヤコブは劍の刃で斬り殺されました。（使徒行傳一二・二）。御主人がそこから出て來られた家族の昔の人人、パウロやペテロを言はないまでも、獅子に投ぜられたイグナティウスがあり、その肉を骨から寸斷せられたローマーヌスがあり、火中に男を發揮したポリカルプがありました。〔註。これらはパニヤンの愛讀書、ジョージ・フォックスの『殉敎者列傳』*The Book of Martyrs* の中の記事を述べたものと思はれる。イグナティウスは使徒ヨハネの弟子で、アンティオケの監督、ローマ皇帝トラヤーヌスに依つてローマに護送せられ、一〇七年十二月二十日殉敎の死を遂げた。ローマーヌスといふ殉敎者は二人ある。一人はローマの人で聖ロレンゾに洗禮を授けられ、二五五年ローマ皇帝デキウスのキリスト敎徒迫害の犧牲となつた者であり、今一人はアンティオケの會史で、ローマ皇帝ディクレティアーヌスの迫害の下に命を奪はれた。ポリカルプも使徒ヨハネの弟子で、スミルナの監督、一六九年スミルナで殉敎の死を遂げた〕。日中、籠に吊り下げられて蜂に食はれた者もあり、袋に入れられ、海に投ぜられて溺死した者もあります。巡禮の生涯に對する愛の故に傷害と死の苦しみに遭つたあの家族のすべての者を數へ上げることはとても出來ないことです。それに私は御主人がこのやうな四人の少年たちをあとに殘されたのを見て唯嬉しいといふより外はありません。どうかこの人たちがお父さんの名を落さず、お